IS　一角と少年　にっ!

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　一角と少年　にっ！

【Ｎコード】
Ｎ１０３４Ｘ

【作者名】
楚良

【あらすじ】
今度は夢じゃなく、現実。
もう一度、物語を始めよう！
本当の僕の物語を！
※『ＩＳ　一角と少年』の続きです。
そちらを見ても楽しめますが、見なくても楽しめるように書きたいと思います。

プロローグ（前書き）

どうも、作者の楚良です。
当小説は『ＩＳ　一角と少年』の続きです。

まぁ、前作は夢オチだったので、今度は現実です。
しかもＩＳがいろいろごっちゃだったんですが、今回は正真正銘、
ユニコーンガンダム一筋で生きたいと思います。

完結へ向けて、気合と根性、そして勢いで頑張りたいと思っている
ので、応援よろしくお願いします！！

プロローグ

少し前に、夢を見た。
自分がＩＳ学園に行って、いろんなことをする夢。

正直、馬鹿げてた。
一角のワンオフなんて、発動させたことなかったし。
第二形態なんて行けるはずもなかった。

だって、僕は本当は弱虫で、意気地無しで、ＩＳに乗って戦闘なんてできないんだから。今まででのＩＳの稼働時間なんて、一日はおろか、半日にも満たない。だからワンオフやら第二形態とは、ぶっちゃけたらほとんど無縁だ。

でも、今度は違う。
夢でも、幻でも、何でもない。現実だ。
本当の本当に、正真正銘、正式にＩＳ学園に入学する。

男でＩＳを動かせるなんて、僕だけだ。
夢で見たあの優しそうな男の人は今の今まで公表すらされていない。
それはつまり、僕だけ、ということなのだ。

別に気にはしてない。
ただ、１人はやっぱりさみしいだろうなぁ、そう思っただけだ。

「今日からここで３年間、かぁ・・・」

何事もなく、とはいかないと思うけど、出来るだけ平和に過ごしたい。

そんな僕の願いは、入学初日に砕かれたのだった。

プロローグ（後書き）

次回はとりあえず、キャラ紹介。
主人公とヒロイン（一夏）と使用ＩＳ紹介です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

キャラ紹介

名前：アルフォンス・ラプラス（愛称はアル

性別：少年（男の娘

年齢：１３歳（飛び級

性格：人の前では強気だったりするが、実は弱虫で意気地なし
　　基本優しいが、怒ったら物凄く怖い

容姿：後ろ髪が少し長めのセミロング

備考：フランス出身の男の娘で本作主人公。
家族はいない。１人旅の途中束になぜか興味を持たれてついて行く。
束の身の回りの世話をすることから料理や家事が得意。
意外に努力家で飛び級ができるほど頭が良かったりもする。
誕生日は４月９日。琥珀色の髪と瞳で、身長にみあわず物凄い大食漢。
後ろ髪がなぜか長くて、ゴムでまとめている。１人旅で鈴と千冬とラウラ、幼いころにシャルロットと面識あり。
性格はちょっと感情的。
少し引き気味だが勝気や強気な面を装ってはいる。
それでも本当は弱虫で意気地なし。
怖いものは怖い、女性でも苦手な人にはあんまり係わりたくないと思ったりもしている。それでも根は強く、本気でやると決めたことには本気で取り組む。
主人公なのでやっぱり鈍感。
使用ＩＳは『一角・零式』（ユニコーン）

ＩＣＶ：水橋かおり（ラハール的な声

イメージイラスト　←

＞ｉ３２００９―２０５４＜

名前：織斑一夏

性別：女性

年齢：１５歳

性格：基本優しい。原作に似た性格

容姿：千冬の学生時代？

備考：原作主人公にして本作ヒロイン。なんでか女。
前作ではアルの兄的な立場だったが、今回は一転してメインヒロイン。
黒髪で千冬似。細かいところは原作同様。
アルの学園での一番最初の友達で、箒と鈴の幼馴染。
家事全般が普通の女子と比べて異常に高く、そこらへんのお母さんよりもお母さんっぽい。当然料理とマッサージも大得意。
恋愛に関しては意外に積極的。一番最初に行動に出ることが多い。

使用ＩＳはやっぱり白式。第二形態に行く予定は今のところなし。

ＩＣＶ：豊口めぐみ（はっちゃけた感じ

機体名：『一角・零式』（名称は一角、もしくはユニコーン

備考：アルの専用機にして束お手製の力作。
メインカラーは白で展開装甲を持った全身装甲のＩＳ。
待機状態は純白のネックレストップ。
アルの専用機なのだが、稼働時間が半日にも満たない。
今のところはドイツで行ったラウラとの模擬戦と、初期のフォーマライズとフィッティングのみ。
稼働時間が短すぎるため、どんなＩＳかは千冬でも謎。
アルの感情に反応して姿を『デストロイモード』に変えることがあるが、今のところはない。元ネタはユニコーンガンダム。

機体装備：

・ビームマグナム
一角の主力武器。マグナムの名の通り威力は絶大。
最大５基のカートリッジタイプで、使える弾数は予備のカートリッジを含めて最高１５発。威力が高すぎて使い勝手が悪い。

・ビームサーベル
バックパックに２基と両腕に１基ずつの計４基。

両腕のグリップは１８０。展開可能。バックパックの2基は基本的には使えないが、デストロイモード時にだけ展開される。

・ハイパーバズーカ
一角唯一の実体弾火器。
時間差で炸裂するタイプの弾と通常の弾を撃つことができる。
誘導性はそこまで高くはない。

・ビームガトリングガン
４銃身式大型機関砲。
両腕に1挺ずつ、もしくは連結させて片腕に2挺装備可能。
両腕に4挺ずつ装備させることも出来るが、アル本人は片腕でもすごく重い、とのことから1艇を手で持って使っている。
エネルギー充填式で、コールしてからすぐには使えないという欠点があるが、過剰な威力を誇るビームマグナムよりも多くつかわれる。

・シールド
４枚の花弁状のパーツが内蔵されたシールド。
中心部に対ビーム用の『Ｉフィールド』発生装置が取り付けられている。
デストロイモード時は花弁のパーツがＸ字型に展開され、Ｉフィールド発生装置が露出される。

キャラ紹介（後書き）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０１話　泣き虫男性操縦者

『インフィニット・ストラトス』
省略、頭文字をとって『ＩＳ』

今、世界はこの『ＩＳ』のせいで傾いている。
男女のパワーバランスが崩れ去り、女尊男卑の世の中になっている。
それは何故か。
その理由はＩＳの謎の一つが関係していた。
ＩＳは”女性”にしか動かせない。
このＩＳ、今までの兵器を凌駕する力を持っている。
たった一機で全２３４１発以上のミサイルの半数を迎撃できたり、
大量に投入された軍事兵器の大半を破壊することが可能。
それを知らしめたのが『白騎士事件』と呼ばれる事件だ。
そんな、強力な力を持つＩＳ操縦者などを育成するのがＩＳ学園だ。
基本、女子しかいないが、そんな基本を覆す存在が現れた。
ＩＳを動かせる男。
名前をアルフォンス・ラプラス。長いので愛称はアル。
本人はまだ１３歳なのだが、飛び級ができるそうなので、この年で
ＩＳ学園に入学することになっている。
そんなアルは、今、窮地に立たされていた。
（こ、これは・・・やばい・・・）

一番前で真ん中の席。
右を見れば女子、左を見れば女子、後ろを振り返れないがたぶん女子。
周りは全員女子。しかも全員年上。
男でＩＳを動かせ、異例でこのＩＳ学園に飛び級で入学したアルは、この圧迫感を感じ、物凄いと言っていいぐらいヤバかった。

周りの女子はもの珍しそうにアルを見ている。
当然だろう。アルが男なのだから。しかも年下の。
周りに知っている人もいなければ、親しい人もいない。

このＩＳ学園に入れば、基本は男子との接触がない。皆無と言ってもいい。
だがそこに１人だけ男子が入ってきたのだ。珍しくないわけがない。
さらにはＩＳを動かせる。それだけでも十分珍しいだろう。

「――――ん、ラプラス君っ」

「うぇ！？あ、はい！」

突然名前を呼ばれ、アルは大きな声を出しながらガタッと音を立てながら立ってしまった。少しぎこちなく、後ろからくすくすと笑う声が聞こえた。
恥ずかしさと圧迫感のせいでさらにこの空間から脱出したくなってくる。

「あ、突然大声出してごめんね。でも、今自己紹介中で、『あ』から始まってラプラス君の名前が『ア』で、ラプラス君の番だから、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「え、えっと、そんな謝んないでください。じ、自己紹介しますから、落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか？ほ、本当ですよね？約束ですよ。絶対ですよ！」

あわてていて、忙しそうにしている山田先生をなだめる。
さっきから何度もぺこぺこと年下のアルに頭を下げている光景はさすがにアル本人も見たくない。というかそういうのが苦手だ。

そして今度はがばっと顔をあげてアルの手をとっている。
熱心に言っている辺り、仕事熱心なのだろう。
その心はわかるが、アルにとっては少し自重してほしかった。
そう、再び視線が集まってきているのだから。

（こ、こう言うのは第一印象が大事なんだ。深呼吸して、あくまで普通に）

すーはー、と深呼吸をするアル。
第一印象がダメであればこの学園で最低1年、運が悪ければ3年間環境が悪くなり居場所がなくなるとみた。

後ろに振り向き、視線が集まることを自覚する。
こんな状況で、内気というかなんというか、意気地無しなアルは早く終わらせたかった。

「ア、アルフォンス・ラプラス、です。フ、フランスから来ました。な、長いんで『アル』って、よ、呼んでください」

がちがちで？み？みだが何とか言えた。

綺麗にお辞儀もし、第一印象としては悪くないはず。
頭をあげれば・・・全員が『他に何かないの？』的な顔で見ている。
状況的にいえば『もっといろいろしゃべってよ』とか『これで終わりじゃないよね？』的な空気が流れ始めていた。
はっきり言ってしまえば、無駄に期待されている。

そんな状況で、次第にアルの目尻には涙が浮かんできた。
本当に小さく、近くの人でもよく見なければわからないものだが、今のアルは確実に、あと一歩で泣きだしそうだ。

「・・・い、以上です」

スパァンッッ！！！！
突然思いっきり頭を殴られた。

「ぁぅ・・・」

頭を押さえたままその場でうずくまるアル。
威力は申し分ない。というか痛すぎる。
うずくまって涙をこらえるが、さすがに今ので確実にぽろっと涙が出た。

「挨拶もまともにできんのかお前は」

「ち、千冬さ――――」

スパァンッッ！！！！
再び頭に衝撃が。たぶん出席薄で叩いてるんだろう。

「ここでは織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生・・・」

頭を押さえながら席に座る。
涙は、たぶん出てないはず。
泣いてるって言われても、泣いてないって返すつもりだ。

（あー、もうダメ。泣きそう、というか泣いてもいいかな？泣いたら弱虫ってのがばれるけど、いいよね？）

頭の中での自問自答を繰り返すアルだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ＨＲ、さらに１時間目のＩＳの基礎理論が終わり、休み時間。
案の定、アルの自問自答は答えが出ないで終わった。
頭の痛みはまだ抜けない。
というか、ずっと頭を押さえていたせいでまた殴られたぐらいだ。

（痛いなー、本気で殴ることないのに・・・）

やっぱり頭を押さえているアルは机に突っ伏している。
はっきり言って、ＩＳ関連は何も問題はない。
あの大天才、篠ノ之束その人に教えてもらっらのだから。

休み時間。
それは普通なら心を休め、次の授業に備える時間だ。

だが、今の状況は何とも言えない。

他のクラスからの女子が廊下からアルを見ている。
教室でも同じ。仲のいい数人が集まってアルを見ている。
そんな状況はやはりアルには耐えかねる物だった。

「えっと、あの、ラプラス君・・・でいいんだよね？」

「ぅ・・・？」

頭を押さえていた状態から、声をかけられた。
ＩＳ学園に入ってきて、はじめて声をかけてもらえた。
嬉しいと言えばうれしい。嫌ではなかった。

ちょっと変な声を出して反応してしまい、声をかけてくれた女子は、
なんだか少し困惑気味。それでも話そうとしてる。

「私、織斑一夏。えっと、頭大丈夫？」

心配してるつもりなのだろうが、聞き様によってはバカにされている。
でも今のアルは心配してくれる人＝優しい人が成り立っているためバカにされている、なんて微塵も思ってない。

そしてこの少女――織斑一夏と名乗っていた。
『織斑』の性を持つことから、このクラスの担任である千冬の姉妹なのだろう。顔を見てみればどことなく似ている。
綺麗な黒髪に、千冬に似た顔。
厳しい姉の千冬とは対照的で、明るくて優しそうだ。

「な、泣いてたの・・・？」

恐る恐る聞かれた。
目尻には涙。目は少し充血してて赤い。
頬の辺りはちょっと赤くなっていた。

「な、泣いてないよ？」

意気地なしで弱虫なため、強気を装っている。
だから泣いてる、なんて言ったらますますバカにされるだろう。

一夏も、そこら辺は詮索はしない。
アルのことを考えての行動だろう。
この気遣いはアルにとって物凄くうれしかった。

「ラプラス君、千冬姉がごめんね。というか知り合い？」

「アル」

「え？」

「名前。名字じゃなくて『アル』って名前がある」

最初の自己紹介のときにしっかり言っていた。
名字じゃなく、『アル』と呼んでほしいと。

それを聞いて一夏は笑いながら、アルに手を出した。
アル本人はどうしたんだろうと思っている。

「私も、一夏ね。アルの学園での友達第一号だよ」

「・・・うん、よろしく一夏」

第０１話　泣き虫男性操縦者（後書き）

次回はセシリアが登場！
弱虫なアル君に突っかかります！

そしてこの小説では、箒が空気と化します。
まぁ、出番があるときはしっかりあります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０２話　友のための怒り

「ちょっと、よろしくて？」

２時間目が終わり、再び休み時間。
隣の席だった一夏と話している途中、突然声をかけられた。

声をかけてきた相手は、綺麗な金髪を持った女子だった。
先生に注意されないことから地毛だろう。そこから見るにアルと同じ外国人だということがわかる。

ロールがかかったその髪は、いかにも高貴なお嬢様。
雰囲気も『まさしく』で、その女子もまたしかりだ。
しかも、ＩＳのせいで女性が優遇されているせいか、上から目線。
女性＝偉いの構図を簡単に表してるようにも見える。

「聞いてます？お返事は？」

「え、あ、はい。なんですか？」

消極的、というか引き気味なアルは丁寧口調で聞き返す。
基本、こう言うのは受け身になってしっかり答えれば何もないはずだ。
アルの返事の仕方も悪くはないはず。
なのに、相手の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まぁ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「え・・・」

アルは、ついでに横で聞いていた一夏もだが、この手の相手は苦手だ。

ＩＳが使えるからＩＳ操縦者は偉い。だから女は偉い。

確かに、ＩＳが使えるのはいい。だがその力を振り回せば暴力となんら変わりないのだから。

「ぅんと、僕、君のこと知らないから、そんなこと言われても・・・」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補制にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「うん・・・」

事実、アルは世界を回ったことがあるが、『オルコット』という名にも『セシリア』という名も、これまで一度も耳にしたことがなかった。

自己紹介でいろいろ言っていたが、アルの頭はその状況から抜け出したいという思いでいっぱいだったから聞いてなかったのだろう。

一夏も名前を聞いて、あー、みたいな顔をしている。

ようやく名前を教えてくれたことの方が代表候補制ということより印象的だったのだろうか。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じにすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実を少しは理解していただける？」

「そうですか。これはこれは、僕は運が良かったんですね。ラッキーってやつです」

「・・・バカにしてますの？」

アル本人は微塵もバカにしているつもりはない。
セシリアが幸運と言ったので、素直に喜んだだけだ。
ちょっと棒読み気味に聞こえるのは気のせいだろう。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入ってこれましたわね。唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらいは知的さを感じさせるかと思ってましたが、期待はずれですわね。逆に幼稚なんじゃなくて？」

ぷちっ。
頭の中で何かが切れる音がした。
それは聞いていて怒りがわいてきた一夏でもなければ、他の女子でもない。
アル本人だ。

「”ＩＳについて何も知らないくせに”？　バカにするのも大概にしてほしいな。僕は君なんかより幼稚じゃないんだからたくさん知ってるよ。なんなら教えてあげようか？”お嬢さん”」

今度は受け流しでも何でもない、ただの挑発。
先にバカにしてきたのはセシリアだし、束本人から直々に教えてもらっているアルに知識で勝つのは本当に難しいだろう。
だがセシリアが挑発に乗ってこようとした時だった。

キーンコーン、カーンコーン

ナイスタイミングでか、チャイムが鳴り響いた。
アル本人はこんな挑発をするんじゃなかったと、言った後に後悔していたため、このチャイムが福音に聞こえていた。

「っ・・・！また来ますわ！逃げないことね！よろしくって！？」

イヤだ、と言いたかったが言う勇気もないのでうなずく。
かつかつと足音を立ててセシリアは戻って行った。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「これより、再来週行われるクラス対抗戦代表者を決める。クラス代表は、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、まぁ、クラス長と考えてもらって構わない。自薦他薦は問わん。誰かいないか」

３時間目の授業での千冬の第一声。
その言葉を聞いて一瞬でアルは悟った。

絶対面倒だ、と。

そしてその予想は当たった。
それはなぜか。それは――――

「はいっ、アル君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「え・・・？」

「では候補者はアルフォンス・・・他にはいないか？いなければ無投票当選だぞ」

「え、いや、僕はそんなの――――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上覚悟してやれ」

反論は聞かない。聞いてくれない。

1、2時間目に続き3時間目でも泣きそうだ。

だが、泣いたら泣いたでまたセシリアにバカにされるだろう。

それだけは避けたかった。

聞いてもらえないだろうがもう一度反論しようとした時だった。

甲高い声が、アルの言葉を遮る。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンッと机をたたきながらセシリアが立ち上がった。

全員が振り向き、視線はセシリアに集中した。

そしてさらにセシリアは続ける。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくし

にとっては耐えがたい苦痛で――――」

半分以上アルをバカにする内容でもあった。
それを聞いて、さらに怒りをあらわにする人物が一名。
先ほどのセシリアと同様に、という訳ではないが立ち上がって言い放った。

「あんた、さっきの休み時間といい、今の発言といい、アルのことバカにしすぎじゃないの！？それに、そんなこと言うんだったら自薦して自分からクラス代表になればいいじゃない！」

その人物とは一夏だった。
アルをバカにする言葉にもう堪忍袋の尾が切れたのだろう。
友達がバカにされたのは耐えきれないと言った形相でセシリアに言葉をぶつけている。

教卓の前では千冬が頭を抱えていた。
このバカが・・・、と言いたげでため息をついている。

「い、一夏！ぼ、僕のことはいいから、ね？」

「よくないよ！アル、自分のことバカにされるんだよ？私は黙ってられないね」

「えぇ！？いや、でも」

「それに、日本のこともバカにするようなこと言ってたけど、世界一おいしくもない料理で何年覇者なんだか」

「あ」

言ってしまった。言ってはならない禁句を言ってしまった。
しかも何気なくさらっと。普通に。
アルは恐る恐るセシリアの方を向くと、顔を真っ赤にしたセシリアが完璧に怒りをあらわにしている。完全にやってしまった。一夏がやってしまったのだ。

「決闘ですわ！」

「受けて立とうじゃない！」

「わざと負けたりしたら小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「あいにくと、私はわざと負けるほど優しくないの」

勝手に話が進んでる。
アルの願いはなんでもいいから誰か助けて、だった。
だがそんな願いもむなしくこの2人の話を聞きいれる千冬。
もうアルに逃げ場はなかった。

「決まったようだな。勝負は一週間後の月曜の放課後。第3アリーナで行う。それまで織斑とオルコット、アルフォンスはそれぞれ用意をするように」

「え？僕も？」

「当然だ。他薦されたものに拒否権はないと言ったはずだろう？」

一瞬でアルの望みは崩された。

第０２話　友のための怒り（後書き）

次回は箒が登場？（予定はたぶんだけどあり
一日目が終わってアルのルームメイトとは？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０３話　ルームメイト（前書き）

だ、ダメだ・・・。
箒を出そうとするのに、なかなか出せない。
これは、マジで空気になるかもしれない・・・。
今回はやっぱり箒は出ません。

第０３話　ルームメイト

一日目の授業がすべて終わり、今は放課後。
一夏とセシリアの言い争いに巻き込まれ、少し面倒なことながらアルもセシリアと戦うことに。

そして今は休み時間と同じ状況。
他のクラス、さらには他の学年からの女子が来てさぁ大変。
昔日本ではやったウーパールーパー状況だ。

学食に行くにしてもぞろぞろと付いてくる。
アルの大食漢ぶりをみて引いた者もいれば面白がる者もいた。

「あ、ラプラス君、ちょうどいいところに。寮の部屋が決まりましたよ」

「へ？」

一週間だけ学園外からの通学を言われていたのだが、何かの聞き間違いだったのだろうか。普通に疑問符を頭に浮かべる。
そんな顔をみて、ちょっとだけくすくすと笑う山田先生は、アルに部屋の番号が書かれた紙とその部屋のキーを渡す。
いまだにアルの顔は疑問な顔だった。

「ぁ、荷物」

「それならここにあるぞ」

突然現れた千冬に少し大きめのバッグを渡された。

というかいつからいたのだろう。瞬間移動だと思ってしまう。
渡されたバッグにどこか見覚えがあったアルは、すぐさま中身を確認した。

着替え、愛用のゴム、ＩＳ調製用どこでもディスプレイ（束オリジナル）、純白のネックレストップ、他いろいろ。

見覚えがあるものがどっさり。
しかもめちゃくちゃお気に入りのものだったり、愛用してるものとかだった。

「とある人物からの贈り物だ。感謝しておくように」

「はい。ありがとうございます」

そのバッグを背負い、すぐさま自分の部屋へと向かったアルだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

しばらくして自室に到着。
部屋番号は１０２５室。確認、大丈夫、しっかりと合っている。

早速といわんばかりにドアノブに手をかける。
鍵はかかっていないようだ。
そのまま中に入り、どういう部屋か確認した。

「おぉ」

「あ、ルームメイトの人？」

「っ！？」

突然声が聞こえてきた。
ドア越しで声に曇りがあるが、確実に女子だ。
しかも、この状況は激しくやばい。
シャワー室があるから、たぶん相手はバスタオル越し間違いなしだ。

「ごめんね、先シャワー使っちゃって。私、織斑――」

「――い、一夏？」

「ア、アル？」

シャワー室から出てきたのは、今日学園での初めての友達、一夏だった。
その姿は、今しがたシャワーを使っていたためバスタオル一枚。本当にいろんな意味でぎりぎりで、見えるか見えないかの瀬戸際。まさしく絶対領域というやつだ。

露出した太ももや、くびれた腰つき。
片手でバスタオルを押さえている胸など、本当にぎりぎりだ。
ぶっちゃけ、１３歳のアルでも男なので刺激が強すぎた。

「ご、ごめん！み、みるつもりじゃ・・・」

「え？あ！ダ、ダメだよ！？め、目ぇつぶってて！！」

顔を赤くしながら両手で目を隠し、顔を横にそらすアルに対して、

一夏も顔を赤くする。当然アルは反応と対応に困ったのだが、急いで頭をフル回転させて今の状況に至る。はっきり言って見えたら死亡フラグだろう。

「な、なんでアルがここに？」

「ぼ、僕、この部屋って言われたから」

目を隠し、バッグで影を作ってさらにそこに隠れているアルは一夏の質問に答える。少しばかし静かなため、服を着るときにするこすれる音が聞こえて一層アルの心臓に悪かった。

「も、もういいよ」

「う、うん」

影から出てくるアルの目には着替えた一夏がいた。
一夏のかっこうは非常にラフなもの。ホットパンツに半袖。
まぁ、アルは女子の寝間着など、かれこれ数回、しかも子供ものしか見たことがない（幼少時代のフランスで）
どちらにしろ、気が緩んだので何よりだった。

「あ、シャワー使ってもいい？」

「え、あ、うん。どうぞ」

一日の疲れをとりあえず落としたい。
その思いから何事もなく、普通にシャワーを浴びたかった。
アルはちょっとふらふらとした足乗りで脱衣所へ入って行った。

～10分後～

ゴムでまとめていた後ろ髪をほどき、タオルでワシャワシャと頭を掻きながら寝間着姿に着替えたアルが脱衣所から出てきた。
綺麗な琥珀と言ってもいいオレンジ色の髪の毛は、部屋の光でも反射してさらに綺麗に見える。女の子にも見えなくもない容姿は一夏の心をすごい勢いでくすぐった。

「ア、アル。髪、整えてあげよっか？」

「え？いいの？」

「うん♪」

櫛を持って笑顔な一夏。
優しそうな笑顔に、アルは頼むのだった。

「うわぁ、すごいね。女の子みたいにさらさら」

「え、そう？」

「うん。たぶんお母さん譲りなんだね。すっごく可愛いと思うよ」

「そうかな？えへへ」

髪の毛を触りながら感想を言っていく一夏の言葉に、アルは照れてきた。可愛いと言われ、嬉しくなって顔が少しニコッとしてくる。
脱衣所についていた鏡でその顔を見ていた一夏も嬉しそうだ。
終わった後、ベッドの上で胡坐をかいているアルは珍しく髪の毛を

ちょっとだが弄っていた。なんだかいつもと違う感じで嬉しいのだろう。

「おぉ、すごい。アホ毛ができた」

「あ、あれ？」

髪の毛のてっぺん辺りにぴょこっと飛び出たアホ毛。
今までになかったため、ちょっとした違和感。
失敗したかな、と思う一夏だったが、アルはどうしてかぴょこぴょこと動かすことができ、なんだか楽しそうだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

翌日の朝。
一夏の朝はいつも早めだ。

毎朝６時前に起きる。
そして、いつもなら弁当を作ったりするのだが、今は寮で学食があるためその必要はない。だが、それでも早く起きてしまったので、落ち着かなかった。

顔を洗い、歯を磨く。
髪の毛を整え、制服に着替えても今の時間は６時３０分ぐらいだ。

「はぁ、何もすることないなぁ。どうしよ」

そんな独り言をつぶやいている時だった。

突然アルが上半身だけをむくりとおこす。
だがなんだか目がまださめてなさそうだ。

「ふぁ～～、おはよ・・・」

「うん、おはよ」

目をごしごしこするしぐさが何だか可愛い。
意外に、こう言うのはいろんな人の心を打ちぬけるものだ。
そして一夏もまた、心を打ち抜かれた。
だが平常心は保っていられたので変な行動は起こしたりしないから安心してもいい。

「ん～～！！よし、目が覚めた」

今度は伸びるしぐさ。
これもまた、一夏の心を打ち抜いたのだった。

第０３話　ルームメイト（後書き）

平常心は保ってられる。
たぶん大丈夫だ。メインヒロインが暴走しちゃだめだもんね！ｗ

次回はいろいろすっ飛ばして早速バトルでもいいかな？
でもその前に何か入れないければ。それに箒も出さないといけないし。
ん？待てよ。あえて箒は出さないでいいんじゃないだろうか。
あ、そしたら福音戦の前のあれが面倒なことに・・・。

とりあえず、誤字脱字、感想あればお願いします。

第０４話　対抗意識（前書き）

う～ん、今回も箒の出番なし。
出そうだけど出ない。しょうがない？
箒ファンのみなさん、すいません。

第０４話　対抗意識

「アルフォンス、”あいつ”は今あるのか？」

「え？」

「お前の専用機だ」

翌日の授業時間。
少し脱線して専用機他の話。
アルの専用機の話が持ち上がった。
だが少し失敗したようだ。なぜなら――――

『えええぇぇぇぇ！！？』

「うるさい、騒ぐな」

全員が騒ぎ出した。
もちろん、アルが専用機を持っていたことに対してだろう。

ちなみに今日のアルは昨日とちょっと違う。
些細な違いだが、胸元にネックレストップをかけていた。
それがアルの専用機『一角・零式』の待機状態だ。

「稼働時間はどれぐらいだ？だいたいでいい」

「えっと・・・５時間です」

「・・・今何といった？」

「5、5時間・・・です」
沈黙。アルの答えに頭を抱える千冬。
しばらくしてからアルの頭をガシッと掴む。
「？」
「まさか、ラウラとの模擬戦の後から一度も乗ってないとかいうんじゃないだろうな？」
「・・・乗ってませ――――いだだだだだ！！！！」
突然のアイアンクロー。
あまりの激痛で必死に頭から千冬の腕を引き剥がそうとするが、無駄に食い込んでいるせいでとれない。
というか、アルの非力な腕力では到底引き剥がせないだろうが。
1分から2、3分ぐらいしてから、アルはようやく恐怖のアイアンクローから解放された。まさかＩＳに乗ってないだけでこんなことになるとは思ってもいないだろう。
掴まれていた頭を両腕で押さえ、半分泣き目だ。
「それと織斑、お前のＩＳは訓練機になる。構わないな？」
「え、あ、はい」
急に話の内容を切り替えられた。
専用機相手に訓練機で挑むなんて負けに行くようなもの、と思う生徒がいるが、一夏はまったく気にしていなかった。

セシリアの方をばれないようにチラッとみると、自信にあふれた顔で、胸を張っている。どこからその自信がわいてくるのだろうか。

「では、この授業はここで終了する」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「専用機を持っているわたくしに訓練機で挑むなど。まぁ、専用機だろうと勝負は見えてますけど」

早速席にやってきたセシリア。
お気に入りのポーズ（手を腰に当てている）でまたもや胸を張っている。

そしてやっぱり上から目線。
専用機持ちらしいので負けることは考えてないようだ。

「あっそう。でも専用機持ちが訓練機に、しかもそこまでＩＳに乗りなれてるわけでもないこの私に負けたらどうする？結構面白いと思うんだけど」

「威勢がいいですわね。それでもわたくしの勝利はゆるぎないですわ」

なんでかこの２人の仲は以上に悪い。
まぁ、敵対しているので当然と言えば当然だが、近くに来るたびにいがみ合うのはやめてほしい。アルとしては迷惑際なりないものだ。

「そして、あなたも。さすがに専用機ではないとフェアじゃありませんものね」

「・・・」

「聞いてますの！？」

「・・・」

アルに話を振ったセシリア。
だが一向に返事がない。なんでか出されているディスプレイで顔が見えないため、どうすればいいかちょっと困る。

「ん？何か言った？」

そして最終的にはこれである。
頭に装着していた束特製でオリジナルのＩＳ調製用どこでもディスプレイを使用していて、集中していたのでセシリアの言葉は耳に入ってこなかったようだ。

この行動でさらにセシリアの神経を逆なでする。
怒りをあらわにするが、アルはどういうことかわかっていない。
頭の上に疑問符がいくつも浮かんでいる。

「あ、そろそろお昼だ。一夏、学食行こ」

「ん？あぁ、そだね。じゃ、そういうことで」

ふと時計が目に入り、セシリアを綺麗にスルーして教室を出ていく。
その場にはひとり残ったセシリアと静寂だけが残されていた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ねぇ、君って噂の子でしょ？」

学食につき、即座に超特盛りでラーメンを頼んでから一夏と席に着いた。
早速食べ始めようとした時だ。突然見知らぬ女子に声をかけられた。
やや外側にはねた癖毛が特徴的な女子。
リボンの色が一夏と違うため先輩だ。
１年は青、２年は黄色、３年は赤で、その先輩は赤だから３年だ。

「そうなんですか？」

返事をすると、自然な動きで隣に座ってくる。
馴れ馴れしいというか、少しばかし（？）遠慮がない。
アルはこう言うのが苦手だから受け流す気満々だ。

「代表候補制の子と勝負するって聞いたんだけど、ホント？」

「えっと、はい。そうですけど」

すでにアル（と一夏）がセシリアと戦うのは噂らしい。
さすがは女子。情報の周りはやはり男よりも数倍だ。
しかも３年までとはどのくらい速いのか気になってしまう。

「でも君、素人だよね？ＩＳの稼働時間はどのくらい？」

「えっと、５時間と２７分４９秒弱です」

「こ、細かいね・・・じゃなくて、それじゃ無理だよＩＳって稼働時間がものを言うの。その相手が代表候補制なら、軽く３００時間はやってるわよ」

アルとしては何時間やればすごいのかわからない。
だが確実にわかるのはこのままじゃセシリアに負けるということだけだ。

以前ドイツで一度だけ、模擬戦をしたことがあるがそれもボロ負けだった。『ＡＩＣ』を使われ身動きができず、単調な動きは簡単に読まれた。
軍人に素人が勝てるほど世界は甘くないということだ。

「でさ、私が教えてあげよっか？ＩＳについて」

食べる手を止めて、悩む。
こういう場合は非常に困る。

確かに教えてもらえるのは嬉しい。
嬉しいが、アルはこう言うのにまったくと言っていいほど慣れてない。
むしろこう言う機会に慣れておいた方がいいのだが、極力そういうのは面倒なのでやりたくなかった。

悩んだ結果、返事をしようとした時だ。
声を出す前に先に喋られてしまった。

「私が教えるんで大丈夫です」

一夏だ。先ほどから無言だったがやっと喋ってくれた。
だがそんな言葉に一歩も引かない先輩。（名前不明）
というかアルは、一夏からは何も聞いていないよ？みたいな顔をしている。

「あなたも1年でしょ？私の方がうまく教えられると思うんだけどなぁ」

「私、織斑先生の妹ですから」

「へぇ、織斑先生の妹さん――――って、えぇ！？」

ようやくたじろいだ先輩。
まぁ、誰でもあの千冬の妹と聞けば驚くだろう。
その先輩も一夏の顔をみて「そういえば似てる・・・」と言葉を漏らしているぐらいだ。千冬と同じ顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「なので結構です」

「そ、そう。なら仕方ないわね・・・」

ちょっと残念がりながら戻っていく親切だった先輩。
アルはどうしたらいいかまだ困惑気味だ。

「一夏」

「ごめん。でもなんかノリって言うか、なんていうか。こう言うの

ってなんか対抗意識出ちゃうんだよね」

「ありがとう」

「え？」

つい対抗意識が出てしまった様だ。
それで千冬の（名字だが）名前を出すのはどうかと思う。
だが逆にアルは嬉しかったようだ。
小さく、ありがとう、と言ってそそくさとまた食べ始めた。
その言葉は一夏が聞きとれたかどうかわからない。

「おかわり！」

「まだ食べるんだ・・・」

第０４話　対抗意識（後書き）

次回はセシリアとの対決！
例によって例がごとく一夏の戦闘をカットするかどうか迷ってます。
原作の一夏と戦い方は同じっちゃ同じだけど、違うと言えば違うからなぁ。

アル君の場合、早速デストロイモードを使うか迷ってます。
デストロイにする場合、感情を高ぶらせないと（わかりやすくするなら）行けないですからね。
使ったら使ったで、一歩間違えばブルー・ティアーズの損傷が小から中、もしくは大破になるかも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０５話　クラス代表決定戦　前編（前書き）

今回はクラス代表決定戦。
前編なので今回はセシリアｖｓ一夏です。
ちょっと省いてる部分がありますが、問題はないかと。

第０５話　クラス代表決定戦　前編

翌週月曜日。
セシリアとの対決当日。

「ねぇ、一夏」

「・・・な、何？」

「僕、一夏に教えてもらうはずだったよね？」

「う、うん」

当日までの一週間。
一夏が３年生の先輩に対抗意識を出したため、結局は一夏自身がアルにＩＳについて教えることになった。
だが少しばかし問題が解決されていない。

「僕、逆に教えてた気がするんだけど、気のせいじゃないよね？」

「・・・」

「あ、目ぇ逸らした」

アルの頭脳は劣化版束のようなもの。
ぶっちゃけ、知識で勝つのは無理に等しい。
最終的には何も訓練などの体力付けなどはせず、アルがみっちり細かいところまで解説、説明するに至る。

「確かに、一夏より僕の方が頭がいいのはわかるよ。飛び級だし。でも、一夏が教えてくれるって言ってくれたから、僕期待してたのに」

「しょ、しょうがないよ。ほ、ほら、知識だけでも、備えあれば憂いなしって言うじゃん」

「それでも僕には何も教えてくれなかったよね」

「・・・」

「あ、また目ぇ逸らした」

結論から言うと、一夏は何もしていない。
アルにばっかりまかせっきりで、教えることができなかった。

アルは一夏は運動ができそうだ、訓練機でも使ってＩＳの訓練をするんじゃないのかと思っていたのに、期待を大いに裏切られた。
本当にセシリアに勝てるのだろうか。

「あ、そうだ。一夏、はい」

「え？何これ？」

今さっき思い出したように、ポケットから何かをとりだす。
先に一夏がセシリアと戦う気だったので、すでにＩＳスーツを着た一夏に渡すが、何が何だかわかっていない。

「え、えっと、その、い、一夏の専用機・・・（ぼそ」

「え？今、なんて？」

「一夏の専用機！束姉から送られてきたの！」

「えぇ！？」

怒られると思い、小さくぼそっと発言。
聞こえなかったか、聞き直すが聞き方がいけなかったのだろう。
少しむすっとしたアルは大きな声で返し、それと同じぐらいの声で一夏も驚いた。

アルが渡したのは白い腕輪。
真っ白で、それ以外の何物でもない。
名を『白式』一夏のために束が作った専用機だ。

「ということですけど、どうすれば？」

『なんでもいい、早く準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているんだ。フォーマライズとフィッティングは実戦でやれ』

「え？マジですか？」

「機体名は『白式（びゃくしき）』。僕も一夏の戦闘を見たいけど、一角の調整があるし、見たら対策取れちゃうから見ないよ。でも、応援してるから、頑張ってね」

近くにより、白式を付けた手に手をかける。
その瞬間、ちょっとだけドキッとしたのは一夏だけの秘密だ。
アルの見上げる顔、上目使いが可愛いと思ったのがこれが初めてだろう。

「うぅ・・・（ちらっ）・・・あぁ、もう！白式！！」

一瞬千冬を見てから何かを諦め、一夏は白式の待機状態をを付けた右手を掲げながら、高らかに叫んだ。そこにあった一夏の展開した専用機はまさしく白そのものだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「あら、逃げずに来ましたのね。専用機を持っていたのですか」

ふふんっと鼻を鳴らし、お気に入りのポーズをとっている。

だが一夏はそんなのはお構いなしで関心などなしだ。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』

自分の背丈よりも大きな銃『スターライトｍｋ？』と、特徴的なフィン・アーマーが背中に４枚。例えるならどこかの国の王国騎士だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたく、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

目を笑みに細めるセシリア。

余裕なのか、砲口は下がったままだ。

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行――
――セーフティーロックの解除を確認――
ＩＳが告げる情報を見てから、再度セシリアを見る。
左目だけを射撃モードに出来る辺りを見るとさすが代表候補生だと思える。
「そういうのって、チャンスとは言わないと思うんだけど。例えチャンスだとしてもいらない」
「そう？残念ですわ。それなら――――」
――警告――
――敵ＩＳ射撃体勢に移行――
「――――お別れですわね！」
「っ！？」
キュインッッ！！
耳をつんざく音が聞こえ、それと同時に閃光が一夏の体を打ち抜く。
「いつつ・・・こりゃ、久しぶりに派手な運動になりそうだなぁ」
白式の反応についていけない一夏。
弾雨のごとく攻撃がどんどん降り注ぐ。
的確に狙ってくるそれは、慣れていない一夏ではよけることはおろか、凌ぐことすら難しい。どんどん削られていくシールドエネルギーに反応して、白式からのアラートが鳴り響き、うるさくて仕方な

い。

「装備は・・・」

――接近ブレード『名称未設定』――

一覧だけ映し出される。

だが素手で戦うよりは武器があった方がいい。

「これしかないなら、これで行ってやるわよ！」

加速しながら、片手に『刀』を持ち、セシリアへ突撃。

だが届かない。近づいて切らせてくれない。

何度繰り返しても弾幕はやむことはなく、一夏を近づかせることを拒んだ。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわ」

「そりゃどうも」

ここまでで実に27分弱。

一夏のシールドエネルギーは１００を切っていた。

「では、フィナーレとまいりましょう！」

笑みとともに右手をかざす。

命令を受けたビットが全機、多角的な直線機動で接近してくる。

そんなのあり！？と言わんばかりに驚いている一夏をお構いなしで、

ビットは攻撃を開始する。上下に回ったビットの先端が発光、レーザーを放つ。
それらすべてをかろうじて防御と回避に成功した。
だがそのすきを突き、セシリアがライフルで狙ってくる。

「左足、いただきますわ！」

とどめの一撃。
確実に喰らえばエネルギーは０になり負けだ。
だが、はいそうですかと終われる一夏じゃない。

「はあああぁぁ！！！」

無理やりな加速でいっきに間合いを詰める。
セシリアめがけて思いっきり刀を振り抜く。
当然のごとく回避されてたが、そのおかげでとどめの一撃はこなかった。

すぐさま体制を立て直してから再び距離をとるセシリア。
今度は左手をかざし、それまで周囲で待機していたビットは一夏へ向かって飛んでいく。

（ん？あぁ、そういうこと。オッケー、もうわかった）

穿たれるレーザーをかわし、その内のビット１機に向かって一閃。
さらに加速してもう１機にも一撃。
重い金属を切った感触が手に伝わり、それらは次の瞬間爆発した。

「なっ！？」

「わかった。あんたはこの兵器を使うとき、それ以外の行動ができない。しかも毎回命令を送らないといけないみたいね」

「っ・・・」

無言は肯定の証。図星の様だ。
セシリアは一夏の反応が一番遠い角度を毎回狙っている。
ならば簡単だ。誘導できるのだから、誘導して待ち伏せしてやればよい。

それでもビットで攻撃してくるセシリアに対し、一夏はいとも簡単に、素早く残りの2機をたたき切って破壊した。

「距離を詰めれば!!」

「――――かかりましたわ」

「っ!?」

「4機だけではありませんわよ!」

突如、スカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。
これは回避ができない。しかもレーザーじゃない。誘導弾、すなわちミサイルだ。

ドガアアアアンッッッ!!!!!

赤を超えて白。
その爆発と光に一夏は飲まれた。

第０５話　クラス代表決定戦　前編（後書き）

次回は一夏がファーストシフトを終わらせたあたりから。
そしてその後にセシリアｖｓアル君です。

デストロイモードを使うかはまだ迷ってます。
まぁ、使うとなったあかつきにはセシリアをアル君（一角）がフルボッコにしますよｗ

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０６話　クラス代表決定戦　中編（前書き）

ついに１００００ｐｖ突破！
これからもがんばっていきたいと思います！

第０６話　クラス代表決定戦　中編

――フォーマットとフィッティング終了しました――
――確認ボタンを押してください――

「？？？」

爆発が起きたと思い、一夏は負けを覚悟していた。
なのにまだ負けていない。エネルギーが残っている。

目の前に映し出されたディスプレイには『確認』と書かれたボタンがある。それを押すと、膨大なデータが現れ、整理され始めた。
そして次の瞬間、白式に変化が現れた。
一夏の全身を包んでいるＩＳが光の粒子に弾けて消え、そして再び形をなした。

新しく形成された装甲はまだぼんやりと光を放っている。
先ほどまでの実体ダメージは消え、洗練された形に変化していた。

「ま、まさか、ファーストシフト！？今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

「ん～、そうみたい。あ、そういえばフォーマットとフィッティングは実戦でやれって言われてたっけ」

ようやく一夏の専用機になった白式は滑らかな曲線とシャープなラインが入り、どこか中世の鎧のようなデザインへと変わっている。
その手に握る『刀』にも名がつき、接近特化ブレード『雪片弐型』へ変化していた。

その名は姉の千冬が使っていた刀の名。
姉妹で同じ名の武器を持ち、姿も似ている。
ＩＳの形は違えど、現役時代の映し身の様だ。

「私は世界で最高の姉さんを持った妹ね。これでようやく、私も家族を、誰かを守れる」

「・・・は？あなた、何を言って――――」

「まずは千冬姉の名前を守る！妹が不出来じゃ、格好つかないもんね」

元日本代表の妹。
それが不出来じゃ、本当に格好がつかない。
大好きな千冬が格好つかないなんて、冗談じゃなく笑えない。むしろ笑われる。

「さっきから独り言を。もう、面倒ですわ！」

弾頭を装填したビットが２機、セシリアの命令で飛んでいく。
また多角的な直線機動で、射撃型ビットよりも速いが一夏には見えた。
それに、手に握っている雪片の使い方も、なんとなくだがわかっている。

ブレードが開き、エネルギーの刃が現れる。
そしてそのまま横に一閃。切り捨てられたビットはそのまま爆ぜた。

「はああぁぁぁっ！！！」

いける！
そう確信し、雪片をさらに強く握りこむ。
エネルギーの密度が増していくのがわかる。
セシリアの懐に飛び込み、一気に切りかかろうとした時だ。
『試合終了。勝者――――セシリア・オルコット』
「「え？」」
ｓｉｄｅｏｕｔ
「よくもまぁ、持ち上げては裏切ってくれたな。この大馬鹿者が」
結果は一夏の負け。
原因は白式の単一仕様能力『零落白夜』のせいだ。
バリア無効化攻撃と呼ばれ、シールドエネルギーを消費して攻撃に転じる、まさしくもろ刃の剣。
使いどころは悪いわけではなかったのだが、序盤でエネルギーを削られすぎたのが原因でもあるのかもしれない。
どちらにせよ一夏の負けは決定なのだ。
「アルフォンス、準備はできたか？」
「も、もう少し。後ちょっとだけ」

「早くしろ。オルコットはすでに再出撃したぞ」

「で、出来ました！え、えっと、一角！」

おろおろしながらネックレストップを握りながら呼ぶ。
展開したＩＳは一夏と同様に白。
ヘッドギアに一本角がついた機体『一角・零式』

白式よりも明るく、バックパック意外が純白白亜で全身装甲。
右手には威力絶大のビームマグナム。左手にはシールドを装備し、
今のところはセシリアのブルー・ティアーズ同様中距離射撃型に見
える。

「一夏の戦闘は見てないけど、結果だけは聞いたから。僕が戻って
きたら2人で反省会しよ」

「うぇ？あぁ、うん」

「じゃ、行ってきます」

ピットから一夏同様に出ていくアル。
空にはすでに、先ほど負けそうになって不機嫌になっているセシリ
アがいた。

だがそれでもアルは年下だから余裕そうにしている。
どうせ男なんて弱い、と思っているんだろう。

「あなたにも、チャンスをあげますわ」

「（Ｅパックの残数確認ＯＫ。１５発ちゃんとある）」

「・・・聞いてますの！？」

「え？なに？」

ぷっちんっ。

試合がすでに始まっていたため、セシリアがいきなり攻撃を仕掛けてくる。

ビックリしたアルは、まずよけることをせずにシールドで受け止めた。

中心部に内蔵されている『Ｉフィールド発生装置』が機能し、レーザーはアルには届くことはなあった。

「っ！？」

「ビ、ビックリしたぁ！ふ、不意打ちはんたーい！！」

「あなた！わたくしをバカにするのも大概にしないと本当に怒りますわよ！」

「バカにした覚えもないし、もう怒ってるじゃん・・・」

セシリアはビシィッとアルを指さしながら怒りをあらわにしている。怒るといいながらもうすでに怒っている上に、アル本人はバカにしたつもりはない。ただ聞いてなかったりしているだけだ。

だがそんなのお構いなしでセシリアは攻撃を再開してくる。

一夏の時と同様に弾雨のごとく的確に狙いを定めてアルを狙い撃ちにしているが、全部ガードされ、中々エネルギーを削れないでいた。

「とりあえず、下手な鉄砲数うちゃ当たるで行ってみようか」
ビームマグナムを構え、何の躊躇もなくトリガーを引いた。
セシリアの『スターライトｍｋ？』とは違う音を出しながらカートリッジを一つはきだした。
ビームはセシリアを掠めた。
千冬や山田先生は、悪くはないと思っているが、驚くことが一つあった。
「な、掠めただけで４割も削られた！？」
驚異的なビームマグナムの威力は計り知れない。
掠めただけで４割も削れるのなら直撃なら一発で終わりだ。
撃ったアルも驚いている。
ドイツでの模擬戦のときは使う前にたたき落とされたのだから。
威力の強さと使い勝手を覚えるが、今まともに使えるのはこれだけ。
防御をしながら撃っても当たらなければ意味がない。
それを確信し、移動しながら狙い撃つ戦法をとった。
（あ、これ・・・知ってる？いや、覚えてる）
攻撃を避けるため、無意識にとった動きは知っていた。
否、体が覚えていた。幼いころの記憶が同時によみがえってくる。
兄と姉、自分を合わせた３人と遊んでいる時に、よく兄から教えてもらっていた。どうして教えてくれたかわからなかったが、祖尾の動きは何度もやったから体に染みついた。

頭が覚えていなくとも、体が覚えている。
セシリアの攻撃はいとも簡単によけられる。

「これなら・・・こんな弱い僕でも、誰かを守れる！」

どこからわくのかわからない、強い力。
その力を、意思を宿したアルの瞳はまっすぐだ。
つい先週みたおどおどした姿が想像できない。

「あなたも独り言ですか！」

一瞬のすきを突き、ライフルでアルを狙い撃ちにする。
見事直撃し、大幅にエネルギーを削りながらアルを地面にたたき落とした。

さらに追い打ちといわんばかりにビットを４機飛ばす。
体制を立て直しているアルにこれは避けられない。
そして何もできないままレーザーが放たれた時だ。

「！？」

放たれたレーザーはすべて弧を描き、アルの周りを沿るように曲げられた。
それはアルが何かしたからじゃない。”一角が”何かしたのだ。

赤い光がアルを、一角を包む。
白い展開はところどころが割れ、内側の装甲をむき出しにする。
脚から腕、胴、バックアパック、そしてヘッドギア。
一角の姿が変形、いや変身した。

一回り大きくなり、姿がまるで違う。
開いた装甲の内側の装甲は赤く発光し、ヘッドギアの一本角は二つに割れた。
背中のバックパックも開き、２つのバーニアが４つに、さらにビームサーベルが２基展開される。

「・・・」

急に黙り込んだアルは、シールドとマグナムを投げ捨てる。
もはや生身で、当てればすぐ終わりなのにセシリアは何もできない。
アルはゆっくりと右手を背中のサーベルに手を伸ばし、展開させる。
そして一瞬だけ構え、加速しながらセシリアに突撃した。

第０６話　クラス代表決定戦　中編（後書き）

はい、次回はセシリアフルボッコのターンです（笑）
ちなみに、アル君の家族。前作は兄だけだったんだですけど姉を追加しました。
後の話（オリジナル展開）にかかわって来ます。

まぁ、アルのＩＳがユニコーンと言ったら、お姉ちゃんのＩＳはもうわかりますよね？緑色のあれですよ？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０７話　クラス代表決定戦　後篇（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。
いや～、なんか地味に長かった。
初戦闘でデストロイ（意識なし）はやっぱ良いですね。
書いてて楽しかったです。

第07話　クラス代表決定戦　後篇

「ラプラス君すごいですね。本当にＩＳの稼働時間が５時間半ですか？」

戦闘映像を見る山田先生の感想。
アルの動きは確実に稼働時間が５時間で習得できるものではなかった。

射撃は初心者だというのはわかる。
だがあの動きは千冬でも驚いていた。

「どうした、一夏」

「あぁ、千冬姉。一角の装甲見てみてよ。赤いラインが入ってない？」

一夏に言われ、一角の装甲に注目する千冬。
確かに言われてみれば、薄くだが赤いラインが入っている。
何故だか疑問に思うが、わからない。

「あ！」

そんなことを考えていると、アルはいつの間にかセシリアと距離を離れて地面にいた。すぐに直撃したんだとわかる。
体制を立て直している時、ビットが４機周りに着き、一斉掃射された。その時だ。

「「「！？」」」

ビームがすべてアルの周りを沿うように弧を描き、曲がる。
それだけではない。
赤い光が一角を包み、先ほど入っていた赤いラインが開いた。
脚、腕、胴、バックパック、ヘッドギア、すべてが開いて行く。
内側のむき出しになった装甲は赤く発光し、赤いラインはそれが原因だと分かった。
姿かたち、すべてが変わり変身した一角。
さながらファーストシフトが終了したように思えるが、違う。
「な、なに、これ・・・？」
「ＩＳ・・・なのか？」
一夏も千冬も困惑している。
ＩＳなのかわからないでいるが、これは間違いなくあの大天才篠ノ之束が作ったＩＳだ。
そんなことを考えている一夏たちには構わず、アルはその場でシールドとマグナムを投げ捨てて背中のサーベルを抜いた。
「アルフォンス、お前は本当に何者なんだ？」
ｓｉｄｅｏｕｔ
驚異的な加速性能を引き出し、一気にセシリアまで距離を詰める。

近づかせないよう、弾幕を張ろうとビットが目の前に現れるが、横に一閃。一度に2機も真っ二つ、しかも縦に斬った。

距離を縮めてきた所を、一夏と同じように今度は大量のミサイルで落とそうとする。だがその考えが甘かった。

大量のミサイルの内1つを切り裂き、爆発させる。

そしてその爆発に連鎖し、他のミサイルはすべて意味をなさなくなった。

「・・・」

「っ！？」

無言のアルの瞳は、セシリアをにらむ。

その眼は先ほどの力強いものではなく、冷徹で残酷な、敵を倒すためだけの冷たい軍人の様な眼だった。

一気に距離を詰められ、右手を振りかぶるアル。

危険を察知したセシリアはすぐさま近接用の武器『インターセプター』をコールし、ギリギリのところでサーベルを受け止めた。

バチィッッ！！

切りつけようとしては離れ、また切りつける。

ビームサーベルを何度も受け止め過ぎたインターセプターの実体をもった刃はもうすでにボロボロだ。

「ハァ、ハァ・・・な、なんですの。あの加速は・・・！！」

肩で息をし、荒い呼吸になるセシリア。

右手で逆手持ちにしたボロボロのインターセプターは、後一撃耐えられたらいい方だろう。

そして再び加速して接近してくるアル。
残り2機のビットとミサイルビットを飛ばし、接近を阻むが、レーザーを撃つ前に両機とも切り落とさ、ミサイルビットも破壊された。
減速せず、勢いに任せたままアルはサーベルをふるう。
耐えられるかどうかもわからないインターセプターで受け止めようと構えた時だった。

突然アルの姿が消えた。否、見失うほど速い加速をした。
後ろに姿をとらえたが、一気に切りぬきをされる。
だが何の変化もない。変化があるとしたら少しエネルギーを削られたぐらいだ。だが次の瞬間、嫌な音が連続して聞こえた。

バチバチッ・・・
・・・ガシャンッッ・・・

「？」

右手から音が聞こえると思い、ふと目をやる。
そこには手首から先がないブルー・ティアーズの左手があった。
そして自分の真下にはインターセプターを持った右手首。
アルは何もしなかったんじゃない。右手首を邪魔なインターセプターごと切り落としたのだ。

「な！？」

基本ＩＳの腕部分に人の手は奥まで入らない。
せいぜい短くても手首少し前辺りだろう。

そこから考えると手首部分は切り落としても人体に何の支障もない。
脚も同様。ＩＳの脚部のひざ部分までなら切断しても大丈夫だ。まぁ、戦闘では十分大丈夫ではないのだが。

だが問題はそこじゃない。
本当の問題は、ＩＳの本体破損だ。

通常、手持ち武器や両肩などに浮いている装備は破壊可能だ。
だが本体はＩＳの絶対防御で守られているため破壊は不可能なはず。
絶対防御は絶対にカットできないシステムになっている。
つまり、アルは相手のＩＳの絶対防御をカットしているのだ。

「こ、こんなの、無効ですわ！」

セシリアの叫びはアルに届いていない。
今度は左手で持っていたライフルを横に一刀両断され爆発する。
そしてそのまま本来の目標であるセシリア自身に斬りかかろうとした時だ。

『試合終了。勝者――――アルフォンス・ラプラス』

放送が鳴り響いた。
状況的にはいいタイミングだ。
使える武器もない状況でいたぶるのは良くない。

だがアルはやめようとはしない。
先ほどの状態からまたセシリアに攻撃を仕掛けようとしてくる。

驚くセシリアに構わずサーベルを振りかざす。

間一髪のところで回避に成功したセシリアは、急いでピットまで戻り、ＩＳを解除する。すると予想は的中。
敵がいなくなり、アルは動きを止めた。
赤く発光していた内部装甲は色を失い灰色に戻る。
開いた外装が徐々に閉じていき、最終的にはヘッドギアの一本角が閉じると同時に、強制的にＩＳが解除された。

「！？」

ＩＳを解除するのは別に良い。
だが場所が問題だ。アルが解除した場所ははるか上空。
落ちれば死は免れないだろう。

「おっと、あっぶなかった～」

上空から頭から落ちていくアルを何かが受け止める。
それは、先ほど自分が戦っていた相手、一夏だ。
急いで白式を展開させ、ピットから飛んできたのだ。

「・・・」

「気絶しちゃってるみたい・・・なんで？」

『なんでもいい。心配だと思うなら早く戻って保健室に連れて行ってやれ』

「は、はい！」

第０７話　クラス代表決定戦　後篇（後書き）

はい、セシリアフルボッコのターンでしたｗ
あれですね。ＩＳって手とか足とか長いですからね。
手首の切断とかはもはや自己解釈です。

次回はアル君が目を覚ましたあたりから。
その後にクラス代表決定パーティかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０８話　クラス代表就任パーティ

「あ、起きた？」

夕方だいたい５時過ぎ。
セシリアとの試合で気絶してしまったアルがようやく目を覚ました。

寝ぼけながらも、ここがどこだか確認する。
目の前には一夏と知らない天井。
ベッドに寝ているということ考えると保健室だと確信した。

「大丈夫？」

「ずっと寝てたの？僕」

「うん。かれこれ・・・２時間ぐらい？」

「そ・・・」

何も覚えていない。
途中からの記憶がかけらもない。
いや、思い出したくない。

どうしてあんなことになったのかもわからない。
一角にあんなシステムが組み込まれていたなんて、束から聞いたこともなかったし、現に調整をしていても見当たらなかった。

ビームサーベル一本であそこまでできる物なのか。
ビット６機をすべて両断、ライフルを横に一閃、武器を持った右手

首を武器ごと切り落とす。どうやって相手の絶対防御をカットしたかもわからない。

「おなか減ってきたな・・・」

「じゃ、食堂行こ。確か、今アルのクラス代表就任記念パーティの準備してるはずだから」

「？　あ、そっか。僕、あんな形でもセシリアに勝っちゃったんだっけ」

ちょっと落ち込み気味のアル。
そんなアルを見かねた一夏は、アルの頭をなでた。
突然のことに少し驚くが、抵抗はしない。
なんだか懐かしい感じがしたのだ。

「さ、行こ」

「・・・うん！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

『アル君、クラス代表決定おめでとう！』

食堂に着くや否や、突然のクラッカーで驚くアル。
何かの癖か、一夏の後ろに隠れてしまった。

そんなアルをまた慰める一夏。
みんなそれを見て笑顔になりながら、アル君可愛い、などと思っているのだろう。

「いや～、これでクラス代表戦も盛り上がるね～」

「ほんとほんと」

「ラッキーだよね、同じクラスになれて」

人が多い気がするのは気のせいではない。
相づちをうっているのはたぶん2組の生徒だろう。
なんで2組がいるのかは気にしてはいけないのかもしれない。

「あ、セシリア」

奥の方に座っているセシリアを見つけ、声をかける。
一応反応してくれたようで、立ちあがってこちらまで来てくれた。
喋ろうとするセシリアに、アルは先に喋りだして遮る。
前のセシリアならこれだけで怒りだしていただろう
だが今回は怒りを見せない。なぜなら――――

（上目使いなんて、卑怯ですわ！しかも泣き目なんて！）

そう。アルは目尻にちょっとだけ涙を浮かべてセシリアを見上げていた。
こんな状況で大きな声なんて出せないし、ましてや怒りを見せるなんてもってのほかだ。まぁ、もともとそんなつもりはないが。

「僕がセシリアのＩＳ大破させちゃったし、試合終わったのに襲いかかったりしたし、謝ろうと思うんだ。ごめんね」

「い、いえ、わたくしも大人気なかったですわ。余裕を見せて見くびっていたから、アの結果はしょうがないことです。ブルー・ティアーズはもう予備パーツで修理済みですの」

「本当にごめんね」

最終的にはセシリアの手を握るアル。

何というか、物凄く可愛い。冗談抜きで本当だ。

男の娘の若干の泣き顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生アルフォンス・ラプラス君ことアル君に特別インタビューに来ました～！」

セシリアとの仲直りも経て新聞部の生徒が登場。

みんな、オー、と驚いている。アルとしては迷惑だが。

「あ、私は二年生の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってま～す。はいこれ名刺」

「あ、ご丁寧にどうも――って画数多っ！」

「良く言われる。では気をを取り直してアル君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

ボイスレコーダーを取り出し、無邪気な子供のように瞳をキラキラ輝かせている薫子。こう言うのは本当に慣れていないのでアルは困惑気味だ。

「えっと・・・頑張りたいと思います」

「えー、もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

「えぇっ！？う～ん・・・じゃあ、僕がクラス代表になったkらには絶対に優勝に導く！とか？」

「あ、じゃ、それでいいや。ダメそうだったら適当にねつ造しとくし」

それでいいのか新聞部副部長。
ねつ造なんてしたって何の得にもならない。特にアルが。
まぁ、新聞部自体は何かの得になるのだろうが、本当にやめてほしい限りだ。

「じゃ、写真撮ろうか。ほら、セシリアちゃんと並んで並んで」

「え、えぇ・・・」

「注目の専用機持ちだからね～。あ、そういえばもう一人いるんだよね？確か織斑先生の妹さん！その子も一緒に！」

「え、あ、はい」

「あ、名前教えて」

「織斑一夏です」

「一夏ちゃんね。よし、覚えたわ。さぁ、３人とも早く並んで」
アルを挟んで左に一夏、右になぜかちょっと残念がっているセシリアが並ぶ。なんだかでこぼこしていて見栄えが悪いかもしれないが気にしてはいけない。
アルは作り笑顔が作れなくて大変そうだ。
「それじゃぁ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
「え！？」
「え、えっと・・・」
「７４．３７５」
「「速っ！」」
パシャッッ
突然の黛の問題に答えられないであわてる２人と、何の迷いもなく言われた瞬間に正確な答えを言い放つアル。
そしてその状態のままシャッターが切られた。
だがそんな一瞬で、１組メンバーが驚くべき行動力を持ってして撮影の瞬間に割り込んできた。無駄にすごいとしか言えない。
「何故全員入ってますの！」
「まーまー」
「セシリアと一夏だけずるいじゃん」

「3人だけじゃなく、クラス皆の思い出にしようよ」

言い訳、もとい説得。
結構な正論を言っているのでセシリアは返せない。
一夏は別に気にしてない。むしろセシリアとアルのツーショットを防げただけで十分満足だ。

「ふ、ぁ～～、眠い・・・」

この『アル君クラス代表就任パーティ』は夜１０時まで続いた。
１０時を前にしてアルが寝てしまったのは言うまでもない。
こう言うときの女子のエネルギーは侮れないと再確認したアルだった。

第０８話　クラス代表就任パーティ（後書き）

次回からクラス代表戦！
鈴が転校してきますね。

というか本当にどんなタイミングで箒を出そうｗ
一応クラスのみんなとは知りあってる状態なので、いつでも出せるっちゃ出せるんですけど、どうもうまくいかなくて・・・。
一夏の付き添いみたいな感じで出せばいいのかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第０９話　転校生（中国）（前書き）

こ、今回こそ箒を！
という訳でちょびっとだけど出ます（ぇ

まぁ、紅椿が出るまでは基本空気ですよね。
もうそれは確定事項なのかもしれない。

第０９話　転校生（中国）

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。オルコット、織斑、アルフォンス。ためしに飛んでみせろ」

クラス代表が決定し、ひと段落したころ。
鬼教官こと千冬のＩＳ実習の授業。
開始早々の指名だ。専用機持ちの運命だろうか。

呼ばれたセシリアは即座に展開。
アルも数回程度だが展開したことがあるのでその次に展開。
だが一夏は３回目なので中々展開できないでいた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで１秒とかからないぞ」

「うぅ・・・集中・・・」

せかされて右手の白い腕輪に意識を集中させる。
ＩＳは一度フィッティングを終了させるとアクセサリーの状態になって待機している。ちなみに一夏の白式が最初から腕輪の状態なのは、束が一夏のデータ（簡易的な）を入れておいたからだ。
なのでセシリアの場合は左耳のイヤーカフス、アルの場合は純白のネックレストップということになる。

「白式！」

中々展開できないので最終手段。
ＩＳを展開するときは機体名を、武装を展開するときは武装名をコールすることで簡単に展開できる。

教科書の頭の方にも書かれていて、別名『初心者方法』とも呼ばれるらしい。

それにより一夏は白式の展開に成功。
白いＩＳを身にまとった一夏は、ようやく出来た、と一安心している。

「よし、飛べ」

言われて行動が速いのはいいことだ。
急上昇し、頭のはるか上にいるセシリア。
それに遅れてアルと一夏が続く。

『遅い。スペック上の出力では一番が一角、その次に白式が上なんだぞ』

一番前をセシリアが、やはりその後をアルと一夏が続く。
さすがにそんなことを言われても候補生と数回程度しか展開させた生徒を一緒にしないでほしい。
アルの場合、自分でどうやっていたかも覚えていないのに。

「遅いって言われてもなぁ・・・」

「しょうがないよね」

一夏とアルは少し愚痴っている。
まぁ、それは本当にどうしようもない。
『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で飛ぶらしいが、理屈じゃどうにもできない。もはや感覚の域だ。

『よし、次は急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上から１０ｃｍ』

「了解です。では、お先に”アルさん”」

「ん？うん」

ちょっと何か違和感を感じたか一瞬疑問に思った。
気がつくとセシリアはすでに急降下中で地上すれすれで停止している。
目標の高さで出来たかどうかわからないが、さすが候補生といったところだろう。

「じゃ、今度は僕が」

上空から一気に急降下。
スペック上一番出力が高いので降下する速度も半端じゃない。
意外にこのまま隕石のように落ちるってパターンがあるかもしれないが、さすがにそんなへまはしない。
というか、これもどうしてか体が覚えていた。
頭から降下し、地上前で一回転。
脚を下に向けてバックパックのバーニアで停止。
地上から９ｃｍとギリギリで惜しいが、意外にセシリアよりも良かったらしい。（セシリアは地上から７ｃｍ）

「あ、これはやばいんじゃないかな？」

空を見ていると一夏が落ちてきていた。そう、隕石のごとく。

ものすごいスピードで落ちてきている。まさに流星の様だ。
だがそんなことを考えている場合じゃない。
このままだと直撃する。アルとグラウンドに。
しかし、そんな中でもアルはしっかり考えている。
すぐさま一夏がそれを実行してくるかどうかで変わってくるが、言わないことには変わりないのでとりあえず指示する。
「一夏、ＩＳを解除して！」
『えぇ！？何で！？』
「いいから！」
『わ、わかった！』
空中の後十数メートルほどで地上に落ちそうな所でＩＳを解除する一夏。
疑問に思うクラスメイトと千冬に山田先生。
だがそんなのお構いなしでアルは一夏の方向へ飛んだ。
空中で一夏を受け止め、グラウンド直撃を免れる。
当の本人は目尻に涙を浮かべていて、本当に怖かったようだ。
「大丈夫？怪我とかない？頭くらくらする～とか、そういうのもない？」
「だ、大丈夫だよ。ありがと」

俗に言うお姫様だっこ（無意識）の状態。
すぐに地上に降りたため一夏はすぐアルの手の中から出た。

「まったく、無茶をするなバカども」

「す、すいません・・・」

「ごめんなさい・・・」

千冬に怒られるのは毎回のごとく当然の様だ。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「２組に転校生？」

翌日の朝。
クラスで話題になっていたことを聞いた。

先ほど言った通り、２組に転校生が来たようだ。
今はまだ４月なのに急なことで話題になるのはわかる。
だが何故この時期なのだろうと疑問だった。

「別にこのクラスに転入してくるわけじゃないんだ。騒ぐほどではないだろう」

「まぁまぁ、こう言うのって結構気になるじゃん。実際箒ちゃんも気になるんでしょ？」

「・・・ま、少しな」

横では一夏と箒が会話中。
当初、アルは『篠ノ之さん』と呼んでいたが、話していて仲良くなり、束の妹ということもあって今の呼び方になったようで、一夏の幼馴染で親友らしい。

それと意外に空気なのは気にしてはいけないのだろう。
本人も気にしているらしいので言ってはいけない。

「なんでも、中国の代表候補生なんだって」

「中国かぁ。中華がおいしいよね」

食べ物大好きなアルは基本そういう風に考える。
どこかの国＝その国のおいしいもの。
ちなみに中華はアルの大好物でもある。
一番は麺類で坦々麺。それとチンジャオロース。

「わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「いや、たぶんアル君がいるからだと思うよ」

代表候補生といえばセシリア。
クラスメイトに何の遠慮もなく突っ込みを入れられる辺りを見るともはや普通の生徒だ。代表候補生なんて関係ない。
すでにお決まりのお気に入りのポーズをしている。

「それとその転校生と2組のクラス代表が交換になったんだって」

「へぇ～。勝てるかなぁ・・・」

「今のところ専用機を持ってるのって1組と4組だけだから余裕だよ」

現在クラス代表で専用機を持っているのは1組と4組だけ。
まぁ、1組には3人も専用機持ちがいるので、違う意味では当然専用機持ちが代表になるだろう。4組の生徒は少しどんまいと言える。
こう言うのは半分押し付けになってしまうからだ。

やいやいと盛り上がっているクラスメイト。
そろそろSHRの時間なので人が多くなってきたからだろう。
そんな事を考えている時だった。

「その情報、古いよ」

入口あたりから声が聞こえる。
その声に全員が視線を向けた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少し小柄なツインテールの少女。
改造OKな制服を少しばかし改造している。
片手を腰に当て、ちょっと勝気そうで八重歯が見えている少女をアルは知っていた。

「ま、まさか・・・鈴ちゃん？」

「そう、中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

少女の名は凰鈴音。
自分で言っていたように中国代表候補生だ。
一夏も知っているようでアルはちょっとびっくりだ。

「鈴姉、かっこつけてるのはいいけど、全然似合ってないよ・・・」

「んなっ！？あんた、毎回毎回会うごとになんで小馬鹿にしてくるのよ！」

「小馬鹿にしてるつもりなんてないよ・・・ただ、今の方が鈴姉らしいから・・・あ」

「おい」

「何よ！？」

バシンッ！
聞き返した相手は鬼教官。
そして例によって例がごとく出席簿アタック。

「もうＳＨＲの時間だぞ。教室に戻れ」

「ち、千冬さ――――」

バシィッ！！
さっきよりも強烈そう、否、強烈な一撃。
鈴は痛みに頭を押さえている。

「織斑先生と呼べ。そしてさっさと戻れ。入り口をふさぐな。邪魔

だ。どけ」

「す、すみません・・・」

痛みをこらえながらちょっと泣き目で入口からどく鈴。

完璧に、１００％千冬に対してビビっている。

「また後で来るからね！逃げないでよ、アル！」

そんな捨て台詞を言い残して鈴は自分の教室に戻って行った。

第０９話　転校生（中国）（後書き）

次回はアルじゃなく一夏と鈴が喧嘩します。
まぁ、理由はまだ考えついてないんですけどね。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１０話　口喧嘩（前書き）

まさか！今回も箒が（ちょびっとだが）出るとは！
書いててなんでだかさりげなく箒が入ってきましたｗ（ぇ

ということで今回もちょっとだけ箒が出ます。
それと、紅椿が出るまでは基本空気になることが決定しました。
箒ファンの皆さんすいません。

第１０話　口喧嘩

「待ってたわよ、アル！」

食堂につき、どーんと待ち構えていたのは噂の転校生の鈴。
小さいころから突き通しているツインテール（正しくはサイドアップテール）をなびかせ、手にはトレイを持っている。
ちなみに鎮座するは醤油ラーメン。

「とりあえず、どいてもらえると嬉しいな。後、そこにいると通行の邪魔になるんじゃ・・・」

「わ、わかってるわよ！」

「それと、のびるよ」

「それもわかってるわよ！大体、あんたを待ってたんでしょうが！なんでもっと早く来ないのよ！」

「それなら先に席取って待ってればいいのに。とりえず、席取っておいて。僕も貰ったらすぐ行くから」

「・・・早くしなさいよ」

軽い会話が終了。
諦めた鈴は空いているテーブルを探しに行く。
それを確認したアルは最速で特盛りラーメンを注文。
一夏は少しくすくす笑っていた。丸1年会ってなく、久しぶりなの

で楽しそうだ。
その後ろで箒は誰？みたいな顔をしいて、さらにその後ろでセシリアが焦り気味な、というかバリッバリ焦った顔をしていた。
新キャラ登場で焦るのはやはりサブキャラの運命なのか。

少ししてから注文した料理が出された。
特盛りの器がアルの顔より大きいのは気のせいじゃない。
きょろきょろしてから鈴がいるテーブルを見つけ、トレイを持った一夏と一緒に座ることに。

「鈴ちゃん、いつ日本に帰ってきたの？おばさん元気？いつ候補生になったの？」

「ちょ、一夏、質問多いってば・・・て言うか、何1人で黙々と食ってんのよ！」

「ごくごくっ）ん？」

すでに汁を飲み終えようとしているアル。
この早食いはみているだけでおなかいっぱいになりそうだ。

こんな小柄なのにこんな大食いなのはやはり驚く。
大食い大会に出れば大きな巨漢の男でも簡単に撃破できるだろう。

それと、大量に食べたものがどこに行くかわからないというのもまた不思議。ついでに言うならアルはどれだけ食べても太らない。
多めに食べる方の女子も、アルをみて羨ましそうだ。

「ふぅ・・・で？」

「『で？』じゃないわよ、『で？』じゃ！」

「ならどう返せばいいの・・・」

「2人とも知り合いだったんだね。私、ビックリしちゃったよ。いつ知り合ったの？というかどういう関係？まさか付き合ってるとか？」

何気に質問の多い一夏。
本当に久しぶりでいろいろ話したいのだろう。

「なっ、一夏、何言って！」

「まさか、それはないよ」

「・・・」

「えっ、なに？」

「なんでもないわよ！」

いきなり睨まれてから怒られる。
アルは、何かしたかなぁ、と疑問。
まぁ、何かしたから怒っているわけだが。

「あ、そうだ、紹介するね。箒ちゃんが引っ越した後に転校してきた凰鈴音ちゃん。略して鈴ちゃん。箒ちゃんがファースト幼馴染なら、鈴ちゃんはセカンド幼馴染ってかんじ」

「ああ、どうりで仲がいいのか。私は篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

「あ～、よろしく」

握手を交わして挨拶終了。
先ほどからセシリアが空気状態だ。
どうにかして喋りだそうとするが中々タイミングが見当たらない。
もはや今回は見せ場なしだろう。

そして気がつけばアルは特盛りラーメン5杯目に突入していた。
今までの少しの時間でどれだけ食べるつもりだろうか。
というかどれだけ入るかが気になる。

「今日の夜はあんかけ焼きそばが食べたいなぁ」

『もう夜ごはんのこと考えてる！？』

「あ、今食べればいいのか。すいませーん、あんかけ焼きそばくださーい。特盛りでー」

『まだ入るの！？』

「余裕のよっちゃんってやつだよ」

『ギャグが古い！』

「えぇっ」

食堂にいた生徒全員に突っ込みをいれられた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「という訳で、部屋代わって？」

時間は過ぎて夜８時を回ったころ。
夕食は宣言通りあんかけ焼きそばの特盛り。
ついでにチンジャオロースと中華オンリー。
アルは大好物がたくさんで、食事中は常に笑顔と白米のおかわりが絶えなかった。

そして先ほど鈴が来てこの状態。
ボストンバック一つだけを持ってきた。

「いやいや、何がという訳なの！？」

「いくら年下といってもアルは男。男が同室じゃ、一夏もイヤでしょ？私は平気だから代わってあげようかなって」

「いや、別にイヤでは・・・」

「別にいいじゃない。ね？」

「ね？じゃなーい！というか、鈴ちゃん急すぎ！！」

入口で絶賛口論中の２人。
正直言って迷惑なので他でやってほしいが、アルにそんなことを言える勇気などないので、しぶしぶヘッドフォンをしてバイザー型のＩＳ調整機などを使って一角を調整している。

ビームマグナムが1丁にEパックの予備とすでに装填されているので合計15発。ハイパーバズーカが2つに種類別の弾が数種。
ビームがトリングガンが合計で4挺にシールド2枚。
ビームサーベルが両腕に2基、バックパックに2基でオールOKだ。

「あぁ！もういいわよ！一夏なんて大っきらい！」

「私だってそういう鈴ちゃん嫌いだよ！」

気がつけば2人は口論から口喧嘩に早変わり。
お互いがお互いを「嫌い」といって絵に描いたようだ。

ヘッドフォンをしていたのでアルの耳には入っていない。
バイザーで目を覆っているのでどんな状況かもわからない。
はっきり言って無関係だが、アルは何が起きているか少し気になっていた。

「一夏？」

「先に寝るから。寝るとき電気消して」

「え？でも、まだ8時だよ？」

「いいから私は寝るの！お休み！」

鈴がドアをこれでもかといわんばかりに閉める音でようやく気がつく。
一夏の名を呼び、どういう状況下聞こうと思ったが、返事は斜め上。
すぐさま寝間着に着換えた一夏は自分のベッドに入り、うつ伏せに

なって布団をかぶるようにして寝てしまった。

それを見てアルは何があったかわからないでいる。
突然大きな音がしたかと思えば一夏は怒り気味。

さっきまで鈴姉がいた＋大きな音がしてから鈴姉がいない＋一夏が物凄く不機嫌＝・・・まさか喧嘩？

ちょっとおかしいが状況推測。
一人納得したアルは、シャワーを浴びてから眠ることにした。

第１０話　口喧嘩（後書き）

一夏と鈴の喧嘩でした。
理由としては、部屋を代わってほしい→性格の問題→お互い頑固→融通が聞かないから嫌いみたいな感じですかね（笑）

次回はたぶんクラス対抗戦だと思います。
アルが２人を仲直りさせようとちょっとだけ奮闘する（かも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１１話　クラス対抗戦（前書き）

今回はいつもより長め。
何というか引きずり過ぎたからですかね。
そして終盤はゴーレムが乱入してきますがもう一機・・・？

第１１話　クラス対抗戦

翌日。
一夏はやはり不機嫌だった。
そして１組にやってこない鈴を見つけたが、やっぱり不機嫌。

一夏は鈴ほどではないが、鈴は全体的に『怒ってますオーラ』を出していた。廊下で一夏と会ったときはスルー、目があってもすぐにそらす。
食堂で会えば露骨にふんっと鼻を鳴らしながら背中を向けるなど、喧嘩したということが丸わかりだ。

「あ、対戦表。今日発表だったんだ」

放課後、一夏と廊下を歩いていると、ふと目に入ったもの。
アルはクラス代表なので、対抗戦に出る。
対戦相手は――――

一回戦
１年１組　アルフォンス・ラプラス
　　ｖｓ
１年２組　凰　鈴音

と、少し狙ったような組み合わせ。
これを見たアルは考え出した。

（一夏と鈴姉は喧嘩してるんだよね？実際本人喧嘩してるって言ってたし。これって、仲直りのチャンスじゃ？）

気になった結果、本人に直接聞いた。
一夏はちょっと言いにくそうに、喧嘩した、と言った。
鈴の場合少し怒りながら言い、また不機嫌になってすぐにどこかに行ってしまった。

「一夏、鈴姉と仲直りしたくない？」

「・・・し、したいよ？でも、喧嘩した翌日だし、私からは言いにくいし、その・・・」

「じゃぁ、僕に任せて！クラス対抗戦まで引き延ばしになるけど、絶対に仲直りできるようにするから！」

「え？ぁ～、えっと、いいの？というかどうやって？」

「うん。えっとね――――」

ｓｉｄｅｏｕｔ

そんなこんなでまた翌日。
一夏はアルの提案（仲直り計画）を快くＯＫしてくれた。
まぁ、基本動くのはアルになってしまうのだが。

現在の時刻は昼。
アルは２組手前にいる。

「あ、来た。鈴姉～」

「なによ」

「お昼食べに行こ」

「なんであんたと昼食べなきゃなんないのよ」

「え、だって僕まだ食べてないし。鈴姉も今から食べるんでしょ？だから一緒に食べようかなって」

とりあえず、仲直りさせるためには接触あるのみ。
こう言うときのアルはいつもの引き気味でおろおろしたりした弱いアルとは一味違い、積極的かつやる気がすごい。
だが不機嫌の鈴の壁は少しばかし分厚かった。

「なら一夏と食べればいいじゃない。いつも一緒なんだから」

「それがね、一夏、先に他の人と食べちゃったんだって。1人で食べるのさびしいから、ダメ？」

「ぅ・・・はぁ、しょうがないわね。今回だけよ」

「やった！」

半分嘘で半分本当。
一夏が先に食べたのは本当だ。
だがアルは1人で食べるのがさびしいなんてちょっとも思ったことがない。

少しあれかもしれないが、束と会うまでは基本1人だ。
両親は夜遅くまで仕事、兄はＩＳの技術者、そして姉はＩＳ操縦者。

当然帰りが遅い、もしくは帰ってこない。
まぁ、そんな話は置いておいて。
了承してくれた鈴とともに食堂へ向かう。
今日も中華を頼むアル。
それに続いて鈴も中華を頼んだ。
「鈴姉って、一夏と仲直りしたいとか思ってんの？」
「な！？そんなこと思ってるわけ・・・あると言えばあるわね・・・」
「（ビンゴ！）なら、仲直りすれば？」
「そんなの言いにくいじゃない。あたしから言いだしたのに、あたしから謝るの、すっごく気まずいと思うし」
鈴も一夏同様に仲直りしたい気分。
でもやはり言いにくそうだ。しかも先に言いだしたのが自分なだけあって物凄く気まずい。小学校のころに喧嘩したことがあったがどう仲直りしたかも思い出せなさそうだ。
「そういえば、クラス対抗戦の一回戦って鈴姉が相手だよね？」
「いきなり話題変えないでくれる！？――――って、あ」
「あ、気付いた？クラス対抗戦で、僕が勝ったら鈴姉から謝る。鈴姉が勝ったら一夏から謝る。その代わり、勝った方には僕がなんでも言うこと聞いてあげるよ。一つだけだけどね」

「・・・何、あたしに勝つ気でいるのよ」

「うん。だって普通は言いだしっぺが謝るものでしょ？だから僕が勝たないといけないし」

一夏はクラス代表ではないので対抗戦には出れない。
変更しようにも、すでに組み合わせは決まっている。
なのでアルが戦うしかない。

そこで考えたのがこの案。
一夏が戦えないから代わりにアルが戦い、負けた方から謝る。
そしてそれだけだと乗ってくれないのでアルの条件。

勝てば一夏、負ければ鈴の言うことを聞く。
アル本人としては、あまり無茶な事は言わないだろうと考えての条件だ。

「いいわよ、やってやろうじゃない。その代わり、あたしが勝つんだから覚悟しなさいよね」

「じゃ、決まりね」

ウィンクをしながら鈴を軽く指さすアル。
これで後はクラス対抗戦を待つだけとなった。
それまでに2人が仲直りしてしまったらという考えがあったが、気にしたら絶対に負けだ。

ｓｉｄｅｏｕｔ

２週間後でようやく5月。
試合当日となり、第２アリーナ第一試合が始まろうとしていた。
２人とも噂の新入生、しかも片方は男ということもあってアリーナは全席満員。さらには通路も立って観戦する生徒で埋めるつくされている。
会場入りできない人はリアルタイムモニターで観戦らしい。

（落ちつけ・・・落ちつくんだ。あぁ、でもこんなに人いると緊張するなぁ・・・）

目の前には鈴と赤み掛った黒色のＩＳ『甲龍』
セシリアのブルー・ティアーズとは違い、近距離格闘型。
背中には主力武器の『双天月牙』

アルは前と変わらず純白のＩＳ『一角』
左手にはシールド、右手には何も持っていなかったが、先ほどビームガトリングガンを１挺だけコールし手で持っている。

正体不明だった変身した姿は、リミッターが解除された一角の本当の姿で『デストロイモード』と呼ばれるものが判明した。
束から受け取った設計図を見て、ほとんど自分で作ったはずのＩＳなのにこんな機能があったとは知らなかったと激しく後悔。
おかげで調整に時間を割きすぎてしまい、訓練時間が短くなったほどだ。

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

アナウンスが流れ、移動する２人。
ビームガトリングガンのエネルギーはまだまだたまっていない。
背中に手を回し、双天月牙を構える鈴。
アルはその場で目をつぶって落ち着きを取り戻そうとしていたが、
それを見た鈴は一瞬いらっときて、いたぶることを決める。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと、ブザーが鳴ると同時に鈴は斬りかかる。

ガキィンッ！！
鈴の攻撃を間一髪のところで防ぐアル。
遠距離武器は近距離では使えない。使ったら自分まで被害を食らう。

「初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――――」

振り払い、いったん距離をとる。
チラッとガトリングガンのエネルギーをみる。

――現在エネルギー充填率は７０％――

まだ撃てそうにない。
マグナムよりも使い勝手がいいと言えばいいのだが、この充填時間が難点といったところか。

撃ってこないアルに対し、どんどん攻撃的になる鈴。
離れ続けて距離を取ろうとしてもすぐに詰められる。
正直言って、消耗戦は体力が少ない方のアルは苦手だ。

「――――甘いわよ！」

「っ！？」

突然両肩の非固定浮遊部位が開いた。
そして中心の球体が光って、アルの偶然構えていたシールドに当り、
アルはその衝撃で”殴り”飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

にやりと笑う鈴。
牽制の後は絶対に本命が来るものだ。
この状況だと、さっきよりも数が多く来る。

ガガガガガッッッ！！！！
構えたシールドに大量の何か――『衝撃砲』が当たる。
先ほどから防戦一方のアルはもう一度エネルギーを確認した。

――９８，９９，１００％充填完了――

それを見たアルは不敵に笑みを浮かべる。
最初の防戦から、今度はこちらの番だ。
ガトリングガンを構え、そしてトリガーを引く。

キュゥゥ・・・ガガガガガッッッ！！！！
まず４つの砲身が回転を始め、緑色のビームが大量に撃ちだされる。

突然のことに驚く鈴だが、さすがは候補生。
すぐさま遠距離武器を使わせまいと、回避し接近して来た。

だがアルもずっと接近されて終わりではない。
左手のビームサーベルを外し、空中でキャッチして展開する。
そしてそのまま鈴の双天月牙を受け止めた。

「いきなりやる気出したわね」

「僕、負けるのイヤだから。姉譲りでね！」

バシィッ！
アルが振り払い、距離をとる。
お互いがにらみ合い、周りの歓声が盛り上がる。
白熱した試合はどちらが勝つかわからない。
今度は２人が同時に動いた時だ。

ズドオオォォンッッ！！！

「「！？」」

突然大きな衝撃がアリーナを襲う。
アリーナ中央からは大きな煙が上がり、上を向くとアリーナの遮断シールドを突破してきたのがわかる。

やがて、煙から出てきたのは黒いＩＳ。
全身装甲。アルの一角と同タイプで両腕のビーム砲が特徴的だ。

――襲ってくる！

そう思い、構えた時だ。
再びアリーナに衝撃が走る。

壊された遮断シールドのむこう側から、緑色のビームが入ってきた。
そしてそのビームを撃った張本人がアリーナに侵入してくる。

「ま、また、全身装甲・・・」

それはまたＩＳ。
全身装甲で緑色。４枚の羽のようなバインダーが特徴的で、通常のＩＳと比べたら一回りか二回りほど大きく、巨大だ。

そしてそのＩＳはアルと鈴を無視し、黒いＩＳに突っ込む。
近づかせまいと必死に振り払おうとうる動きや、正確無比のスラスター操作。さらには待機中に襲ってこないところをみると、黒いＩＳは無人機を思わせる。

やがて、黒いＩＳは緑のＩＳに捕まった。
前側の羽に隠された隠し腕が両腕をつかみ、攻撃を許さない。
さらに両足も後ろの羽から出てきた隠し腕に掴まれ、完璧に身動きを封じられる。もはや逃げ場なしだ。

バチッ・・・
ドギュゥゥンッッ！！！！

何の躊躇もなしに、緑のＩＳは解除された黒いＩＳの操縦者を撃った。
そしてそれは爆破され、破壊される一瞬で見えた風穴から無人機だとわかる。
にやりと口元が笑うＩＳの手にはＩＳのコアが握られていた。

第１１話　クラス対抗戦（後書き）

う～ん、なんだか最後の方が無理やりすぎる？
ちなみに最後にやった行動はリムーバーです。

捕縛する→リムーバー→操縦者（機械）が残る→撃って壊す→コア貰い
みたいな感じ？
そして緑のＩＳはもちろんクシャトリヤです。はい。

次回は鈴＆アルｖｓクシャトリヤ（操縦者不明）
リムーバーがあるから勝てるのか・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１２話　叫び（前書き）

今回はアル君（一角）ｖｓ４枚羽！
勝つのはどっちだ！？

そして総合ｐｖが２００００ｐｖを突破しました！
これからもがんばっていきたいので応援よろしくです！！

第１２話　叫び

『いいか、アル。ピンチの時は自分が大切にしてるものの名前を叫べ。母さんや父さんでもいい。俺の名前でも、――――の名前でもいい。ただし、神様なんて現実にないものはやめろよ。空想なんて助けちゃくれないんだからよ』

ふと頭に浮かんだ兄の言葉。
家族が殺された時のショックから、一部の記憶は忘れた。
だけど、覚えてることはたくさんある。

母や父とこと。
兄と一緒にお風呂に入ったり遊んだこと。
姉に勉強を教えてもらったり、料理をしたこと。
他にもたくさん。

（なんで、今こんなことを思い出したんだ・・・？）

今は戦闘中。
目の前には右手にＩＳコアを持った緑で全身装甲のＩＳ（以降４枚羽）。
先ほどの黒い無人のＩＳとは違い、バイザーをしているが口元が見える。
特徴的な４枚の羽、通常のＩＳより大きなボディ。
モノアイのバイザーはこちらを見据えている。

（何だろう・・・どこかで見たことがあるような・・・いや、それはない。こんな全身装甲のＩＳなんて、一角しか見たことない）

頭の中で自問自答を繰り返すアル。
記憶の中を探るが、目の前のＩＳのことなんて知らない。
知らないのに、どこかで見た覚えがあった。

それに対し、４枚羽も動かない。
まるでこちらの出方をうかがっているかのようだ。
右手に持っていたＩＳのコアは羽の中の１枚にしまってある。

どちらも動かず、それと同じで鈴も動けないでいた。
感覚でわかる。この手の相手はかなりの技量を持っている。
自分じゃ勝ち目がないことを思わせたいた。

（どうやってコアを取りだしたんだ？手に何か持ってるようには見えなかったけど・・・）

襲ってこない間、考え出しす。
コアを取り出す、というよりコアにするにはまず本体を解体してから初期化が必要だ。その工程を全くと言っていいほど無視したあのＩＳは、現にコアを持っている。
そんなことを考え出したアルは、大がつくほどの馬鹿者だった。

「っ！？」

全員が静止する状況の中、４枚羽が突然動きだした。
しかも今度の目標はアルだ。

本体の両腕でアルの両腕を、前羽の隠し腕でアルの肩を捕まえる。
後ろの２枚のバインダー内のバーニアは一斉に点火。
そしてそのまま力押しで斜め下、地面に向けて加速を始めた。

「ぐっ・・・！うぅ・・・がはっ！！？」

アリーナの壁にたたきつけられ、痛みから力が抜ける。
そして脱力したアルを４枚羽は持ち上げ、そのまま腹を殴り気絶させた。ＩＳは起動したままだが、先ほどの黒いＩＳと同じようにコアを抜き取られる。

地面に倒れるアルは涙を浮かべていた。
それを見ている４枚羽の操縦者は少しの間動きを止める。
左手にある純白で菱型の形をした一角のコアを見つめ、また再びアルを見ていた。

「おねえ、ちゃん・・・」

「っ！――――！？」

ガキィンッッ！！！
真後ろから双天月牙で斬りかかる鈴。
その攻撃は後ろの羽の隠し腕が持ったビームサーベル２基に防がれた。

「あんた！何やってんのよ！」

「・・・中国の『甲龍』か。良いだろう、相手になってやる」

４枚羽が喋りだしたことに驚く鈴。
もし勝てないとしても、あの手の中にあるコアだけは奪い返す。
相手は異形のＩＳ。確実に鈴やセシリアの専用機と同じかそれ以上の性能だろう。それでも、鈴は引き下がりたくなかった。

目の前で何もできないまま崩れ去ったアルを見て、自分だけ助かるなんてできない。それなら自分もやられた方がましだ。

「それ、返してもらうわよ！」

距離を取られ、衝撃砲を乱射する。
その攻撃は、すべて前羽２枚がシールドとなって防ぐ。

２本の双天月牙を連結させ、今度は接近戦に持ち込んだ。
だが所詮は代表候補生止まり。熟練したＩＳ操縦者にかなう訳がない。
右手に持ったビームサーベル一本ですべて受け止められる。

「この距離なら！」

「ほぉ・・・やるな。だが――――」

両肩のアーマーが開き、衝撃砲を撃とうとする。
捨て身の攻撃に、４枚羽も少し驚いているようだ。
だが正直言って、驚いた程度だ。

「――――候補生ごときがいきがるなよ」

「っ！？」

突然、衝撃砲が爆破する。
気がつけば、周りにいくつも小さなビットの様なものが浮いている。
それが衝撃砲を破壊したのだ。

「まぁ、私にこれを使わせたことは褒めてやる。さぁ、お前のＩＳのコアも貰うとしよう」

ｓｉｄｅｏｕｔ

（一角が奪われた・・・僕が束姉とあの子と一緒にいる間、僕の全てをかけてあげた機体が・・・）

一角はアルが自分の全てをかけた機体。
完成までの年月は、約３年間。
寝る時間を惜しんでまで、料理をする時間を惜しんでまで、毎日調整を繰り返し、完成まで持って行った。

途中、ドイツでの試験使用では全然わからなかったが、セシリアとの戦いで一角のことがたくさんわかってきた。
なのに一瞬で奪われた、なんて考えると嫌気がさす。

『大切なものの名を叫べ』

頭の中に浮かんだ兄の言葉。
ピンチの時は神様に願え、なんてよく言うが、神様なんていない。
だから誰かに、何かに願えと言っていた。
だから今がその時なのかもしれない。

「うぅ・・・」

「あっけないな。もう少し粘ると思ったのだが」

朦朧とする意識の中、ゆがむ視線の先では鈴がいた。
ＩＳは解除され、４枚羽の足元で倒れている。
そして右腕には甲龍のコアが握られていた。

「・・・ニコーン・・・」

「っ？」

「ハァ、ハァ・・・ユニコーン！！！！」

よろよろと立ちあがり、叫んだ。
その名は一角ではない。なのに、一角は反応した。
左手にあったコアは光だし、アルのもとへ飛ぶ。
遠距離からのコールに反応した一角を確認したアルは再びＩＳを装着する。

装甲には赤いライン。
そして次の瞬間、すべてが開いた。

――リミッター解除――
――デストロイモードへ移行――

右手をゆっくり背中へまわし、サーベルを勢いよく抜いた。
その瞳は冷たく、右手にある甲龍のコアだけを見つめている。

「っ・・・！ファンネル！！」

何かを感じ取った４枚羽はビット――ファンネルを展開させる。
驚異的な加速を見せながら、アルは突っ込んできた。

そしてサーベルを一振り。ファンネルをいとも簡単に破壊する。
無数のビームの雨。
軌道に軌跡。それらを完璧に読みながら破壊して近づく。
一気に間合いを詰め、振り抜き。
４枚羽の羽の内、左前羽のほとんどを切り落とした。
「返せ・・・」
４枚羽はコアでふさがった右手を守るように、左手でサーベルを構え、アルの攻撃を受け止める。
小さくつぶやいたその言葉は届いていないだろう。
だがそんなの関係ない。
返してほしい、じゃない。奪い返す、なのだから。
バチィッ！！
振り払われ、もう一度切りかかる。
そこから無理やりずらし、左手首ごと切り落とす。
逃げようとするところへ、がらあきの左手を伸ばし、ビームトンファーを”９０°”展開させ、腕をひねった。
そこにあったのは甲龍のコアを持った右手。
切り落とした手首は重力に従い、落ちようとするがアルはしっかりとキャッチした。
「くっ・・・！」
追い打ちとわんばかりに右手のサーベルで再び斬りかかる。

だがそれは間一髪のところで上空に避けられた。
そして４枚羽はそのまま胸に装備されたメガ粒子砲を拡散で撃つ。

「なに！？」

かわした。
何もせず少しだけ動き、かわす。
要らない動きは何一つない。

「ちっ！」

このままいけばやられる。
それを確信した４枚羽は撤退した。
アルは何かを諦めたか、深追いはしなかった。
ただ、空中でデストロイモードが解け、アルはそのまま地面に落ちて行った。

第１２話　叫び（後書き）

次回は事後の話。
アル君が一夏と鈴の仲直りを見届けます。
そしてもう一方でも少し動きが・・・・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１３話　仲直り

「ん・・・んん・・・？」

４枚羽と黒いＩＳの急襲から夕方。
全身に痛みを覚えながら、アルは目を覚ました。
痛みは主に腹から。たぶん４枚羽に殴られたのが効いたのだろう。
腕や足が痛いのは、エネルギーか限りなく０に近い状況で、頭からアリーナへ落ちたからだ。絶対防御も無敵じゃないからしょうがないと言えばしょうがない。

それにしても、４枚羽に殴られて鈴が倒れているのを見てからの記憶が思い出せない。というよりも、覚えてないと言った方が正しいか。
どちらにせよ何があったかまったくもってわからなかった。

「隠れてないで出てきたら」

「・・・起きてたの？」

「今さっき」

カーテンの向こうに隠れていたのは鈴。
いつもの勝気そうな感じはなく、心配した様子だ。
鈴を見て、アルは少し思い出す。

（確か、甲龍のコアもとられたっけ？取り返したのかな・・・）

「その、ありがと」

「ん？」

「甲龍のコア、取り返してくれて」

「・・・え？僕が取り返したの？」

「はぁ？」

いきなりお礼を言われたと思いきや、疑問。
取り返したのがアル自身、ということに疑問が晴れない。

もしかしたら思い出せない部分で何かやったのだろうか。
というか、何かやったに違いない。
それ以外に思い当たらないのだから。

「まぁ、いいわ。それと、あのＩＳの操縦者知ってるの？」

「え？いや、知らないけど・・・なんで？」

「だってあんた、気絶させられた後に『お姉ちゃん』って呟いてたじゃない。もしかして、知ってるのかなーって」

「いやだなぁ、お姉ちゃんはなはずないじゃん。だって――――」

いつ呟いたかもわからないが、呟いていたらしい。
それを聞きとっていた鈴は、４枚羽の操縦者がアルの姉なんじゃないかと推測していたが、アルの返事でそれはなくなった。
なぜなら・・・

「お姉ちゃんは5年前に僕以外の家族みんなと一緒に殺されてるんだから」

「え・・・」

聞いてはならないことを聞いてしまった。
鈴がアルと出会ったのは去年。
その時アルはもう完璧に吹っ切れている状態だった。
なのでそう言うことが分からなかったのだ。

アルの発言で一気に暗くなる保健室。
やってしまったと言わんばかりにアルはおろおろし始めた。

「あ、そういえば一夏と仲直りできた？」

「うっ・・・ま、まだ・・・」

「じゃぁ、仲直りしなきゃね。試合無効だと思うし、二人同時に謝ること。ね、一夏」

「え、えぇ！？き、気付いてたの！？」

「バレバレだよ。さ、2人とも仲直り仲直り。見られたくないなら僕はまた寝るから」

こう言うときのアルは本当に押しが強い。
いつもの弱弱しく、引き気味で消極的なアルとは思えない。
結局、一夏と鈴はアルが見守る中、仲直りをすることに。

「え、えっと・・・」
「そ、その・・・」
「「ご、ごめん」」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「いっただっきまーす！！」

同日夜の夕食。
目の前には大量の料理。
しかもまた中華オンリー。

酢豚にチャーハン。
やっぱりチンジャオロースがあって、ついでに餃子他。
今日のアルはいつもより一味違い、なんだかこっちが素なんじゃないかと思えるぐらい元気で、子供らしかった。
食べる量を除いては。

「ん～～、おいしっ♪」

物凄い笑顔。
それはもう本当に幸せそうで、邪魔なんてできない。
というか、邪魔したらＩＳを展開されて蜂の巣だろう。
食べ物の恨みは怖い、と言うのはやはり当然なのだ。

「中華はおいしいなぁ～。また中国行って本場の中華を食べたよ。

特にフカヒレとかアワビとか！」

「本当に中華大好きなんだね・・・」

「うん！」

「ん？アワビは中華なのか？」

「あれ・・・？ち、違うの・・・？」

箸のちょっとした疑問。
突然箸が止まったアルだが、気にせずまた食べ始めた。
今までのスピードが嘘のように。

「ちょっと調べよっと」

どこからともなく取り出したノートパソコンで調べ始めたアルだった。

sideout

とある某国、の某所。
基地の地下にて。

「ふっ、”ユニコーン”のコアを奪ったところで引けばよかったのに、遠距離からのコールで奪い返された揚句に機体を中破されて帰ってくるとは」

茶髪の女性はとある人物――４枚羽の操縦者にダメ出しをしている。
それを聞いている本人は窓際で肩肘をついて反応なしだ。

「無人機のコア一個が今回の収穫。やはりお前に行かせたのは失敗か」

「いや、失敗ではないよ」

奥から今度は違う女性が現れる。
赤い服を着た金髪の女性は、先ほどの女性の肩にポンッと手を置く。

「ちゃんとコアにあのシステムを組み込んでくれた。”クシャトリヤ”の中破は許そうじゃないか」

「何の話ですか？私は聞いていませんよ」

「リムーバーを使い、ユニコーンのコアを取り出す。そしてそのコアにあるシステムを組み込むんだ。そうすると一定の条件下で私たちにとって、いや世界中にとって一番ほしい情報が少しずつだが手に入る」

金髪の女性が軽く説明する。
世界中にとって一番ほしい情報とは何か。
それは彼女たちの会話の中で明らかにされた。

「世界にとって？まさかコアの・・・？」

「その通り。ユニコーンがデストロイモードを使えば使うほど、私たちには情報が来る。言ってみれば、コアという名の箱の鍵ということかな」

２人の話はまるで耳に入ってない。
端からそれに興味がないように４枚羽――クシャトリヤの操縦者は窓の外を見つめ続けている。首から下げた待機状態のクシャトリヤ（ネックレス）に目をやり、また窓の外を見る。

「アル・・・」

そしてただ一言、その名を呟いた。

第１３話　仲直り（後書き）

最後のは袖付きの話ですね。
ユニコーン要素を入れようとしたら、こうなりました。

ユニコーンは箱の鍵。
クシャの操縦者が持っている間にプログラムを組みこんで、デストロイモードになる（リミッターが外れる）度にコアのデータを送るようなシステム設定です。
ブラックボックスを明らかにするためにはリミッターは邪魔ですからね。
解除された状態はチャンス、ということです。

さて、なんやかんやで1巻の内容が終わりました。
アニメで言うと第０４話かな？

次回はついに前作ヒロインのブロンドジェントルが！
部屋はしょうがないので一夏には退散してもらうしかないな。
そして朝から感動？の再開が待っている（かも

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１４話　転校生（フランス）

『絶対にアルを1人にしないよ』

いつ言われたか定かじゃないが、姉に言われた一言。
いつも優しく、たまに厳しく。それでもやっぱり優しく。

母も父も兄も、自分を1人にしないと言ったが嘘だった。
いつも仕事仕事で時間を作ってくれない。
姉だけが時間を作って一緒にいてくれた。
それでも時間はあるときは遊んだりしてくれる。

（みんな嘘吐きだ）

それなのに、家族は自分を置いて逝った。
まだ8歳の小さな少年を1人残して、殺された。
それを見たアルは相当なショックを受け、一度心が粉々に壊れた。
涙を流し、血だらけな家族を見続けて、一部の記憶をなくした。

あれはお父さん？
これはお母さん？
それは兄ちゃん？
これがお姉ちゃん？

顔なんてわからない。
見れなくて、見たくなかった。
涙と血が混ざって、目がかすむ。
怖くて怖くてたまらない。
1人という不安に包まれた。

そしてただ一つだけ疑問があった。
それは本当に単純で、誰もが思う。
なんでお兄ちゃんの部屋”だけ”あらされていたの？

ｓｉｄｅｏｕｔ

（なんであんな夢を・・・なんで・・・）

いやな夢を見た。
怖くて、不安で、寒い。
赤く、血の匂いが漂う家。
自分だけ取り残されたかなしさと寂しさ。
あらされていた兄の部屋にはたくさんの紙が散らばっていた。

（・・・忘れよう。あんなの、もう思い出したくもない）

あの記憶は、心の奥底に。
気を取り直して、今日も一日を乗り切ろうと意気込む。

「今日は何と、転校生を紹介します」

現在朝のＨＲ。
山田先生が話を切り出す。

このタイミングでまた転校生。
今度は３組かと思いきや戻って１組。

クラス全体がそわそわし始め、その転校生が入ってきた。

「ぁ・・・」

入ってきた生徒は男子の制服を着ている。
美少年ともいえる顔つきに金髪でまさしく『貴公子』
そしてアルのよく知っている顔だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさん、よろしくお願いします」

（あれ？名前・・・というか、なんで男装・・・？）

目の前の男子――シャルルは挨拶をする。
アルの知っているのは、もともと女。
しかも名前が『シャルル』ではなく『シャルロット』だ。

だがこの状況でそんなことは口走れない。
なぜなら、今のアルはいつもの弱気なアルだからだ。

「お、男・・・？」

「はい。こちらに、僕と同じ境遇の――――」

シャルルの言葉は最後まで続かない。
そう、なぜなら女子の声にかき消されたからだ。

「きゃあああーーーっっ！！！！」

「男子！２人目の男子！今度は同い年の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美系！アル君みたいに守ってあげたくなる系の！」

「貴公子キャラ最高！」

感想が飛び交いまくり。
ビックリするシャルルだが、アルもアルで耳をふさいでいる。
他のクラスから生徒が来たらもっとうるさくなるだろう。
教職員のみなさんお仕事大変そうですが頑張ってください、とアルは心の中で一礼。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに鎮める千冬。
本当に面倒くさそうで、それでいいのか教職員。
また面倒そうに続ける。本当に面倒なんだろう。

「今日は2組と合同でＩＳ実習を行う。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。それからアルフォンス」

「わかってます」

「話が速くて助かる。では、解散！」

すぐさま教室から出ていく千冬。
今日はなんだか機嫌が悪そうだ。
その後を山田先生がおろおろしながら追いかけている。

でもって、シャルルの面倒をアルが見ることに。
まぁ、当然と言えば当然だ。
これはすぐに推測がついたからさっきのようにアルは返したのだろう。

「ア、アル、久しぶ――――」

「今はいいから移動が先」

そう言いながら何の躊躇もなくシャルルの手をとる。
ちなみにこの2人はフランスでの幼馴染。
一緒に遊ぶことは多々あり、引っ越しするまで1人のアルの面倒を見ていたらしい。

「男子は基本アリーナの更衣室で着替えるから、早く移動しなきゃいけないんだ。実習の度にこれだから早めに慣れて近道とか探してね」

「う、うん・・・」

小さいアルが自分より身長の高いシャルルを引っ張っている。
久しぶりのアルとの再開を喜びたいシャルルだったが、アルはそれを無視して急いでいた。今、速度を落とすと大変なことになる。
なぜなら――――

「あ、転校生発見！」

「しかもラプラス君と一緒！」

ナイスタイミングでＨＲを終えた他のクラスの生徒が道を阻むから

だ。
情報先取のために出てきた尖兵の波に捕まれば最後、質問攻めの揚句に運が悪ければ大幅に授業に遅刻。鬼教師の特別カリキュラムという地獄が待っている。

「むぅ・・・めんどいなぁ」

「ど、どうするの？」

「こうするの。スゥー・・・あーっ！」

『？』

「隙あり！！」

自分たちが向かう逆側の方向に指をさしながら大きな声を出す。
なんだなんだと振り向いた隙に2人は駈け出した。
全力疾走した2人は先生に見つからない事を祈りながら逃げ続けた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ふぅ・・・振り切った」

約数分間の奮闘。
逃げ続けるの使った体力は朝ご飯全部を消費したかもしれない。
現在場所はアリーナ内の更衣室。
息を整え、時間を見ると授業まであと数分しかなかった。

「久しぶりだね。2人でこんなに走ったの」

「昔話してる暇ないよ。授業に遅れたら本気で怒られるから。千冬さんマジで怖いよ？」

「そ、そうなんだ」

「僕あっちで着替えるから、着替え終わったら呼んで」

何というか、先ほどからアルに避けられている気がする。
6年ぶりの再会をしたいのにスルーされるし、昔話をしようとしても話を続けようとしてくれない。
昔は着替えのときは気にもしていなかったのに、自分から離れていく。本当に避けられているとしか思えなかった。

（デュノア社社長も大きく出たなぁ・・・まさかシャルを男装させてくるなんて）

アルは着替えながらちょっとした考え事。
シャルルは名字が『デュノア』
つまりはデュノア社の社長の娘だ。

現在デュノア社は第2世代量産のシェアが第3位。
だが所詮は第2世第。今、各国は第3世代の開発に着手している。
デュノア社は第3世代の開発のための時間とデータがない。

そこでシャルルを男装させてアルに接触させに来た。
同じ特異点であれば、接触は簡単だ。
どうせアルの一角のデータを盗ってこいとでも言われてきたのだろ

う。

だが一つ誤算がある。
それは2人が幼馴染というところだ。

（そういえば、6年ぶりかぁ。フランスに戻ったことあっても、会いに行ってなかったからなぁ。後でいろいろ話さなきゃ）

第１４話　転校生（フランス）（後書き）

次回はアル君ｖｓ山田先生！？
セシリアと鈴は出番なしです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１５話　教員対生徒（前書き）

今回はアル君ｖｓ山田先生！！
果たして勝てるのか。
デストロイモードへのきっかけはつかめるのか。

第１５話　教員対生徒

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい！』

いつもの倍の人数で実習開始。
返事も妙に気合が入っており、すごいやる気を感じられた。

「今日は戦闘を実演して貰おう。凰！オルコット！」

早速呼ばれたのが専用機持ちで代表候補生の２人。
理由はもちろんすぐに始められるから、だそうだ。

それでもぐちぐち言いながら前に出てくる。
大方、逆らって出席簿アタックが来るのがいやなのだろう。
そんな２人に、千冬が小さい声で何かを告げた途端――――

「ここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まぁ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

物凄いやる気になった。
予想するならアル関連だろう。
好意を持っている相手にいいところ見せたいのは男女共通だ。

そんなやる気を出してる２人を見る他生徒。
どう反応すればいいか困っている時だった。

「あの・・・織斑先生。僕もやっちゃダメですか？」

『！？』

真ん中あたりで精いっぱい手を挙げて発言した人物は――アルだ。
それに驚き、アルより前の生徒は全員振り返り、後ろにいた生徒も視線をアルに移した。

あの臆病で引き気味で消極的なアルが自分から手を挙げて発言した。
しかも言った言葉が『自分もやりたい』と同じ意味。
同じクラスの全員は驚くのも無理がなく、千冬自身も驚いている。

「ダメなら別に良いですけど、出来るなら僕もやりたいです」

「お、おぉ、わ、わかった。では、お前が”山田先生”の相手をしろ」

「「はい？」」

疑問に思ったのが鈴とセシリア。
まさか相手が山田先生とは思わなかったのだろう。
というかさっきから姿が見えないのだが、どこにいるのか。

そんなことを考えている時だった。
どこから、というか空から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「あああぁぁーー！！ど、どいてくださ～いっ！！」

「え？」

ドカーンッ！！！
声を放ちながら落ちてきた誰かはアルのいた場所に墜落。
すぐさま一角を展開したアルは器用な動きをとって綺麗に回避した。
「あっぶなっ！！？」
「アル、大丈夫？」
「あ、一夏。まぁ、僕は大丈夫だけど・・・山田せんせーい、大丈夫ですかー？」
少しめり込んだ地面で倒れている落下物（山田先生）。
ＩＳを展開していて怪我はしないのだが、一応心配をする。
右手を差し出して、立つ手伝いをする。
今更だが、アルはＩＳを展開している時だけみんなと同じ目線になれるのでちょっと嬉しいらしい。
落ち着きを取り戻したところで、アルが山田先生と戦うことに。
候補生の２人は退場、出番はなくなってちょっとしょんぼりしてる。
山田先生が元候補生ということに驚きながらもアルは装備を展開した。
また右手にガトリングガンと懲りないが、しょうがない。
主力武器がビームマグナム全１５発にこれが４挺とハイパーバズーカ２つ。
バズーカじゃ勝てないのがわかっているので、ガトリングガンを持って、背中のバックパックにマグナムを待機させている。

『では、始め！』

「（本格的に一角に乗り始めてから、いろいろ思い出してきた。強い人と戦えれば、デストロイモードのこともわかるかもしれないし、何か思い出せるよね。それに、何か大切なこと忘れてる気がするから）スゥ・・・行きます！」

今回はしっかりエネルギー充填済み。
少しばかし高いところまで行き、準備を整える。
千冬の合図がしてから少しの間だけ待ってくれた山田先生に感謝し、戦闘開始だ。

ガガガガガッッッッ！！！！！

最初に仕掛けたのは珍しくアル。
ガトリングガンを惜しみなく乱射し、当らなくとも牽制になれば良しとする。

だが山田先生も元候補生で現教職員だ。
生徒に負けるわけにはいかず、アルの攻撃を軽々とかわしている。
しっかり防御もし、さすがは先生。
いつものおろおろした様子が嘘のようだ。

「片手でダメなら――――」

――ビームガトリングガン追加コール――
――エネルギーは充填済みです――

「――――両手でどうですか？」

弾幕がさらに激しくなる。
マシンガンの利点は休みなく撃てるところだ。
軽々とかわされ続けるのなら量を増やせばいい。

下手な鉄砲数撃ちゃ当たるとはこのことだ。
山田先生もこれにはたまらず防御の姿勢に入る。
だがこんなに短時間で撃ちまくれば当然――――

ガガガッガッ・・・キュゥゥ・・・

――エネルギー０――
―再充填を開始しますか？――

「・・・ぇ、いや、やんなくていいから！」

「ちゃんと残りのエネルギーは確認しなきゃダメですよ？」

「え？あ、はい」

残りのエネルギーは３００を切っている。
ガトリングガンを２挺も使ったせいで２００も持っていかれた。

こんな会話は別にいいのだが、はっきり言ってやばい。
無理やりな攻めで無理やり作った優勢状態。
それが崩れれば再び立て直すのはもう無理だ。

「うぉっ！っとと、危ない！！」

アサルトライフルの雨をギリギリでかわしてガードするアル。
残りエネルギーはぱっとみ２４０ほど。

このまま防戦一方のまま負けるのはさすがにイヤだ。
ガトリングガン2挺とも左手に連結させ、背中のマグナムに手を伸ばす。

（この状態からなら、連射して1発でも当れば・・・）

考えが浅はか。
マグナムを構えた途端に銃弾が手に当ってはじき落とされた。
これぞまさしく絶体絶命。
まぁ、一度でも優位に立てたのだ。まだいい方だろう。

「（あ、グレネード・・・）じゃなくて！まだ諦めません！！」

迫りくるグレネードを回避して急降下。
地面に落ちたマグナムを拾いに隕石のように一直線で落ちる。
残りエネルギーが１００を切っている状態で、アルはある行動を起こしてしまった。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』

それにより一角のエネルギーは2桁。
地面に当るか当らないかのギリギリのところでマグナムを拾い上げてから、無理やり急上昇する。おかげで物凄く気持ちが悪い。

ドギュゥゥゥンッッ！！！！

5発×3。
左手にカートリッジを持った状態で待機させ、撃ち終わるごとにまたリロード。だが当るどころかかすりもしない。
完璧に諦めたこの後、一瞬でグレネードを食らってアルの負けとな

った。

第１５話　教員対生徒（後書き）

なんやかんやでアル君の初負け（本編内で
ドイツでラウラにボロ負けしたのは一応本編では書いてるだけなんで、実質初負けなんですよね。

クラス代表決定戦ではデストロイで一角が戦って勝っちゃうし。
クラス対抗戦でもデストロイで一角がクシャを逆リンチしちゃうし。
アル君がデストロイモードを操作できるようになるのはいつになるかなぁ・・・。

次回はシャルとようやく再開を喜ぶ話。
デストロイモード登場はまだまだ先になりそうです。
予定としてはやっぱりタッグマッチトーナメント時かな。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１６話　ルームメイト（幼馴染）

「で？」

「え、いや、その・・・え？」

昼休みの食堂にて。
山田先生に惨敗だったアルはシャルルとともに昼食中だ。
今日のアルメニューは珍しく洋食。
ミートスパゲティと何とも普通だがやっぱり量だろう。
シャルルもその量には驚いていた。

幼少のころはそこまで食べる、という訳でもない。
まぁ、それでもそこそこの量を食べていたのだが。

「なんで来たの？」

「なんでって、男でＩＳを動かせるからに決まってるよ」

「ふ～ん」

シャルルは実は女。
幼馴染なので顔を忘れるはずがない。

まさかの弟？
双子がいたなんて聞いたことも見たこともない。
というか、弟ならアルのことを知らないだろう。
あくまでいたらの話だが。

「で、ふぉこのさんふぃんふぁふぁみ？」

「い、今何と？」

「『で、そこの3人は何？』だって」

「一夏、今のよくわかったわね。正直わかんなかったわ」

3人とは一夏、セシリア、鈴のことだ。
アルと妙に仲のいい美少年シャルルのことが気になるのだろう。
口の中にモノが入ってる状態で喋るのはさすがに行儀が悪いが、その前に意味不明な発言を理解できる一夏がすごい。
さすがはメインヒロイン。格が違う。

そして最近箒並みに空気になってきたセシリア。
それと先日一夏と仲直りしたばかりの鈴だ。

「何って、アルとシャルル、でいいのかな？」

「あ、うん。いいよ。えっと」

「あ、私、織斑一夏」

「それじゃ、僕も一夏って呼ぶね」

「オッケー。で、2人が妙に仲いいから気になっちゃって」

「さりげなく自己紹介を混ぜましたわね」

流れるような自己紹介からの質問。
セシリアの突っ込みも華麗にスルーしている。
すぐに口の中のものを飲み込むアル。
まぁ、シャルルが女だということ以外は特に隠す必要もないので、
正直に「幼馴染だよ」と答えた。

「あ、そうなんだ」

「確かに同じフランス出身ね」

「まさかフランスに何か秘密が・・・」

セシリアの発言は案の定スルー。
まぁ、２人もフランスから男のＩＳ操縦者が出てくればそう思うだろう。
シャルルが女ということを知っていればその誤解も解けるはずだ。

いつの間にか山盛りのスパゲティを食べ終えたアル。
周りには一夏や他の女子がいる。
はっきり言って、喋りずらい。

シャルルといろいろ話をしたいのだが、発言を間違えれば女だということがばれるだろう。そう考えると食堂では迂闊にしゃべれない。

（男子同士だからどうせ部屋は同じだろうなぁ。一夏は昨日の夜に他の部屋に引っ越しちゃったし。まぁ、夜に話せばいっか）

そんなことを考えつつも食べるのをやめないアルだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「で？」

「うぇ？あぁ、えっと、また？」

同日夜。
結局アルの予想は的中、シャルルと同室になった。

今は邪魔はない。
部屋の鍵はしっかりと閉めたので誰かにいきなり入ってこられることはないはずだ。まぁ、どこかの生徒会長は問答無用でドアをぶった切るらしいが。

「そういえば、まだ再会の挨拶してなかったね。６年ぶりの再会」

「あ、うん。本当、久しぶりだね。おじさんやおばさん元気？ライルさんと――「死んだよ」――え・・・」

シャルルの言葉が止まる。
昔お世話になった人たちの死。
驚き、言葉が止まるのも当然だ。

「し、死んだってどういうこと・・・？」

「そのまんま。引っ越しして約１年で僕以外殺害。顔は誰かわからないように皮を引き剥がされ、心臓は銃弾で一発。全員リビングで

死体が見つかって、金目の物は盗まれておらず。なのにお兄ちゃんの部屋だけ荒らされてた」

「な、なんで・・・」

「知らない。たぶんＩＳ関係だと思うよ。兄弟そろってＩＳ関係者だからね」

シャルルの質問に淡々と答えていくアル。
もはや暗いムードが晴れなさそうだ。

だがそんな暗いムードのままでは困る。
アルとしてはいろいろ話したいから止まるのは面倒だ。
だから無理やり明るいムードを作ろうとする。

「ま、人間絶対死ぬから気にはしてないよ。ただみんな死ぬのが早かったってだけで」

「でも、アルは1人なんだよ？」

「そう？意外に1人じゃないよ？シャルがいたり一夏がいたりで、僕は1人じゃないと思うんだけどな」

「（す、すっごいプラス思考・・・）そ、そっか」

無理やりな笑顔はシャルルの暗いムードを吹き飛ばす。
何というか、いつもとはどこか違う気がする。
そう思い、シャルルは小さいころを思い出してみた。

物凄く元気で活発。

運動が大好きで毎日外で走ってた。
お兄ちゃん子でお姉ちゃん子。
考え方とかが子供っぽい。というか子供。

他にも色々。
今の消極的な性格とはまるで真逆。
元気で素直で純粋で健気でいつも笑顔。
あの時のアルがどこかに行ってしまったようにも思えた。

「どうせ、デュノア社社長に言われてきたんでしょ。僕の一角のデータ目当てで」

「え？あぁ、うん」

「安心していいよ、一角のデータなんてあげる気ないから。むしろ奪おう押したらシャルでも容赦しないよ」

「だ、大丈夫！僕もアルからものをとったりなんてしないよ！」

「それと、僕はたぶんフランスには戻らないと思う」

「どうして？」

アルの母国はシャルル同様にフランス。
通常、ＩＳ学園を卒業したら母国に帰るなり帰属してる組織や企業に戻るのだが、アルの場合、男なのでどうにも言えない状況。
ぶっちゃけてしまうと、どこにでも行けるが、一つしか選べない。

普通なら、母国のフランスに帰るだろう。
なぜかアルはフランスには帰らないと言った。

「僕はあの大天才、篠ノ之束の助手だからね。あの人のところに戻らなきゃいけないんだ。助手って結構大変なんだよ？」

「え・・・ええええぇぇぇっっ！！！！！？？――――――むぐぅ！」

「大声禁止ね」

「（コクコクッ）」

何たる爆弾発言。
大天才篠ノ之束には助手がいた。
しかもＩＳが動かせる男のアルがそうだ。

誰でも驚くし、大きな声も出したくなる。
シャルルもまた同じで、大声を出してしまい、アルに口をふさがれた。

「僕にここで勝とうと思っちゃダメだよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら親指でおでこをとんとんっとたたく。
その顔は昔の元気なアルそのものに見えたシャルルだった。

第１６話　ルームメイト（幼馴染）（後書き）

う～ん、何か微妙な回だった気がする。
ちなみに途中で出てきた『ライル』という人物はアル君の兄に当ります。
ギリギリで姉の名前が出なかった。

まぁ、そのうち出るんですけどまだですね。
というか名前がまだ決まってないって言うのが本当の理由なんですけど。

次回はしょっぱなからあのドイツ軍人が転校してくるぞーー！！
そして一夏に喧嘩を吹っ掛け、アル君がちょっとキレる？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第17話　転校生（ドイツ）（前書き）

眼帯兎がくるぞーー！！

ということで今回からラウラ登場！
久しぶりに一夏の出番『多』！
あのアル君がちょっぴりキレる？

第17話　転校生（ドイツ）

『負け犬』

これ以上にないほど今のアルにふさわしいかもしれない。
かつて一角の試験運用と、ドイツの『レーゲンタイプ』のＩＳの試験運用時の模擬戦で銀髪の少女に言われた言葉。

手に持つマグナムはたたき落とされ、ガトリングガンはプラズマ手刀で４挺全て真っ二つ。ＡＩＣで動きを封じられ、レールカノンで狙い撃ち。
完膚なきまでに痛めつけられ、敗北をたたきつけられた。

そんな、冷たい瞳を持つ眼帯を付けた彼女がやってきた。

「ラウラ・ボーヴィッヒだ」

２日間連続での転校生。
しかも同じクラスなんて何かがおかしい。
普通なら違うクラスのはずだ。

だが、そんなのはどうでもいい。
アルは目の前の眼帯を付けた銀髪の少女をみて、少しばかし昔のことを思い出していた。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

物凄くいたたまれない空気の中、山田先生がラウラに聞く。
だが返ってきたのは無慈悲ともいえる即答。
泣きそうな顔をする山田先生を無視し、ラウラはつかつかと一夏のところまで歩いていき、驚くべき行動に出た。

「貴様が――――」

右手を挙げ、一夏の顔めがけて手の甲で叩こうとした。

『！？』

パシンッ

いきなりの行動で、動けずに驚いているクラス全体。
肌と肌が軽く触れ、叩かれる音がした。
だが、一夏には何の異変もない。

「出会いがしらにそれはないんじゃないの」

それは隣にいたアルがラウラの右手を掴んでいたからだ。
誰も動けなかった中、唯一動き、止める。
その眼はいつもの弱気な眼と違い、セシリアと戦った時のような眼だった。

「ふんっ、負け犬ごときが私の邪魔をするな」

「っ・・・僕のことは何と言ってもかまわないよ。でも、友達を傷つけたりバカにしたりするのは許さない」

「許さない？私に勝てない負け犬が、か？」

「そうだよ」

ぎろりとアルを睨む冷たい瞳。
それでもなを退かないアルを見て興冷めしたか、掴まれていた腕を振り払い、空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ微動だにしなくなる。

「アルフォンス、お前も座れ」

「あ、はい」

千冬に言われ、すぐさま自分の席に戻る。
その日、アルはなんでだかあんまり口を聞いてはくれなかった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

翌日。
今日は土曜日なので午前は理論学習、午後は基本的には自由時間だ。
さらにはアリーナが全解放されているので、ほとんどの生徒がアリーナに来る。当然、一夏達も実習で来ていた。

ちなみにアルはいない。
ちょっとした用事と一角の調整があるらしい。

「はぁ・・・あっけなく負けた・・・」

「あはは、しょうがないよ。近接と中距離じゃ有効距離が違いすぎ

るからね」

先ほどシャルルと対戦した一夏。
近接武器の『雪片弐型』しかない一夏と、大量の重火器をインストールしてあるシャルルでは勝ち目がなかった。

セシリアのときのようにうまく行くかも、と思い諦めず立ち向かう一夏だったが、アサルトライフルやサブマシンガン他で蜂の巣。
あっけなくエネルギーを0にされて負けた。

「瞬時加速も読まれちゃったし、間合いはうまく詰められないし、ダメだなぁ、私」

「そんなことないよ。格闘オンリーでもちゃんと射撃武器の特性を把握して、瞬時加速と零落白夜の使いどころを間違わなければ勝てるって」

「条件多いよぉ・・・」

シャルルは先ほどから一夏に教えている。
鈴やセシリア、特に箒のアドバイスはあてにならず。

セシリアは正確すぎて無理がある。
鈴は感覚でやれと言うので、まぁ、わからないでもないがアバウト。
そして箒は・・・擬音が多くて鈴よりもアバウトすぎた。

シャルルは教えるのが得意か、とてもわかりやすい。
同じ候補生のセシリアや鈴とは大違いだ。

「じゃ、とりあえず射撃武器の練習してみようか」

「へ？あぁ、えっと、他の人の武器って使えないんじゃ？」
「普通はね。でも所有者がアンロックすれば、登録している人全員が使えるんだ。だから、はい」
「う、うん」
シャルルから手渡された銃はなんだか妙な重みを感じた。
実際、ＩＳのエネルギーフィールドで重さは感じられないのだが、初体験とあって精神的にそう感じられたのだろう。
とりあえず一夏は見よう見まねで構えてみた。
えっと、脇をしめて。
後、ちゃんと狙いを定めてっと。
意外に様になっているその姿。
シャルルも初めて使うにしては形がきれいだと褒めている。
白式には『センサー・リンク』と呼ばれる射撃戦で必要なものが見あたらないため、最初から目測でやるしかない。
しょうがないのでそのまま最初の一発を撃ってみた。
バンッ！
「うわっ！？」
炸裂音に驚く一夏。
自分で撃ってビックリしてしまうほど、自分がやるのと見るのでは違うと再認識する。

「どう？」

「なんていうか、『速い』って言う感じかな」

銃弾は速い、というのはわかっていた。

だが自分で撃ってみて、その速さはまた違ってくる。

さらには反動がＩＳによって相殺されているからといっても、やはり刀とはまた違う速さと手ごたえ。

初めての武器で心臓がバクバクとなっている。

「一マガジン分、全部撃っちゃってもいいよ」

「あ、うん」

「それにしても一夏、初めて撃つとは思えないね」

「あはは。なんていうか、ゲームセンターでのシューティングゲームみたいな感覚で構えてやってるだけなんだ。まぁ、所詮はゲームだけど」

「初めてでも十分凄いと思うよ。やり方は人それぞれだしね」

友達になってから仲良くなるのが早いこの２人。

意外に似た者同士なのかもしれない。類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。

途中、シャルルが一夏の後ろに回って姿勢を直してみたりもする。

だが形がいいので直すところはそこまで無いようだ。

「一夏、銃の使い方上手だね」

「アル！？いつの間に！？」

「今」

ガチャガチャと音を立てて2人の隣に来るアル。
いつの間に来て、ＩＳを展開させていたかわからない。
右手にはやっぱりガトリングガン――――がない。

珍しく手に何も持ってない、と思いきや両腕に2挺ずつガトリングガンを連結されて装備させていた。今から何をしでかす気なのだろうか。
しかも背中のバックパックにはマグナムが待機されている。
何というか、物騒としか言いようがない。

「ねぇ、ちょっとアレ・・・」

「ウソッ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

ざわざわとアリーナがざわつき始めた。
一夏の射撃練習を見ていた2人と一夏自身も、その注目の的に視線を移す。

そこにいたのは噂の転校生。
ドイツの代表候補生で、アルのことを『負け犬』と呼び、一夏の存在自体を嫌っている眼帯少女ラウラだった。

「おい」

「・・・なにかな」

ＩＳのオープンチャネルで話しかけてくるラウラ。
初対面で平手打ちを喰らいかけた一夏は、気が進まなそうに返事をする。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がない」

「貴様にはなくとも私にはある」

「そう。だったら学年別トーナメントまで待てば。その時でいいでしょ」

いきなり戦いを申し込んできたラウラに対し一夏は拒否。
理由がないのにいきなりは戦わないし、あちらにあるといっても今のアリーナでは人が多すぎるからかえって危険だ。
むしろ、学年別トーナメントで決着をつけた方が早い。

「ふん。ならば――――戦わざるを得ないようにしたやる」

突然ラウラは左肩に装備された実弾砲を一夏へ向けて撃った。

「っ！？」

ゴガギンッ！！
その射線上にアルが飛び込む。

左手にシールドを展開し、装備して実弾砲を弾く。
そして流れるように両腕を構え、何の躊躇もなく撃った。

ガガガガガガガガッッッッ！！！！！！！！！！

ビームガトリングガン４挺の一斉射撃。
４×４、合計１６の砲身から大量のビームが放たれる。

「ふんっ！」

ラウラは右手をかざし、よけようともしない。
そして緑色の大量のビームはラウラに当る前に止まった。

「次はビームマグナムを当てる」

「無駄なことを。負け犬ごときが私に立ちはだかるなど」

「僕は今怒ってるんだ。言ったよね？友達を傷つけたりバカにしたりするのは許さないって」

背中のビームマグナムを構えたアル。
その眼は本気で怒っている、強い眼。
負け犬、なんて言葉は絶対に似合わない。

『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけた担当の教師がスピーカーを持って叫んでいる。
２度も横やりを刺されたラウラは興が削がれ、あっさりと戦闘態勢を解除するラウラ。それを見たアルも同じように解除する。

「一夏、怪我とかない？」

「え？あぁ、うん。大丈夫だよ。アルが守ってくれたから」

振り返ったアルはいつもの優しい顔。
さっきまでの怒った眼差しはどこへ行ったのやら。

「あ～、重かった。あれ、片腕でも十分重いんだよね～」

「片腕・・・ってことはガトリングガン？」

「うん。1挺だけなら問題ないんだけどね。ていうか、ＩＳを展開してて重いとか関係ないはずなのに、重さ感じちゃうんだ。どうしてだろ？というかもう戻ろうよ。僕おなか減ってきた」

「あ、いつものアルだ」

「何か言った？」

「ううん、何にも」

第17話　転校生（ドイツ）（後書き）

なんか今回はアル君の出番が少なめでしたね。
まぁ、こんな回もいいんじゃないかな。

次回はついにアル君がブチギレてデストローイ！！
操作は一角に持っていかれるが、怒りを拳に込めてラウラにぶちまける！！
殴る！蹴る！アッパー！たたき落とし！掴み！タックル！その他！
近距離格闘技が豊富です（笑）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１８話　怒り（前書き）

前回のあとがきにデストロイが出ると書きましたが、ちょっと予定変更。
終盤には出るには出るんですが、バトルにはなりません。

第18話　怒り

「そ、それ、本当！？」

1週間の始まり月曜日の朝。
廊下まで大きな声を出していたのはおそらく一夏だろう。

「なんだろう？」

「さぁ？」

隣にいるシャルルは疑問。
アルはどうせ自分には関係ないだろうとお手上げポーズ。
まぁ、いつものことだ。

「イヤ、本当かどうかはわかんないんだけど、この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したらアル君と――――」

「アルがどうかしたの？」

「「「きゃあぁぁっ！！？」」」

シャルルが教室に入るなり聞いてみた。
すると女子の群れは何事かと声をあげながら散り散りになる。
突然のその行動にシャルルは「何かした・・・？」みたいな目でアルの方向に振り返った。アルはそれに対し苦笑いしかできない。
とりあえず自分の席に荷物を置く。

「で、何だったの？」

「え？あぁ、えっと、さぁ？私、さっき来たばっかりだし、アルと同じ辺りで区切られちゃったから」

「思いっきりおっきな声出してたのに？」

「・・・アル、いいこと教えてあげるよ。『口は災いのもと』っていうんだよ？」

「え？あぁ、うん。そうだね。で、どうして？」

一夏なりの優しい忠告を全く理解していないアル。
シャルルは、何か悟った様な顔をしてた。
さらに一夏は物凄く笑顔で、頭に血管マークが見える。

状況が全く読めないアルはとりあえず諦めた。
その諦めを確認し、一夏の頭の血管マークは消える。

「・・・（ちらっ」

「・・・（ふるふる」↑お手上げポーズ

ｓｉｄｅｏｕｔ

「「あ」」

そろって不抜けた声を出したのは鈴とセシリア。
代表候補生の２人だった。
場所は放課後の第３アリーナ。
目が合うや否や見えない火花を散らす。
「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」
「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」
お互いの狙いは最高で優勝、最低でも優勝らしい。
目に見えない火花がさらに激しくバチバチと散らされている。
「ちょうどいい機会だし、この場でどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」
「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着を付けようではありませんか」
瞬時にＩＳを展開する両名。
鈴は『甲龍』、セシリアは『ブルー・ティアーズ』だ。
そしてすぐさまメインウェポンをコールする。
対峙した２人が模擬戦を始めようとした時だ。
「「！？」」
いきなり違う方向から超音速の砲弾が飛来する。

緊急回避の後、２人はそろって砲弾が来た方向を睨む。
そこには漆黒のＩＳと銀髪に眼帯。
機体名が『シュバルツェア・レーゲン』
操縦者は――――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・」

苦々しくその名を口にするセシリア。
鈴は親友一夏を殴ろうとしたやつ、で認識されている。

「・・・どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

その手に握られる双天月牙を肩に乗せ、衝撃砲『龍砲』を準戦闘態勢へシフトさせる。セシリアも手に持つライフルを一層強く握りしめた。

「中国の『甲龍』に、イギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

牽制の砲撃から今度は口での挑発。
その言葉に２人は口元をひきつらせた。

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたい、なんて大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら、鈴さん。こちらの方はどうも共通言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？」

「貴様たちの様なものが、私と同じ第3世代の専用機持ちだとはな。数くらいが能のない国と、古いだけが取り柄の国はよほど人材不足と見える」

ぶちっ！

――最終安全装置解除――

2人の頭の中で何かが切れる音がした。
その証拠に武器の最終安全装置も解除いてある。

「この人、スクラップがお望みみたいよ！！」

「そのようですわね」

「ふっ、2人がかりで来たらどうだ？下らん負け犬を取り合うようなメスに、この私が負ける物か」

またもや挑発。
しかも今度は負け犬――つまりはラウラで言うアルの事を馬鹿にしてもいる。

この言葉に2人は堪忍袋の緒が切れた。
挑発なんてもはや関係ない。

「今何て言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたんだけど！？」

「この場にいない人間の侮辱まですとは、その軽口、二度とたたけぬようにして差し上げますわ！」

怒りをあらわにする鈴とセシリア。
ラウラは右手を自分に向けて振り、またもや挑発した。

「とっとと来い」

「「上等！！」」

ｓｉｄｅｏｕｔ

（なんであんな噂流れたんだろ・・・もしかして、アルに告白した子とかが？）

放課後、一夏はシャルルとアリーナに向かっていた。
またもやアルはいない。
先にアリーナに行って準備をしているそうだ。

会話がないので少し考えていた噂。
その内容とは『学年別トーナメントの優勝者はアルと付き合える』

どこからそんな噂が流れたのだろうか。
本人が聞いたら本気でイヤがりそうだ。
まぁ、アル自身の耳には入ってないので何よりだろう。

「今日使えるのは確か第３アリーナだよね？」

「え？あぁ、うん。人が少ないらしいから、もしかしたら模擬戦とかもできるって。トーナメントまで日がないから頑張んなきゃ」

結論から言うと、アルに拒否権はなしだろう。
だとすれば、優勝さえすればアルと付き合えるのだ。
年下好きで何が悪い。
恋愛に年齢なんて関係なのだ。

一夏は心で1人決意する。
何が何でも優勝して見せると。

そんなことを考えているアリーナに到着。
だが人が少ないとう情報とは真逆で、人は結構いる。

「うわ、すごい人だかりだね」

「模擬戦でもしてるのかな？」

ドゴォォンッ！！
突然の爆発に驚き、視線を移す。
煙を切り裂く様に現れた影は3つ。

赤、青、黒。
アリーナ内にいたのは鈴、セシリア、そしてラウラ。

状況から見て、ラウラが1人の2対1。
だが優勢なのは、有意なはずの2人ではなく1人のラウラだった。

鈴とセシリアの首にはワイヤーブレードがまかれている。
ラウラのＩＳ――『シュバルツェア・レーゲン』の装備だ。
そして、そのまま自分のもとにたぐり寄せ、暴虐が始まる。

殴る、蹴るの繰り返し。
２人の腕に、脚に、体にラウラの拳がたたき込まれた。
「これじゃシールドエネルギーが持たない！」
２人のＩＳのどんどんダメージが増加していく。
この状態でＩＳが強制解除されれば、冗談抜きで生命の危機にかかわる。
だが、そんなのお構いなしでラウラは手を止めない。
いつもの無表情な顔が、確かな愉悦に口元をゆがめたとき、一夏の何かが切れ、白式を展開しようとした時だった。
ドギュウウウンッッ！！！！
いきなりアリーナのピットから放たれたのはビームマグナムそのもの。
その一撃はラウラのワイヤーブレードを焼き切った。
さらに立て続けに２発目、３発目が放たれる。
ドギュウウウンッッ！！！！
ドギュウウウンッッ！！！！
５発目撃ち終え、ピットからその影が出てきた。
全身の装甲は開き、むき出しになった内部装甲は赤く発光している。
アルの純白の全身装甲のＩＳ『一角』のリミッターが解除された状態『デストロイモード』だ。
「来たか、負け犬」

「……」

第１８話　怒り（後書き）

次回こそラウラフルボッコのターン！
目には目を、歯には歯を、暴虐には暴虐をです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第１９話　暴虐と暴虐

「来たか、負け犬」

ピットから出てきたのはアル。
展開した一角はリミッターが解除されている。

ラウラよりも冷たい瞳は、彼女を睨む。
今回はしっかりとシールドを持っているが、もう片手には何も握られていない。まさかとは思うが、素手で戦う気なのかもしれない。

「・・・」

「来い。もう一度敗北を叩きつけてくれる」

ラウラと距離を少し置いて鈴とセシリアが倒れている。
ＩＳは強制解除され、見る限りは命に別状はない。

挑発してくるラウラに対し、アルはまたもや無言。
だが行動は速い。目にもとまらぬ速さの瞬時加速を使い間合いを詰める。
その驚異的加速にラウラは驚くが、まだ驚く程度。
瞬時にＡＩＣを発動させ、動きを止めようとする。

しかし。

「なに！？」

確かに動きを止めたはず。

否、止めることができなかった。

一角の驚異的加速はＡＩＣよりも速い。
だが乗っているのは所詮１ヶ月や２ヶ月程度の素人。
さらには一度コテンパンにしたのだ。
パワーだよりで自分に勝てるわけがないとラウラは確信していた。

だがその考えが間違いだ。
今のアルは、アルであってアルではない。
クラス対抗戦に乱入してきた謎の緑色のＩＳ――クシャトリヤをたった１人で、しかも奪われた甲龍のコアを奪還して撃退したのだ。
いまだに候補生のラウラは敵ではない。
そして、今度はアルの攻撃が始まった。

バキャッ！！

まずは右ストレート。
とらえたのはラウラの主力装備レールカノン。

貫いた右手を引き抜き、今度は左手で引きちぎった。
引きちぎったレールカノンを投げ捨て、再び攻撃に移る。

素人の動きを止められなかった。

それだけでもラウラのプライドが許さないのに主力武器まで破壊された。
これ以上の屈辱はない。本気でつぶす気にかかる。
両腕のプラズマ手刀を展開させ、反撃に入った。
だが、ラウラ程度じゃ今のアルは止められない。

アルは再び姿をくらます。
すぐさまその姿をとらえようと、ハイパーセンサーが探すがコンマ1秒遅い。
気がついた時にはアルはラウラの腹めがけて右回し蹴りをたたき込んでいた。

「ぐはっ！！」

アリーナの壁にたたきつけられるラウラ。
攻撃を当てるどころか手を出せない。
しかもこの痛みで絶対防御機能が機能していないことに気がつく。

ゆっくりと足音を立てながら近づくアル。
その冷たい瞳はラウラ以上。
敵を抹殺するマシーンのようだ。

壁際で倒れているラウラをつかみ上げ、右アッパーを繰り出す。
絶対防御が切れているからやめてくれ、なんて言えない。
さっきまで自分がやっていたこととほぼ同じことなのだから。

空中を舞うラウラに、アルは左手で地面へ叩き落とすと言わんばかりに拳をたたき込む。これは完璧に模擬戦でも何でもない。暴力だ。
重力に従い、ラウラは再び地面に落ちる。
だがアルはそれを許さず、空いた右手でラウラの首をつかみ上げた。

さらにそのまま右足のひざでひざ蹴りを繰り出す。
無力なラウラは今の今まで気絶していない。
その部分だけは認めてもいいところだ。
だがそのぶん痛みは直に伝わってくるだろう。

ひざ蹴りを直撃させ、右手を離すが追い打ちでアルはシールドで思いっきりタックルをかます。
再びアリーナの壁にたたきつけられる。
そう思い、衝撃に備えていたラウラの期待をアルはことごとく裏切った。

ガシッ
最後の最後で首を掴まれた。
そしてそのまま力を入れられ、息が苦しくなる。

「ぐ・・・ぅ・・・」

「・・・」

ギリギリと力を込めていくアル。
だが、自然と力が抜けていくのをラウラは感じていた。

最終的にはアルはラウラを手放し、その状態で固まってしまう。
赤く発光していた内部装甲は光をなくし、灰色に戻る。
そして全ての装甲は閉じ、アルは動かなくなった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

（ＩＳの破損レベルはＤ手前。まさか手加減されていたと言うのか？）

同日夕方。
アルに本気で蹴られたり殴られたりしたはずなのに特に怪我はなか

った。

これは手加減をされていた、ということだろう。
もしくはそれ以外のなにか。
どちらにせよなめられていたということには変わりない。

そして専用機『シュバルツェア・レーゲン』の破損レベルはギリギリE。
自分がボロボロにした鈴とセシリアの少し手前。
Cまで行けば、トーナメントには出れない。

だがD手前ということは、まだ直せば出られる。
つまり、トーナメントで決着をつけろ、ということなのだろう。

（いいだろう。私が負け犬に負けていいはずがない！）

sideout

「ん・・・あ、あれ・・・？」

目が覚めるとそこは自室、ではなく保健室だった。
起き上がると横にはセシリアと鈴。
前にはシャルルと一夏の姿があった。

「僕、何してたの・・・？」

「お、覚えてないの！？」

「・・・うん」

「自分でラウラをボッコボコにしたのに？」

「そ、そうなの？」

アルの記憶にはラウラと戦った、というものはない。
覚えているのは、ピット内での準備。
そしてそこから見たラウラの暴虐だけ。
記憶がなくなったのは、やめろ、と思ったときからだ。

それを聞いた４人は呆れた。
むしろ、どうして記憶がなくなるのかわからない。
だが一夏は少し心当たりがあった。

毎回、といっても3回だけだがデストロイモードに入るとアルは無言になる。その時だけ、何かが起きていて、アルの記憶がないんじゃないか。
セシリアの時は覚えていたが、その節が有効かもしれない。
それでも、一夏はアルが許せなかった。

ラウラの暴虐は確かに許せない。
だが、それに対し同じ暴虐で返すのはダメな気がする。
そういう場合は、正々堂々と正面からやるべきだと。
それを一夏はアルに正直に伝えた。

「ぁ・・・ぇっと――――」

アルが喋ろうとした時だった。

ゴゴゴゴゴゴ・・・・・！！！！

どこからか地鳴りのようなものが聞こえる。
現に保健室の棚の便は揺れていた。
そして――――

ドゴーーンッ！！

「アル（ラプラス）君！」

「デュノア君！」

入り込んできた、いやなだれ込んできたのは大量の女子。
その手には全員同じ紙が握られている。
書かれている内容は次の通り。

『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、2人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた者同士で組むものとする』

全員の目的は男子2人のどちらか。
シャルルは女子だが、男装しているため男子と思われている。

「私と組もう、アル君！」

「私と組んで、デュノア君！」

なんでいきなりこんなルールになったかはわからないが迷惑だ。
だが、アルにとってはちょっとチャンス。
困惑するシャルルには悪いが、今度何かお詫びするつもりだ。

「っと、その・・・一夏、僕と組んで」

「え？」

『え？』

声をあげたのは一夏だけではなくその場全員。
まさか一夏を選ぶなんて思ってもいなかったのだろう。

「さっき、一夏言ったよね。正々堂々やるべきだって」

「・・・うん」

「だから、僕はラウラと正々堂々と戦う。だから一夏にはそばで見ていてほしいんだ。ちゃんと正々堂々戦ってる所を」

「わかった」

ちょっと告白まがい。
だが一夏自身はそう受け取っていないし、アルもそのつもりはない。
まぁ、その場の全員は勘違いしているが。
そんな時。

ぐぅぅ〜〜〜。

「っ！？」

「くすくす）ご飯、食べにい行こっか」

「う、うん・・・」

第１９話　暴虐と暴虐（後書き）

次回は学年別トーナメント！
アル＆一夏の相手は！？
そしてラウラのペアはまさかのあの人！？

誤字脱字、感想あればお願いしします。

第２０話　学年別タッグトーナメント　前編

『誰かと一緒に何かをやるときは、見栄なんか張らないで、ちゃんとお互いに頼ることが大切なんだ』

つい先日思い出した姉の言葉。
あの日から、ずっと忘れていた記憶のかけら。
それのほんの一部が思い出せた。

一角に乗る＝記憶を取り戻せる。
確定事項ではないが、何かを思い出すにはいいきっかけだ。

（そうだったね。頼ってもいいんだよね）

今日は学年別タッグトーナメント当日。
アルは一夏とペアを組んで出場だ。
更衣室でトーナメント表を見てみると、組み合わせは最悪。

Ａブロック　１回戦　一組目
アルフォンス・ラプラス＆織斑　一夏
ｖｓ
ラウラ・ボーデヴィッヒ＆シャルル・デュノア

完璧に狙っているような気がするが、気にしてはいけない。
アルにとってはどちらも強敵なのだから。

（参ったなぁ・・・シャル、最近機嫌良くないし、必要最低限のことしか離してくれないからなぁ。しかも１回戦目から当るなんて。もっと言えばペアはラウラだし）

ちらっと横を向くがちょっと不機嫌そう。
ため息をつくアルは災難が付きなさそうだ。
（ま、どっちにしても負ける気はないけどね）

ｓｉｄｅｏｕｔ

「まさか1戦目で当るとはな。待つ手間が省けたぞ、負け犬」
「こっちも。まったく同じ意見だね」
目の前にはラウラとシャルル。
それに対峙するのはアル、隣に一夏。
そして試合開始5秒前になった。
4，3，2，1――――試合開始
「「たたきのめす！」」
試合が始まった瞬間、重なる2人の声。
アルは右手にハイパーバズーカ、左手にはシールドで、その裏にガトリングガン2挺を連結させて装備している。
瞬時加速を使い、ラウラではなくシャルルに、アルが、はなく一夏が突っ込んだ。シャルルは想定外の事で、防御が間に合わず、まともに一夏の零落白夜を喰らってしまう。

『まず、一つ目の作戦はフェイント』

『う、うん』

『僕がまず最初にラウラに特攻を仕掛けるふりをして加速をするから。そうしたら一夏は瞬時加速と零落白夜を使いながらシャルに斬りかかって』

『うん・・・って、えぇっ？』

『ラウラはたぶんＡＩＣで僕の動きを止めに来る。そうすると一夏の攻撃が簡単に入るんだよ。でもそこをシャルがフォローしにくると思うから、そこを狙うんだ』

試合前に行った即席の作戦会議。
その内容の一つ、フェイント作戦は成功だ。

一夏の白式の単一仕様能力『零落白夜』
使用中はシールドエネルギーを使う諸刃の剣だが、その能力はバリア無効化攻撃。本体に直接ダメージを与えることができる。
そのおかげで、シャルルのシールドエネルギーは５００から２００まで削れた。

先に攻撃を仕掛けたことから、流れはアルのペアに向く。
だがラウラはもともとシャルルなんて眼中にない。
ＡＩＣで捕まえたアルに左肩のレールカノンを向けた。

「はあぁぁっ！！」

「ちっ！」

すぐさまこちらへ戻ってきた一夏がラウラに斬りかかる。
だが、それをなんなく避けるラウラ。
しかし動きを止めていたアルに自由が戻ってしまう。

「一夏！」

「了解！」

二つ目の作戦はまずシャルルを潰す。
例えラウラが多対一の戦闘に特化をしていても、それには欠点がある。
だがその欠点をシャルルが埋めかねないので、厄介なシャルルを癖などを知ってるアルが相手をして倒してから、ラウラを2対1で相手をしようとなった。

ガキィンッ！！
右手に持っていたバズーカを格納し、サーベルに持ち替えての近接戦闘。
シャルルは持ち前の器用さを使い、接近ブレード『ブラッド・スライサー』をコールしてアルの攻撃を受け止めた。

「アル、手加減はなしだよ？」

「（なんで笑顔なの！？すっごく怖いんだけど！）わかってるよ！！」

左手にもつショットガン『レイン・オブ・サタディ』が火を噴く。
シャルルの特技『高速切替』で現れたそれを、アルはかわすことができない。

零距離射撃を恐れ、無理やり弾いてシールドを構える。
だがシャルルはアルが離れるのを許さない。
近接ブレードでもう一度接近戦に持ち込んでくる。
シャルルの戦い方は『砂漠の逃げ水』（ミラージュ・デ・デザート）
近距離で斬りあっていたと思えばいきなり零距離射撃。
間合いを離せば剣に持ち替えてまた近接格闘。
押しても引いても崩すのが難しい戦法だ。
しかし、その戦い方が今回はあだとなった。

ジャキッ

「零距離射撃には零距離射撃でどお？」

シールドで防御の構えを撮っていたと思ったシャルル。
一気に間合いを詰めてきたタイミングを逃さず、アルはシールドの裏に装備したガトリングガンを突き付ける。
そしてお返しといわんばかりにガトリングガンを近距離で乱射しまくった。

ガガガガガガガッッッッ！！！！！！！！！！

手に持つ近接ブレードで数発はじく。
だがガトリング、しかも２挺分はさばき切れるはずがない。
ほどなくしてシャルルは緑色の雨に包まれた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

一方ラウラｖｓ一夏。
接近武器しかない一夏はラウラの猛攻を１人で耐えていた。
集中力を最大限まで高め、プラズマ手刀とワイヤーブレードを弾く。
油断して距離をとってしまわぬよう、注意しながらいつ切れるとも
わからない集中を限界まで維持する。

アルがシャルルを少しでも早く仕留めてくれれば、後は何とかでき
る。

そう信じ、耐え凌ぐ。
零距離での高速戦闘はやはり集中力を使う。
もう持ちそうにはない。

「・・・そろそろ終わらせるか」

そう呟き、プラズマ手刀を解除する。
そして右手をかざした。

やばい！

そう確信した刹那、一夏の動きはピシリと止まった。
ワイヤーブレード２本と、左手のプラズマ手刀が一夏に襲いかかる。
その時だった。

ドギュウゥゥゥンッッ！！！！

一夏とラウラの間をビームマグナムが駆け抜ける。
ワイヤーブレードは依然と同じように焼き切れ、ラウラの左手のプ

ラズマ手刀を掠めた。
ＡＩＣを解除し、すぐさま距離をとる。
先を掠めただけなのに２割もシールドエネルギーを削られたのだ。
直撃したら、なんて考えたくもない。

「お待たせ」

「シャルルは？」

「ガトリングの雨を喰らってお休み中」

バキンッ
連結部分が外れる音がして、左手のガトリングガンが２挺とも崩れ落ちる。
地面に落ちると同時に粒子に変わり、格納された。

「さぁ、こっからが本番！正々堂々と２対１！」

第２０話　学年別タッグトーナメント　前編（後書き）

次回もタッグトーナメントです。
ラウラが暴走しますね。
後、アル君がデストロイしますね。
全然制御できないけど。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２１話　学年別タッグトーナメント　後編

「これで決める！！」

零落白夜を起動させた一夏がラウラへ突っ込む。
ラウラのＡＩＣによる拘束攻撃が連続で襲いかかる中、急停止、転身、急加速で何とか切り抜ける。
この集中力がどこまで持つかが勝負のカギだろう。

「ちょろちょろと目障りな・・・！！」

立て続けにワイヤーブレード。
複雑な動きで一夏に迫るが――――

ドギュウゥゥンッッ！！！！

ワイヤーブレードを再びマグナムが焼き切る。
何も、一夏は１人で戦っているわけじゃない。
今はアルが一緒なのだ。

「（カートリッジは残り３発。一撃でも当てられれば）一夏！」

「了解！」

追加でさらに迫るワイヤーブレードを潜り抜け、ラウラを攻撃範囲内にとらえる。そして勢いよく雪片で斬りかかった。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めている」

「普通に斬りかかればね。でも、これなら？」

「！？」

一夏は足元に向けていた切っ先を起こし、体の前へ持て来る。
斬撃がダメなら突撃で。読みやすさは変わらないが、線と点では捕まえるのに圧倒的に点の方が難しいのだ。

「無駄なことをっ！」

ピシリと一夏の動きが止まる。
ＡＩＣで完璧に体を固定された。

「残念だったな」

「そう？私ばっかりに気をとられると、痛い目見るよ？だって私たちは”２人組”なんだから」

「！？――――ぐはっ！！？」

バゴォンッ！！
ラウラの左肩に装備されたレールカノンが爆発する。
そしてそれを破壊した張本人は、バズーカを持っていた。

そう、ＡＩＣの弱点はこれ。
１対１なら最強を誇ってもいいが、２対１のときなどは決まって片方しか動きを止められない。対象に意識を集中させねば効果がないからだ。
その証拠に一夏への拘束は解除されている。

「くっ・・・この、負け犬めが！！」

ワイヤーブレードを多数展開し、アルへ襲いかかる。
だがアルは今、一夏と2人組みなのだ。
片方だけに気をとられれば大変なことになる。

「だから、痛い目見るよって言ったじゃん！！」

「っ！？」

再度雪片を構えた一夏。
今度はよけきれない、一撃必殺を確信した。のだが――――

キュゥゥゥン・・・

「えぇっ！？ちょ、こんなときにエネルギー切れ！？」

零落白夜の使いすぎだろう。
エネルギーの刃は徐々に小さくなり、そして消えた。

「残念だったな」

一夏の懐に飛び込むラウラ。
その両手はプラズマ手刀が展開されている。
今の一夏のエネルギー残量なんて、蝋燭の灯も同然。
ちょっとでも掠ればゲームオーバーだ。
だが、そんなのはアルが許さない。

バキッ！
瞬時加速を使い、2人の間に割り込む。

そして思い切りラウラを殴った。

「まずはセシリアの分。で、これは、鈴姉の分！」

立て続けに、今度はシールドで殴る。
武器を使わない肉弾戦、なんてあまりいいものじゃないが、それでも十分威力はある。
おかげでラウラのシールドエネルギーをごっそり奪うことができた。

ビームマグナムは使わない。
むしろ、殴りでお返しした方が清々する。

そして最後の一撃を叩き込んだ時だ。
機体に紫電が走り、ＩＳが強制解除されそうになる。
だが次の瞬間、異変が起きた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「うあぁぁぁっっ！！！！！」

突然、ラウラが叫びだす。
それと同時にシュバルツェア・レーゲンから激しい電流が流れだし、
間近にいたアルを吹き飛ばす。

「アル、大丈夫！？」

「う、うん。大丈夫」

吹き飛ばされたものの、機体には何の問題もない。
だが目の前ではラウラのＩＳが”変形”していた。
いや、変形ではない。
ドロドロと溶け出し、流動したそれはラウラを包みこんでいく。

ＩＳは原則として変形はできない。
あるとすれば『初期操縦者適応』と『形態以降』ぐらいだろう。
そんなあり得ない事が目の前で起きていたのだ。

シュバルツェア・レーゲンだったそれはラウラを包み終えると、表面を流動させながら、少しづつだが形になろうとする。
やがて、形をなしたそれはＩＳに似た”なにか”だった。

最小限のアーマーが腕と脚に。頭部はフルフェイスのアーマーで、目の個所は装甲の下にあるアイラインセンサーが赤い光を漏らしている。
そしてその敵にある武器は――――『雪片』

かつて千冬が使っていた刀。
それに酷似、いや、もはや複写してるようだ。

「っ！？」

形が整うと同時に、それは突然一夏との間合いを詰めてくる。
さらにそのまま勢いよく必殺の一太刀を入れてきた。

「一夏！」

ガキィ、バキィッ！！
２人の間に飛び込み黒いＩＳの攻撃を受け止める。

受け止めたシールドは雪片に似た刀により、一刀両断。
勢いはそのまま、アルの頬を掠めた。

「っ！？」

体制を立て直している次の瞬間だった。
再び、今度はアルの懐に飛び込んできた黒いＩＳ。
刀はアルの首めがけて振られた。

（やばい、死ぬ・・・）

ガキィンッ！！

一瞬のことだった。
死を確信したアルは何もできずにそれを迎える。
そう思っていたが、それはやってこない。

気がつけば、一角はリミッターが解除されていた。
右手を構え、ビームトンファーを使って刀を受けてめている。
その瞳はいつものように酷く冷たく、冷徹だ。

防がれたのを確認した黒いＩＳは距離をとる。
アルもそれを見てトンファーのサーベルを解除し、背中のサーベルを抜いた。

全員が見守る。
一角の姿の変わった今のアルにはだれも勝てない。
例え黒い謎のＩＳだからといっても、４枚羽をたった1人で撃退した今のアルに敵はいないのだから。

そしてついに動いた。
先に仕掛けたのはやはり黒いＩＳだ。

ガキッ！バキィ！ガキィン！

千冬の動きを真似た太刀筋。
素人のアルじゃ、避けることはできないと思えた。
だが、アルはあろうことかそれらすべてを右手に持ったサーベル１本で受け止めており、やがては動きが止まる。

ギリギリと無理に弾こうとする黒いＩＳ。
冷たい眼のアルは珍しく口元が笑っていた。
そしてついに、今まで使わなかったもう１本のサーベルを引き抜き、勢いよく受け止めていた刀に斬りかかり、黒い雪片をへし折った。

しかし、すぐに雪片を再生させようとする。
流動する体と同じ物質だから出来ることだろう。
そんなことはさせまいと、アルは両腕を振り上げ、そのまま両手を振りおろした。

それを危険と感知した黒いＩＳは両腕でサーベルを受け止める。
だが受け止める場所が悪かった。掴んだのはサーベルの刀身自体だ。
力をいれると、そのまま両腕を焼き切っていく。
さらにサーベルを左右に開き、両腕を使いものにならなくした。

「死ね・・・」

その小さなつぶやきはだれにも聞こえていないだろう。
アルはまず左手のサーベルで脚を両断、右腕でボディを縦に切り裂いた。

まさかラウラごと斬った！？

全員がそう思う中、切り裂いたボディからラウラが出てくる。
どさりと地面に倒れるが、アルはそんなものには興味なし。
再びラウラを取り込もうとする黒い塊に向けてビームマグナムを構えた。

ドギュウゥゥゥンッッ！！！！！
ドギュウゥゥゥンッッ！！！！！
ドギュウゥゥゥンッッ！！！！！

残りの3発すべてを何の躊躇もなく、すぐそばにラウラがいるにも関わらず撃ち放った。そこに残ったのは排出されたカートリッジと、シュバルツェア・レーゲンの残骸とコア。
そしてそれを破壊した一角とアルだけだった。

第２１話　学年別タッグトーナメント　後編（後書き）

２日ぶりの更新でしたね。
遅れて申し訳ありません。

今回はまさしくデストローイ。
全部戦闘描写で終わるのはやっぱ良いですね。

それにしても、デストロイのときに相手が無口だと会話が少なすぎて寂しい・・・。
片方が無口でもう片方が無口（といくか口なし）。
結局地の分だけで寂しいです。
現に今回の終盤はそれでしたし。

まぁ、次回はラウラと保健室での話（アル君の独り言）
それと翌日のアレですかね。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２２話　和解

目が覚めると、またもや保健室だった。
もうこのパターンは慣れている。
どうせまたデストロイモードを使って何かしたに違いない。
記憶がないのはいつものことだ。

気がつくと、横から会話が聞こえた。
この声は千冬とラウラだ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「え、あ、わ、私は・・・私、は・・・」

突然名前を呼ばれたかと思えば自分は誰かと聞かれた。
困惑するラウラは、自分の名前を言ってない。
いや、言えないのだろう。
そんな何も言えないでいるラウラに、千冬は少しおかしなことを言った。

「誰でもないのならちょうどいい。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間なら山のようにある。何せ3年間はこの学園に在籍しなければならないのだからな。その後も、まぁ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

励ましの言葉を言い終えると、千冬は保険室を出ようとする。
その時に、一瞬目があってしまい、アルは目をそむけてしまった。
それを見て少し口元を緩め、捨て台詞のように言い残した。

「あぁ、それから、お前は私や誰かになることなんてできないぞ」

言いたいことを言って逃げた。
いろいろ言っておきながら、結局は自分で考えろ。
あの千冬がこんなにずるいなんて思っていなかった。
だからこそか、なんだか笑えて来てしまう。

「（全くホントずるいよ。僕に後始末任せるなんて）ラウラ」

「っ」

先ほど、保健室を出るときにアイコンタクトで頼まれた。
本当に迷惑でずる過ぎる。

そんなカーテン越しのアルに対し、今のラウラは喧嘩腰じゃない。
さっきまで千冬と話していたからだろうか。
アルとしては話しやすくて助かる。

「お前が話す前に、一つ聞きたいことがある」

「何でも」

「・・・お前は、どうしてそんなに強いんだ？」

意外なことを聞いてきた。
アルよりも、はるかにラウラの方が強いのに、なんでそんなことを

聞いてきたのだろうか。だが返答は同じだ。

「僕は弱いよ。誰よりも、ラウラよりも、一夏よりもね」

「弱い？そんなに力を持っていて、なんで弱いなどといえる？」

アルは自分自身のことがよくわかっていた。
一部の記憶がないからといっても、それに変わりはない。
だから、誰かに強いと言われても、弱いとしか返せなかった。

それに対して、ラウラは疑問しか浮かばない。
自分をたたきのめした、完膚なきまでに敗北を突き付けてきたのに、
わからなかった。

「そうかな。それだとしても強さは人それぞれだよ。僕がラウラに
勝てるのはＩＳに関する知識だけかな」

「・・・お前、私をなめてるのか？」

「ううん、全然。それに、それでもラウラが僕を強いって思うんだ
ったらそれはただ、僕が強がってるだけ、強くなろうとしてるだけ
だからだよ」

「・・・」

「それとね、強くなったら誰かを守りたいんだ」

ラウラはついに黙り込んで聞き始めてしまった。
だが、それはちゃんと聞いてくれているという証拠だ。
アルはさらに続ける。

「僕、家族を亡くしちゃったからさ。強かったら、誰かを守れるでしょ。誰かを失うのはもう嫌なんだ。ラウラが誰かを傷つけようとすれば怒るし、ラウラが傷つけられれば怒る。だから、ラウラも守れたらいいなって思ってるんだ」

「っ・・・」

その言葉に、ラウラは何かを感じた。
今まで負け犬だと罵っていた相手に、胸がときめいた。
始めての衝撃に、心が強く揺さぶられる。
そんな時だ。

ぐぅ〜〜〜

「っ！？」

「ふっ、ふふ、ははは っ」

「むぅ、おなかすいてきたなぁ。僕、そろそろ行くね。また明日」

「あぁ、また明日な」

ｓｉｄｅｏｕｔ

翌日。
トーナメントは中止らしい。

まぁ、当然だろう。
一回戦目からあんなことがあったのだから。
それでも、データ取りのために一回戦全てはやるらしいが。

それと昨晩、ついに男子の大浴場が解禁になった。
といっても、使うのはアルだけだろう。
何せシャルルは男装してるとはいえ女なのだから。

入ろうかな、なんて思ったがその気になれない。
なぜか。それはアルが風呂があまり好きではなく、シャワー派だからだ。
そこから昨晩はシャルル1人が大浴場に入り、アルは部屋でシャワーを浴びた。

それにしても朝からシャルルを見かけない。
「先に行ってて」と言われたが何かするのだろうか。

ついでに言うならラウラもいない。
アルは昨日の内に事情聴取を受けたが、ラウラはたぶん今受けているんだろう。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

挨拶をしながら教室に入ってきた山田先生は朝からダメージを負っていた。
朝っぱらから誰とどんなバトルを？と思ったりもするが気にしない。
どうせ千冬をからかって返り討ちにあったに違いない。違うと思うが。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。あぁ、で

も転校生というか、すでに紹介は住んでいるといいますか、ええと・・・」

また転校生。
それでも紹介は済んでいる。
どういうことだろうか。

しかし、アルはそんな少ないヒントで理解した。
あぁ、そういうことか。自分が今までやってきた苦労は水の泡なんだと。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞こえてきたのは聞きなれた声。
金髪の転校生（？）は前に見た男子の制服ではなく女子の制服。
しかも意外にスカートの丈が短くて際どい。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願いします」

ペコリと一礼をするシャルル、ではなくシャルロット。
クラス全員は口をぽかん開けて呆けている。
アルに至っては頭を抱え、ため息をつきながら首を横に振っていた。

「え、デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、アル君同室だから知らないってことは――――」

「ちょっと、待って！昨日、男子が大浴場使ったわよね！？」

ギクリ

少し痛いところを突かれた。

確かに幼馴染で同室だから知らない、なんてことはない。

だが浴場は使ってない。

そう言おうとするが、どんどん教室がざわつき始める。

これはやばい。何がやばいかはわからないが、何か来る気がする。

ドガァァンッ！！

教室のドアが蹴や破られるように開けられた。

「アルゥーーッ！！」

登場してきたは甲龍を展開させた鈴。

見るからにお怒りの様子だ。

「死ねっ！！」

ＩＳアーマーが展開される。

さらにはそれと同時に衝撃砲がフルパワーで解放された。

って、あれ？これ、今度こそ死――――

ズドォォォンッッ！！！！

物凄い音が聞こえる。

それにしても痛みが来ない。
ということは死んでないということだ。
目を開ければ、そこには黒いＩＳ。
シュバルツェア・レーゲンを纏った銀髪眼帯の少女。
あのラウラが２人の間に割って入ってアルをＡＩＣで助けたのだ。
「ラウラ、ありが――――」
ぐいっ
いきなり胸倉を掴まれて引き寄せられる。
これは、まさか！
僕のファーストはまだ誰にもあげられないよ！？
がしっ！
間一髪のところでラウラの肩に手を当てて止める。
だがＩＳの力が強すぎるため勝てない。
「ス、ストップ！！お礼は言うけど何する気なの！？」
「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」
「誰に教わったその知識！！」

第２２話　和解（後書き）

ようやく2巻も終了。
もう少しで3巻に入ります。

臨海学校ではあの天才が現る！
さらには謎のＩＳがもう一機！
あ、赤い、彗星・・・！？

そして次回はちょっと違う視点。
学園側じゃなく、袖付き側と、アル君の昔話です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２３話　袖付き（前書き）

今回は本編から離れて袖付き側。
前回のあとがきでアル君の昔話を書こうと思ったけど予定変更です。

それと今回はクシャの操縦者の名前が明かされます。
さらにはあの機体が登場！操縦者の名前も明かされます。

第２３話　袖付き

『フォーマライズ、フィッティング、共に終了しました。感じはどうですか？』

「うん、いい感じ。後は動いてみなければわからないわね」

現在、ここは宇宙。
とある組織のステーションから少し離れた場所に、赤いＩＳが一機。
一角やクシャトリヤ同様全身装甲。
操縦者は見る限りには金髪で顔をバイザーで覆っている。
真紅の装甲には金色のエンブレム。
そのエンブレムは軍事組織『袖付き』のもの。

袖付きは何のために戦うのは不明。
いつから結成され、何を目的にするかも謎のまま。
緑の４枚羽クシャトリヤを筆頭とした数機のＩＳを所持してる。

さらには地上、そして宇宙に基地を持つ。
今いるこの宇宙のステーション基地もその一つだ。

「とりあえず、いろいろと飛びまわってみるわ」

『了解です』

背中のスラスターに火が付き宇宙を飛び回る。
加速性能は一角より上だろうか。
すぐに見えなくなり、レーダー反応でとらえるしかなくなった。

「デブリに突入する」

『了解しました。１０秒後にデブリに接触します。減速を』

「いや、もっと加速する」

『えぇっ！？』

そう言うと、背中のスラスターが”開いた”。
追加で出てきたスラスターでさらに機体は加速する。
まるで翼を想起され、羽ばたくよう見も見えた。

ほどなくしてデブリに突入する。
通常なら、デブリに当るだろうが当らない。
全身の多数のスラスターを駆使し、転身、デブリを踏み台にしながらどんどん突き進む。

『すごい・・・！！他の機体の約3倍近くも速いです！！』

「さすがは”展開装甲”試験機体第一号機。格が違うわね」

『では、もうお戻りください。再調整をしたいと思います』

「了解」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ふぅ・・・すごい性能ね。この”シナンジュ”は」

「お疲れ様です、アイナさん」

金髪で赤いＩＳスーツの女性――アイナと呼ばれた女性に先ほどのオペレーターらしき女性が飲み物を渡しに来た。
そう、このアイナと呼ばれた人物が先ほどの赤いＩＳの操縦者だ。

名前はアイナ・ヴァント。
袖付きではそれなりの地位で、階級は大佐。

そして先ほど乗っていたＩＳが『シナンジュ』
ＩＳ学園襲撃時にリムーバーを使って無人機『ゴーレム』から奪ったコアを使用して作られたアイナの専用機。
本人が言っていたように『展開装甲試験機機体第一号機』だ。
背中のスラスターに『展開装甲』という技術が使われており、今のところはこれが第４世代の機体になるらしい。

「結果からみてもう実戦投入は可能です。さすがはアイナさんですね」

「あはは。まぁ、あれは並大抵の操縦者じゃ乗りこなせないからね。でも、使いこなせれば強力な戦力になる」

手に持った飲み物を一気に飲み干すと、すぐに着替え始め、いつもの赤い服を身にまとう。
着替えている途中、違う女性がやってくる。
クシャトリヤの操縦者だ。

アイナは彼女を見ると何かを思い出す。

閃いたような顔をし、先ほどのオペレーターの女性に聞く。

「そう言えば、あの機体はどう？」

「あぁ、あれですか。今のところは進展なしです。ユニコーンとほとんど構造が同じらしいですが、ユニコーンの設計図がないんで何とも。作ったあのアルフォンスという男の子、天才じゃないですか？」

「だそうよ、実の姉のマリア」

「・・・」

横にいたクシャトリヤの操縦者――栗毛の女性、マリアは黙りこむ。
実の姉、ということから彼女はアルの姉らしい。
だがアルの発言では、彼女はすでに死んだはず。
どういうことなのだろうか。

そっけないマリアは着替えを終えた。
それと同時にプツリとゴムが切れ、束ねていた髪が散った。

「アルは、天才でも何でもありません。ただの元気な男の子です」

そう言った後、一礼。
その場から早々と立ち去ろうとした時だった。

「あ、ユニコーンのリミッターが解除されてます！」

「！？」

「モニターに出せる？」

「今だします！」

その場で投影型コンソロールをたたきモニターを映し出す。
そこにはデストロイモードの一角とアルの姿。
さらにはドロドロとした謎の黒いＩＳ。シュバルツェア・レーゲンだったものが。

すぐさま戦闘ははじまった。
右手に持ったサーベルで動きを止め、左手で新しくサーベルを抜いて刀を焼き切る。さらに左手で両足を切断。
右腕で胴部分のボディを一閃。

地面に落ちたラウラを助けずにそのまま放置。
ドロドロと形を崩したＩＳにビームマグナムを零距離で3連射した。

「・・・」

「これで3回目。コアの情報はどのぐらい開示された？」

「えぇと・・・まだ、そんなには。今まででリミッター解除時間は1時間弱。開示された情報は1／4ほどにしかみたっていません。せめて後2時間ほどリミッターを解除してくれると半分ぐらいにはなるんですが・・・」

ＩＳ学園襲撃時に一角のコアに仕込んだプログラム。
めったに解除されないリミッター解除の状態の場合のみ機能するそれは例えアルや束でも見つけられないだろう。

そのプログラムの機能はコアの情報開示。
１００％開示されれば世界のバランスは崩れるだろう。

「次のＩＳ学園の予定を見直して。次のチャンスにシナンジュでユニコーンにぶつかって無理やりにでもリミッターを解除させる」

「了解しました」

「マリア、あなたもよ。何かあったらクシャトリヤで援護してちょうだい」

「・・・了解しました」

第２３話　袖付き（後書き）

ＩＳってもともと宇宙で使用を目的とされてたんですよね？
なら宇宙でも活動できるのでは？と思った結果がこれです。

酸素はＩＳ内に保存されてるってことで。
全身装甲なのは絶対防御だけじゃ不安だからですかね。

２人の名前は思い付きですｗ
ＵＣのキャラに当てはめると

アイナ＝フル・フロンタル

マリア＝マリーダさん

みたいな感じですかね。
オペレーターの人は誰に当てはめよう・・・。
まぁ、今回だけかもしれないモブキャラだからいいかｗ

次回こそアル君の昔話。
もしくは予定変更で違う話を。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２４話　きっかけ（前書き）

今回はアル君、というよりも姉弟の昔話。
物凄い勢いでネタばれ的な要素含まれてるけど大丈夫なのかな？
たぶん大丈夫だと思います（笑）

第２４話　きっかけ

「アル・・・」

宇宙に浮かぶ袖付きのステーション。
その窓から地球にいるであろう、弟のアルを思う。

マリア・ラプラス。
これが彼女の名だ。
元モンドグロッソ優勝者でフランスの国家代表。

そんな彼女は、今何を思っているのだろうか。
家族が死んで、唯一生き残っていたアルは家にいない。
見慣れない一つの死体は、誰なのだろうかわからない。
もしかして、自分に見立てたのだろうか。
顔の皮を剥げば誰かなんてわからなくなるから。

たくさんのことが一気に頭に流れ込んできた。
そしてついに気がついた。

襲撃犯の狙いは兄、ライルの部屋のものだと。

兄は本当にまれにみる才能の持ち主だった。
例えるなら、そうあの大天才篠ノ之束を超えるほどの。
ＩＳの開発を１人で行えなかったが、彼女が思いつかないような新しい技術を編み出すことに成功した。
それが展開装甲だ。

展開装甲。

それは、ライル自身が考えたわけじゃない。
きっかけは弟のアルが出してくれたのだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「あいであ？」

「アイディアな」

今から遡って過去。
研究などに行き詰っていたライルは、弟のアルフォンスことアルに何かないか聞いていた。こんなまだ１０歳にもならない子供に聞くのは間違ってると思うが、それほど行き詰っていたのだろう。

父や母に聞いても何もなし。
妹で国家代表のマリアに聞いても微妙。
頼みの綱はアルだけだった。

「ま、冗談だ、冗談」

「かっこいいのがいい！」

「かっこいいって・・・なぁ？」

「私に言われても」

飲み物を持ってきてくれたマリアも考え出す。
アルがかっこいいのと言いだし、どういうのかさらに考えた。

「「・・・」」

「んぐんぐっ・・・っ！！」

頭を抱える2人。
聞くんじゃなかったと激しく後悔するライル。
トレイを抱えたまま、悩むマリア。
正直言って何も思い浮かばない。

そんな中、アルは1人おやつを口に入れている。
そして何か閃いたか、おもむろに鉛筆と紙を取り出した。

「えっと、こうして、こうして・・・じゃ～ん！！」

「「？」」

カキカキと鉛筆を動かすアル。
数分してから、その紙を2人に見せる。
描かれていたのは何の変哲もない（？）絵。
絵心は関係ないと思われる。

「なぁ、アル」

「ん～？」

「これなんだ？」

「開く！」

「・・・はい？」

「こう、ガキィンッって開くの！！」

描かれていた絵は四角。
カクカクとしたラインが入っていて、右側に矢印が書いてある。
さらに矢印の先にはさっきの四角が”開いた”もの。
先ほど入っていたラインが開いていた形になっていた。

「ほぉ、これは・・・」

面白いアイディアだった。
開く装甲、なんて子供が思いついた事を篠ノ之束が思いつくはずないだろう。
今じゃ聞いて正解だったと思っている。

「サンキューな、アル」

「うん！僕、遊んでくる！」

「おう」

「気を付けてね」

「うん！」

世話しないなぁ、と見守る姉と兄。
幼馴染のシャルロットのところに行ったのだろう。
窓の外からみると元気に走ってる姿が見えた。

「なぁ、マリア」

「？」

「お前の新しい専用機、少し長引きそうだわ」

「わかってるって」

「このアイディア使って、新しいＩＳ完成させてアルに見せてやりたいな。アルが考えたＩＳだぞって」

「じゃ、母さんに精力つくもの作ってもらわないと」

「まずは設計図作りから。今日は本気の徹夜だ」

ｓｉｄｅｏｕｔ

（奪われたのがユニコーンの設計図だけでよかった）

襲撃犯が奪っていったもの。
それはユニコーン、いや一角の設計図。
犯人はライルの部屋を荒して、それだけにしか目もくれず他の物は盗っていかなったよだ。

残っていたのは今ある『クシャトリヤ』と『シナンジュ』の設計図。
そして『バンシィ』と呼ばれる謎のＩＳで、一角と同じ内容の設計図。
最後に、ライルが残した展開装甲のことを記したメモだ。

（アルを利用したんだな、あいつは。自分で作れないとわかったユニコーンをアルに作らせたんだ。私は許さない）

憎しみがこみ上げてきた。
その相手の名は大天才と呼ばれる。

なにが大天才だ。
他人のアイディアを盗作した卑怯者じゃないか。

拳を握る力が強くなる。
出来ることなら今、この手で殺したい。
復讐したいと願う。

「――――篠ノ之束」

第２４話　きっかけ（後書き）

次回からついに第３巻！
臨海学校前からの話から始まります！
誤字脱字、感想あればお願いします。

第２５話　トラウマ

「ん・・・？」

早朝、１人部屋となったアルは起きた。
シャルル、基シャルロットとは別れ、念願（？）の１人部屋。

毎晩毎晩遅くまで起きてＩＳの調整。
気がつけば徹夜なんてこともあった。

一夏とシャルロットの２人が同室のときは、アルが徹夜をしないようにしっかり声をかけて寝るように言っていた。
年齢的にもまだ１３歳。
しっかり寝ないと成長にも異常をきたすんじゃないだろうか。
まぁ、もうすでに以上は出ているが（食べる量他）

「うるさいぁな・・・」

それにしても入り口付近が騒がしい。
どうせ入口に仕掛けたトラップに誰かが引っ掛かったんだろう。
なぜトラップがあるか。その理由はいくつかある。

一つ目は不審者用。
まぁ、あまりそう言うのはないだろうが一応の念のためだ。
大切なものが盗まれたらたまったもんじゃない。

そして大事なのが二つ目。
それは・・・ラウラだ。

あのアルを自分の嫁宣言から度々アルの部屋に侵入している。
それ以外にも何かしでかすので怖い。
なので安眠妨害他のことを避けるためにトラップを設置した。

「今開けますよ～、ふ、ぁ～～～」

ガチャリ、ガチャリ
二重の鍵を開けて、勝手に設置した二重扉をあける。

「「あ」」

「・・・」

ギィ・・・パタンッ
カチャリッ

ドアの向こう側にいたのはもちろんラウラと、アルを起こしに来たのか一夏だった。2人はアルの姿を見て、ちょっと驚き。
アル本人はなんでか静かにドアを閉めて鍵を閉めた。

「いやいやいや！なんで鍵まで閉めたの！？と言うかなんで二重扉！？」

「ま、待て！何故嫁の私を入れない！」

2人の言葉がん無視。
実を言うと、アルの寝間着姿がすごかった。

ズボンをはいてるかわからないぐらい大きめでダボダボな上着。
その上着は長袖の大きめのフード。

そう、犬耳フードである。

フードをかぶったままドアを開けてしまい、2人に見られた。
何気に寝起きだったため、目元をこすりながら出てしまったのがいけなかったのだろう。逃げたい気持ちでいっぱいだった。

カチャリ・・・

「ど、どっちか片方なら入っていいよ・・・出来るなら一夏（ぼそっ）あ、朝だから、うるさいのはなしね」

顔をひょこっと出してその一言を行ってからまた部屋に逃げる。
早々に口論が始まり、結局はうるさい。
ラウラは嫁だから自分が入ると主張。
一夏は心配だからとラウラに押し返されやすい理由。
最終的にはじゃんけんで決めようとなる。

「「じゃんけん、ほい！」」

ラウラ、グー　一夏、パー

「やった！」

「くっ・・・」

結果は一夏の勝ちとなった。
ぐむむと悔しがるラウラだが、アルの言うことを無視して入って嫌われるのはイヤだ。なので今回は素直に引き下がる。
まぁ、今回は、だが。

ガチャッ

一枚目のドア。
その次に二枚目の扉（開け方がわからない）

「・・・ア、アルー？」

『んー？』

「開け方わかんないんだけどー」

『んー、押しドア？』

「あ、そっか」

カチャリ、普通に押したら開いた。
中には先ほどと同じ寝間着姿のアル。
両手にコップを持っていた。

「はいこれ」

「？」

「コーヒー。苦かったらそこに砂糖とミルクあるから。えっと、もう仕掛けばれちゃったからどうしようかな・・・とりあえず粒子化して適当なところに保管しとこ」

カタカタと空中投影型のコンソロールをたたき、これまた空中投影型のディスプレイを表示してそれを見る。
こんなまだ１３歳で犬耳フードをかぶった少年が、こんな早朝から

コーヒー片手に持って近代科学的なことをやっているなんて思わないだろう。
どこの少年科学者だ。某眼鏡をかけた発明家じゃないんだから。

「ふ、ぁ～～！まだ眠いや・・・」

「ま、また徹夜してたの？」

「2時ぐらいまで」

「ダメだよ、ちゃんと寝なきゃ」

「う、うん・・・」

なんだかお姉さんっぽい一夏。
アルはどうしてかあんまり逆らえなかった。

優しくしてくれて、ダメなことはダメとしっかり言ってくれる。
まるで実の姉のマリアの様だ。
おかげで一夏とは接しやすくて助かる。

（それにしても、今のアル、女の子っぽいな～）

寝間着姿のアルを見た一夏の感想。
やはりアルの容姿でこの格好はそう思わせるだろう。
むしろ女の子と間違わない人はいないはずだ。

「そろそろ着替えるから、ちょっと外出てて」

「あ、うん」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「臨海学校、海かぁ・・・」

７月に入ったＩＳ学園は校外実習があった。
それはアルが呟いたように臨海学校。
三日間もやるため、さながら修学旅行だ。

三日間の日付の内、一日目は丸々自由時間。
臨海学校の名の通り、海で遊べるということ。
だがアルにはこの『海』と言うのが一番イヤだった。

溺れて溺死寸前。

海ではトラウマがたくさんある。
脚を攣った、溺れた、クラゲに刺された他いろいろ。
本当に嫌な思い出しかない。まともなのは姉と一緒に砂浜で遊んだことぐらいか。どちらにせよいいことなんて少なかった。

「水着はもうないしなぁ・・・」

嫌な思い出とはおさらば。
なので水着ともおさらばした。

つい先日、水着がないと口走ったら鈴たちにもう注意を喰らった。
なので買いに行かないと行けないわけで、本当にこの時期（今年だけ）はいいことが全くなくて困っている。

「今週末辺りに買いに行こうかな・・・」

財布の中身は風前の灯だった。

第２５話　トラウマ（後書き）

次回は誰かと買い物のターン。
誰と買いに行くかは考え中です。

そして前作では書かなかったつかっかかってくるあの女性（名無し）。
登場させてみたいかなーと思ったりもしてます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２６話　久しぶりの１人（前書き）

少しばかし（結構かな？）遅くなりました。
今回はアル君が１人で街に繰り出します。

第２６話　久しぶりの１人

現在、アルは街に繰り出すため１人モノレールに乗っていた。
本日は実に晴れた快晴の空。
暑い夏だが、モノレールの中はクーラーが効いていて快適。
外にいたとしてもたまに吹く風が気持ちよかった。

服装は黒のノースリーブに、これまた黒の半袖パーカー。
少し長めの黒い半ズボンに肩提げ鞄と、胸元にきらりと光る純白のネックレストップ――待機状態の『一角・零式』が目立つように選んだ。
「黒すぎるんじゃないかな？」と朝に会ったクラスメイト（高月さん）に言われてしまい、落ち込んだのはアルだけの秘密。陰で泣いていたのもまた秘密だ。

「１人・・・かぁ」

ちなみに今日は珍しく（？）１人。
誰か誘って買い物（臨海学校の準備）に付き合ってもらおうと思っていたのだが、度胸や勇気が微塵もないアルには無理だった。
唯一誘えそうな一夏でさえ、誘おうか戸惑うほどに。

しかし、たまには１人でも良いかもしれない。
そう思ったりもしていた。

ＩＳ学園に来て外出はめったにない。
自室にいるとき以外は絶対に誰かが近くにいて、１人の状況が消えた。
少しばかし久しぶりの１人は、もしかしたら良い息抜きになるかも

しれない。

今まで行事などがあるごとにトラブルに見舞われる。
クラス代表決定戦での一角の暴走（？）。
クラス対抗戦での謎の２機のＩＳの乱入。
そして先月のタッグマッチトーナメントのラウラの暴走。

それに加えて毎日のＩＳの訓練と授業でも疲れている。
そう考えると、今日の１人での外出は楽しみでしょうがない。
早く街に着かないかぁ、と１人わくわくするアルだった。

だが、アルはこの時気が付いていない。
後ろの車両に２人の人影があることを・・・。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「１人で何ぶつぶつ言ってるのかな？電話かな？」

「あたしに質問されても困るんだけど」

同時刻。
場所は変わって違う車両。
アルを追跡（尾行）する２人の人物。
一夏と鈴はさりげない（？）変装をし、前の車両で窓の外を見ているアルを監視していた。

（高月さんからアルが出かけたって聞いて、急いで用意したのに、まさか鈴ちゃんと鉢合わせになるなんて・・・私って、運悪ぅ・・・

）

学園内でクラスメイトとすれ違った時に聞いた情報。
アルが私服姿でどこかに出かけたらしいとの情報を仕入れた一夏は、一目散に部屋へ戻り、同室である箒と軽く話をしてからアルを追いかけた。
だが、その追いかけるタイミングがまずかった。

そう、鈴に見つかったのだ。
私服姿で、１人急いでいる一夏を見た鈴はすぐに理解した。

私服姿で急いでいる。
ってことは、誰かと待ち合わせをしていて遅れそう。
その待ち合わせの相手はアルに違いない、と。

ほとんど、と言うより全部間違っているが鈴にはわからないでのしょうがない。このまま一夏を放置すれば抜け駆けされる。
それだけは阻止すべく、鈴は突っかかってきた。

（う～ん、どのタイミングで声をかけるべきか・・・。一夏が離れたタイミングで行くしかないわね）

「あっ、鈴ちゃん。アルが」

「よし、追いかけるわよ」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「こうして歩いてみると、改めて新鮮だなって感じるなぁ～」

駅に到着し、年相応の元気さで歩き出すアル。
早々に走りだしたアルはどこに向かうか予定はなし。
適当にぶらついていい店を探す。それが今までやっていたやり型だ。

「・・・とりあえず水着は先に買っといた方がいいよね」

駅前のショッピングモールに入り、思いついた。
買い物は早めに終わらせて、後は楽しみたい。
その考えから、日用品や準備物は先に買うことを決めた。

ちなみに軍資金はたんまりある。
どこからそんなお金がわいてくるのか、と言われれば毎週と言っていいぐらいの感覚で束からお金が送られてくるのだ。しかも結構な額。
最初は使わないだろうと思ったが、こう外出してみるとわからないでもなくなってくる。理由としては食費で結構削れる自信があるからだ。

まぁ、そんなことは置いておいて早速店内へ。
水着売り場に入ると（当然だが）男性用と女性用で分かれていた。
だがアルはそんなことを気にせず、運悪く女性用の水着コーナーと隣接していた辺りの小さめの水着を見ていた。

「そこのあなた」

「？」

突然声が聞こえた。
周りをきょろきょろと見渡すが、特に誰もいない。
強いて言うなら近くに女性がいるぐらいだろう。

「男のあなたに言ってるのよ。そこの水着、片づけといて」

いきなり声をかけられたと思ったら今度は命令。
女の子の様な容姿をしているアルを男だとわかったのは男性用コーナーにいるからだろう。だがそんなことは関係ない。
ＩＳに乗れるであろう女性は自分を偉いと思っている。
男が女の言うことを聞くのは当然。年の差は関係ない。

「うぅ・・・（しょうがない、やるか）」

こう言うときは常に下手に回るがいい。
その考えのアルは、大人しくその見ず知らずの女性に従おうとする。
その時だった。

「こんな小さい子供に命令するなんて、ひどいんじゃないかしら？」

今度は違う女性。
金髪で一目で外人だってわかった。
だが、それに見合わず日本語は上手。
いかにも大人の女性、といった雰囲気を纏っていてアルは見入ってしまう。

「ごめんなさいね、遅くなっちゃって。でも勝手にうろうろしちゃ駄目でしょ？」

「え？あ、えっと、その・・・ご、ごめんなさい・・・」

先ほどの見ず知らずの女性を無視し、金髪の女性は話しかけてくる。
さりげなくウィンクを飛ばしてきたところをみると「話しを合わせて」と言いたいのがすぐに分かった。
アルもすぐに話を合わせ、しょんぼりしながら謝る。
もちろん演技。そしてそのままそそくさと店を出て行った。

「あ、あの」

「そういえば自己紹介がまだだったわね。・・・う～ん、適当なお店にでも入ろっか」

「あ、は、はい」

なんてマイペースな人なんだろう。
一瞬そう思ったアルだった。

第２６話　久しぶりの１人（後書き）

次回は今回の続きから。
ちなみに今回出てきたあの金髪の女性の正体はわかりますよね？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第27話　接触

「どうしてこうなんたんだろう・・・」

アルを追っていた一夏と鈴。
いつの間にか増えていた少し小さい人物を含めた3人は街を歩いていた。

小さい人物とはラウラだ。
おそらく1人でアルを尾行していたのだろう。
抜け駆けされては困ると、鈴がラウラを引き入れ、この3人で行動することに。

最初は普通に尾行。
途中、鈴が「ただ尾行するだけじゃつまらない」といいだしたため、軽く食べ歩きをしながら再び尾行。
そして気がつけば、休日を楽しむ形に。

いや、決して悪いわけではない。
ただもともとの主旨を忘れているんじゃないだろうか。
アルの姿も見失ってしまい、しょうがないから楽しむ。
だがそれだと、むしろアルが可哀相になってしまう。
そう考えると一夏はため息が出た。

「一夏、置いていくわよ～」

「え！？あ、ごめん！ちょ、待ってって！」

だが、たまにはこういうのも悪くない。

そう考える一夏だった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「買い物はこれでいいの？」

「あ、はい」

昼食を助けてくれた金髪の女性と終え、午後。
今はアルが街を案内する形で買い物に付き合ってもらっていた。

この女性の名はアイナ・ヴァント。
本人いわく『通りすがりの物好き』らしい。
まぁ、アルとしては助けてくれたことには大いに感謝。
お礼も兼ねて案内をすることにしたのだ。

「それにしても、アル君の食べっぷりには驚いた」

「あはは、良く言われます」

昼食時、アルが大食漢だと言うことを知らないアイナはビックリ。
まさかこんな小さな体に大量の料理が入るなんて思ってもみないだろう。おかげで見ているだけでお腹がいっぱいになってしまいそうだと言われた。
アル本人はそんなに食べたつもりはないらしいが、しょうがない。
朝食を食べてなかったのだから腹もすくはずだ。

「今度はあっちの方を見てみたいわね」

「あ、そうですね」

アイナが指さす方向をみる。
アルが今まで買い物に付き合ってもらった分、今度はアイナの買い物に付き合おうと思うアルは、なんの迷いもなしに歩いた。
途中の裏路地に続く道には気にせず横切る。
その時だった。

「っ！？」

突然腕を引っ張られた。
無理やり裏路地に引き込まれ、口を布で押さえられ、口をふさがれる。

「んーー！んーー！！ん・・・ぁ・・・」

必死に叫び、助けを呼ぼうとする。
だが口をふさがれていて声が出ない。
腕を引き剥がそうとするが、子供の力では無理。
そのままの状態がしばらく続くと、アルは気を失ってしまった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「いや、まさかこっちに来た翌日にアルフォンス君を見つけられるなんて、私たちは運がいいですね」

袖付き日本支部。

ＩＳ学園から少し離れた場所、海底に作られたそこは待ったなことがない限り見つかることはない。

そして、今回は後の作戦でアルに戦いを挑んで一角（ユニコーン）のデストロイモードを発動させるため、袖付きの操縦者がほとんど集められた。

ほとんどといっても数人だが、全員が代表クラスの強さを誇る。

「どお、リコ。情報は引き出せそう？」

「難しいですね。後数時間だけって言うのが無茶な話ですよ」

シナンジュが完成してからアイナのオペレーター役となった女性――リコと呼ばれた女性はコンソロールを叩きながらも、アイナの言葉に耳を貸す。

有能な彼女は、自分のＩＳさえあれば十分実力があるとまで言われている。

本人はあまり自覚してないようだが、アイナのお墨付きだ。

「街中での戦闘だけは避けないといけないわ。余計な被害は出したくないもの」

「まぁ、それには同意です。関係ない人は巻き込みたくないですから。それにしても、実物はセキュリティが半端じゃないですね。生体データに１０桁５００を超えるパスワードと１０個の認証コード。弱点であるリムーバーにも耐性ができていて、外部からは並みのハッカーでも手が出せません」

「でも期待してるわ」

「腕が鳴りますね」

現在、袖付きのＩＳ操縦者（全員専用機持ち）は合計７人。
そのうちの４人が集められた。
基本いろいろなところを飛び回ったりしているのだが今回は別。
やはり相手が未熟といえどマリアを退いた相手。
油断はできない。

そしてその本人であるアルは今、檻の中。
気絶させられ、一角を奪われた状態で何もできない。
しばらくはこの状態が続くだろう。
気がついた時には何も覚えてないはずだ。

「ふぅ・・・ようやう生体データと認証コード意外の解除完了」

時間にして約２時間後。
リコがようやく一角のセキュリティをほとんど解除した。
たぶんだが、束ならこれの４分の１の３０分で終えられる気がする。
だが肝心の生体データと認証コードはどうするのだろうか。
画面には『エラー』と書かれていて手詰まりだ。

「こちらもようやく聞きだしたぞ。まったく、ガキの相手は苦手だ」

「ありがとう、麗（れい）。お礼を言うわ」

「ふっ、それならマリアに言うんだな。聞きだしたのはほとんどあいつだからな」

「そう。さすがは姉弟ね。という訳でリコ」

「はい、解除完了です。生体データは本人の指紋で楽々通過できました」

カタカタとすぐに入力お終えていたリコ。
アルが今まで集めた情報が詰まった一角のデータの欄が無防備に映し出されている。

「さぁ、がさ入れ開始よ」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「あれ・・・？僕、何してたんだっけ？」

「あ、起きた？」

「アイナ・・・さん？」

目が覚めると空はオレンジ色に染まっていた。
すぐに目に入ったのは顔を覗き込んでくるアイナ。
まだ頭がボーっとしていて何が何だか分からないでいた。

「疲れて寝ちゃったのよ。まぁ、３０分ぐらいだけだけど」

「そうですか。ごめんなさい」

「いいのよ。おかげで可愛い寝顔も見れたし」

「〜〜あ、あはは」

可愛いと言われ少し赤くなる。
嬉しく、照れているからしょうがない。
あんまり言われたことがないのでどう対処すればいいかわからなかった。

「アル君は、そろそろ帰らなくても大丈夫？」

「え？あ、ホントだ。そろそろ戻らなきゃ」

体を起こし、腕時計を見る。
すでに5時をさしており、帰らなければならない時間だった。

「アイナさん、今日はありがとうございました」

「こちらこそ。またどこかで会いましょ」

「はい！」

夕陽を背に、アルは走って駅へ向かう。
その姿をアイナは笑顔で見送るのだった。

第２７話　接触（後書き）

またオリキャラが増えた・・・。
袖付き側のＩＳは４機は確定してるんですが、他３機がまだ・・・。
アイディアあれば教えていただきたいです。
元ネタも言ってくれればそこから考えたいと思います。
まぁ、知らない元ネタなら無理ですが・・・。

次回からはついに臨海学校！
海でのトラウマがあるアル君はどうなるのか・・・。

第２８話　臨海学校（前書き）

今回から臨海学校！
そしてあの大天災がついに登場！
ちなみに今回の最初はアル君の夢から始まります。

第２８話　臨海学校

「これがシナンジュで、これがクシャトリヤだ」

「？？？」

「まぁ、完成した姿がこれ。あくまで予定だがな」

ペラペラとめくられてＩＳの設計図。

何のことかよくわからないアルのため、兄ライルは空中投影型のコンソロールをたたき、ディスプレイに完成した姿をみせた。

それを見るなりアルは、すぐさま食いつく。

かっこいい！と、大いに喜んでいた。

「おい、お前。なに落書きしてんだ？」

「落書きじゃないもん！マークだもん！」

「マーク？」

「うん！お兄ちゃんが作ったのだってすぐわかるように！」

設計図の端。

そこに書かれていた星（☆）のマーク。

一瞬怒りそうになったが、なんでか出たのは笑だった。

アルの発想にはやはり勝てないなと言葉をもらしながら、アルの頭をワシャワシャとなでる。そしてそのマークに少し付け足しをした。

形だけ、細かく描かずシルエットだけのユニコーンを描いた。

それを見るなり、またアルは喜んだ。

「そのうちもっとすごいもの見せてやるから、覚悟しとけよ」

「うん！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「・・・ル・・・アル、起きなよ。着いたよ」

「ん・・・？」

一夏の声が聞こえ、眼を覚ました。

何というか、物凄く久しぶりな夢を見ていた気がする。

それはさておき、アルは今までバスの中で寝ていた。

現在、ＩＳ学年１年生は臨海学校。時間は１１時で外に見えるのは海だった。

なんと１日目が丸々自由時間とすごいことに。

だがそれの代償と言わんばかりに残りの日を全てＩＳ関係でつぶす。

しかしアルはこの自由時間は後に回してほしかったと思っていた。

どうせなら楽しくやって帰りたい。疲れたまま帰るのはつまらないじゃないかと。

だがそんなことは発言できず。

むしろ決まったことなのですでに諦めていた。

しばらくすると、3日間お世話になる旅館に着いた。
全員がそろって挨拶をする。女将さんの名前は清州景子さん。
その後は各自自分の部屋へ行き、荷物を置いてくる。
そこからは自由時間だそうだ。

「そうだ、アルルーの部屋教えてよ～。遊びに行くからさ～」

「う～ん、一覧には書いてなかったから、僕もわかんないや。ごめんね」

「そっか～、それは残念だ～」

のほほんさんがゆっくりと去っていく。
残念なのかどっちでもよかったのかわからない。
そんな時だった。

「アルフォンス、お前の部屋はここだ。いいか、後ろに細心の注意を払ないながら行けよ。それと誰にも言うな」

「は、はぁ・・・」

「部屋に着いた後は好きにしていいからな」

「あ、はい」

千冬から渡された紙には部屋の番号が。
どうして後ろに細心の注意を払わなければいけないのかわからなかったアルだが、とりあえず危険なんだなということだけは理解した。
そうとなったら早速行ってみようとアルは歩き出した。

～数分後～

「あぁ、そういうことか」

部屋の眼の前に着いたアルはつぶやいた。
何せ、隣は教員室と書かれているのだ。
これなら安心して夜をすごせるだろう。

「ちょっと狭いけど、１人部屋だからかな？でも、僕的には過ごしやすいかも」

荷物を置き、軽く整理を終える。
小さいリュックを背負い、向かうは海。
トラウマの塊に行くのはやはり抵抗があった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「「「・・・」」」

別館の更衣室へ向かう途中。
ばったり一夏と箒と出くわしたアル。
そして今、あまり見つけたくないものを見つけてしまった。

ウサ耳。

地面に刺さったウサ耳だった。
ご丁寧に『引っ張ってください』と張り紙もある。
正直言って引っ張りたくもないし、関わりたくもない。

「ね、ねぇ、箒ちゃん。これって――――」

「私は知らん。関係ない」

「だ、だよね～」

箒のこの様子を見てすぐに一夏は理解した。
アルの場合、見た瞬間すぐに気付いていた。

その才能に天井どころか限界なし。
天才の中の大天才で大天災。
自称１日を３５時間生きる眠れぬ女。
アルが助手を務めるＩＳの開発者。
そして箒の実の姉。その名を――――

篠ノ之　束。

これいがに白いウサ耳を付けている人なんて見たことないし、知らない。
一夏はそのウサ耳を両腕で力強く握った。

「えっと・・・抜くね？」

「好きにしろ。私は知らんからな」

「あ、行っちゃった」

すたすたと去っていく箒。
姉である束との仲は反応を見る限り悪そうだ。

残されたアルは、ウサ耳を引き抜こうとしている一夏を見守った。
まさか本気で埋まっているとかないよね？
僕の予想だと、上から降ってくる気がするなぁ。
前にミサイルで飛んでいたらどこかの偵察機に撃墜されそうになったって言ってたし。

そんなことを考えていると、一夏が勢いよく引き抜いた。

スポッ
アルの予想は的中。
地中に束の姿はなく、一夏は余った力のせいで尻もちをついてしまった。

「大丈夫？」

「いつつ・・・たぶん。ん？」

キィィィン・・・

上空から何かが飛んでくる音が聞こえる。
そして少しもしないうちに――――

ドカーーーーンッッ！！！！

見事謎の飛行物体は一夏とアルの眼の前に突き刺さった。
その飛行物体の形は何とニンジン。
なんでニンジンなのかと物凄くわからなかった。

ちなみにこれもアルの予想は的中。

この中にいるのはたぶん、いや絶対束だ。

「あっはっはっ！！引っかかったねアッ君！！てあれ？アッ君じゃなくていっちゃん？」

ぱかっと真っ二つに割れたニンジンの中から笑い声と共に出てきた束は、一夏の姿を見るなり頭に疑問符を浮かべる。

たぶんアルが引き抜いてくれることを想定していたんだろう。

だがそんなことは関係なしとすぐさまアルの方まで行き、突然抱きしめた。

「うわぁ！？た、束姉！？」

「うん！やっぱりアッ君の抱き心地は最高だね！このままお持ち帰りしたいくらい！」

「そ、そんなことはいいから放してよ！苦しい！」

「束さん、その、お久しぶりです」

「うんうん、お久だね。本当に久しいねー。ところでいっちゃん」

「はい？」

「箒ちゃんはどこ？さっきまで一緒だったでしょ？」

「あー、えっと・・・」

あなたを避けてどこかに行きました。

そう答えるのはあまり良い気分じゃない。

どう答えようか困っている一夏だった。

だがそんなの束の問題などではない。

抱きしめていたアルをようやく放し、一夏の持っていたウサ耳をとりあげる。

そしてこう言った。

「まぁ、私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあ、いっちゃん、アッ君、また後でね～！」

箒が行った方向へとすたすたと走っていく束。

その速さは見る限りには物凄く早かった。

第２８話　臨海学校（後書き）

次回は海！
泳げないアル君はどうするんだろうか。
誤字脱字、感想あればお願いします。

番外編　一夏と初日の出を見に行こう！（前書き）

今回は番外編。
本編より少し先、年越し後の話です。
そこから初日の出となります。

番外編　一夏と初日の出を見に行こう！

現在ＩＳ学園は冬休みまっただ中。
今は年末年明けの元日深夜３時。
元朝参りに行くためにとある人物と待ち合わせしていた。

「お待たせー」

「あ、うん」

とある人物とは一夏。
待ち合わせ、というよりかはアルが織斑家に出向いたと言った方がいいだろう。

家のドアをあけて出てきた一夏の後ろには姉の千冬が。
夜中だから心配なのだろう。年明け早々面倒事はイヤだろう。
アルを見るなり、こちらまでやってきた。

「一夏を頼んだぞ、アル」

「あ、はい、織斑先生」

「名前でいい。今は勤務時間ではないからな。それと、これは私からのお年玉だ」

ぽんっとアルの手に置かれたのは小さな紙袋。
そして早速アルはその中身を確認すると・・・

「こ、これ」

「まぁ、なんだ。お前はいろいろと厄介事を持ってきたことはあったが、しっかり働いてくれた。そのお礼として取っておいてくれればいい」

紙袋に入っていたのはデータチップ。
今までの戦闘記録他が入ったものだ。
ゴーレム？と？、クシャトリヤ、シナンジュ他。
本当はアルなんかに渡せないものがたくさん入っている。

何故これを千冬がアルに渡すかというと。
前々からアルが何度も頼んでいたのだ。
ユニコーンの調整とかにほしいと何度も何度も。
そのたびに断られていたのだが、ついに心が折れたのだろう。
お年玉という名目で渡されて、アルは嬉しそうだ。

「ありがとうございます、千冬さん」

「ん。一夏、気を付けて行ってこい」

「うん。行ってきます」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ア、アル」

「？」

「は、はぐれないように、手、つなごっか」

「・・・う、うん」

午前４時。毎年のように篠ノ之神社へ着いた。
やはり人は多く、特に賽銭の前は込み合っていた。

そこではアルのように小柄な子供だと見失いかねない。
はぐれてはまずいと思った一夏は、ちょっと恥ずかしそうに言う。
それに対してアルも、おずおずと一夏の手を握った。

（あ・・・一夏の手、温かい・・・お姉ちゃんみたいだ）

ぎゅっと握った手は、暖かかった。
言いすぎだと思うが、アルにとっては心が温まるほど。
一夏の手は姉のマリアを思い出すような温かさを持っていた。

少し待つこと１０分程。
ようやく賽銭箱の眼の前までやってきた。
小銭を投げ入れ、２人はそろってお祈りをする。
以外にも、同じことを祈るあたり２人は両思いなのかもしれない。
それでもすれ違いが多いが。

「「今年もよい一年になりますように。あ」」

口に出して言ったため、声が重なる。
お互いに顔を見て、顔が赤くなっているのを確認した。

「と、とりあえず移動しようか」

「う、うん」

後ろが込んでいるため、場所を変える。
まさかお互い同じことを口走るなんて思ってもみなかった。
ましてやこんな大勢の人がいる場所でだ。

だがまぁ、良しとしようとなった。
そう思うのであれば、みんなそう思っているだろう。
そういうことでこの問題は解決となった。

「おみくじ？」

「あぁ、これは占いだよ。今年の運勢を試すの」

「・・・よし」

早速おみくじにチャレンジ。
慎重に、だがそれでも無作為に一つ選んだ。
その運勢は――――

「きょ、凶・・・」

「だ、大丈夫だよ！ほら、あそこに結んで役落としして。ね？」

「うん・・・」

おみくじの紙を丁寧にたたみ、これまた丁寧に結ぶ。
一夏がおみくじを引くと、なんと正反対の大吉が出た。
そのせいでアルが落ち込んだのは言うまでもないだろう。

「よっす、一夏」

「お久しぶりです、一夏さん」

「あ、蘭ちゃんに弾」

「？」

声をかけてきたのは、赤毛の男女二人。
少し顔が似ているのを見ると、兄弟なのかもしれない。

五反田弾と蘭。
弾は一夏と同じ中学の卒業で友達。
蘭は一つ下の妹だ。

「あれ、こっちは？」

「あ、えっとぉ・・・」

「お兄ぃ。この子、あのアルフォンス君だよ。男の子でＩＳを動かせる」

「マジか！そういや一夏、ＩＳ学園だったな」

「う、うん、友達。ね」

「は、はい。アルフォンス・ラプラスです」

自己紹介をするアル。
それに対し、五反田兄妹も自己紹介。

蘭は今年の受験でＩＳ学園に来るそうだ。
それとアルのことはある程度知っているらしい。
世界で初の男性ＩＳ操縦者として有名だからか、軽いプロフィールぐらいは発表されているらしい。
「そういえば、お参りしたの？」
「あ、まだだったな。今から並ぶか、蘭」
「そうだね。では、また」
そう言って五反田兄妹は行ってしまった。
現在の時刻は５時。そろそろ戻ってもいい時間かもしれない。
「そうだ！アル、初日の出を見に行こ！」
「うん？」

ｓｉｄｅｏｕｔ

篠ノ之神社裏。
初日の出が見れる最高の場所を、一夏は知っていた。
そこにアルを案内し、今はその時を待っている。
「・・・」
「・・・（わくわく。わくわく」

しかし、この待っている時間が長かった。
今、冬の時期で朝日が出てくるのは６時過ぎ。
現在の時刻は５時４０分と、まだまだだ。

だが、それでもアルは楽しみにしている。
つないだ一夏の手を決して放そうとせず、ギュッとつないだままだった。

（そ、そうだ。なんか、今なら言えそうな気がする）

ふと思った一夏。
この邪魔の入らなそうな場所。
今なら思いを伝えることができそう。
そう思い、アルの手を握る力を少し強くした。

「一夏？」

「ア、アル・・・」

「？」

「えっと、なんて言うか、その・・・」

「なに？」

いざ言うとなると言えない。
たぶん、一夏でなくともそうなるだろう。
アルは不思議そうに一夏の顔を見ている。

一夏は迷っていた。
今、この場で思いを伝えるべきか。
もし、断られたら、今の関係が崩れるんじゃないか。
その思いが、言葉を詰まらせていた。

「あの、私ね、アルのことが――――」

意を決した。
伝えよう、この思いを。

アルのことが異性として好き。

そう伝えようとした時だった。

『～～♪～～♪』

「！？」

「あ、ごめん。あれ、千冬さん？」

バットタイミングで電話が入る。
アルの携帯に入った電話は、一夏の姉である千冬からのものだった。

「はい、もしもし」

『初日の出を見ようとしているところ悪いのだが、緊急指令だ』

「は、はい？」

『先ほど、イタリアの実験機が暴走し、逃走したとの連絡が入った。

すぐ動けるお前らと篠ノ之はそこから移動し目標と接触、撃墜して捕獲しろ』

「あ・・・は、はい。わかりました」

ブツッと電話が切れる。
険しい形相のアルは、一夏に向き直った。

「緊急指令でここからイタリアの実験機を撃墜して捕獲しろだって」

それを聞くと、一夏は一気に落ち込んだ。
タイミングが悪すぎると。しかもすぐに動ける理由が第４世代だから。

一夏の白式は実質第３世代だが、箒の紅椿がいる状況だといつでも動ける。アルのユニコーンも今では第二次移行を果たしており準備は万全。
気がつくと、目の前は初日の出が出ており、本当にバットタイミング。
自分のタイミングの悪さをとことん思い知らされる一夏だった。

「僕の運は凶だったけど、一夏の運は大吉。こんな緊急指令、一夏の強運ですぐに終わらせよ！」

「うん！」

「それとさっきの。僕のことが、なに？」

「ぅ・・・な、何でもないよ！？何でもない！」

「？　ま、いっか。それともうひとつ」

「なに？」

「僕、一夏のこと大好きだから」

「え・・・？い、今、なんて・・・？」

「何でもなーい。行くよ、ユニコーン『バンシィ』！！」

番外編　一夏と初日の出を見に行こう！（後書き）

一夏の告白・・・と思いきやアル君の告白。

最後に出てきた『バンシィ』は、第二次移行を果たした状態です。

まぁ、そこは本編で明かされるのでお楽しみを。

確実に言えることは福音戦で移行します。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第２９話　海

『海』
それは地球の面積のほとんどを占めるもの。
一部は青く美しく、一部は透き通るように透明。深くなれば深くなるほど暗く、深い色となり、水圧が強くなっていく。しかし、それでも生物は多く存在している。

そんな海を、１人嫌っている者がいた。
ＩＳ学園１年１組クラス代表アルフォンス・ラプラス。通称アル。
アルは海の幸は好きだが、海自体は嫌いだった。

幼少のころ、クラゲに刺され、再び泳ぎ始めれば脚を攣り溺れかける。海での思い出は散々なものばかりだ。なのでアルの海嫌いは今に始まったことではない。

「アル、泳ごうよ」

「イヤ」

現在アルは砂浜に建てたパラソルの影にいる。
しっかりとシートを敷き、その上に座り込んでいた。
いかにも動かないと言った顔でずっと海を眺めながら、泳ぎたいと言うそぶりすらも全く見せない。

そして先ほどから一夏が誘いをかけているのだが、アルはそっぽを向いてばかりだ。堂々と遊ばずに空中投影型のディスプレイとコンソロールを叩いている。

当初、来る前までは楽しもうと思っていたらしい。しかし、実際に海に来てみると話は違った。海には本当に浅く、膝の部分までしか入らず深いところまで行こうとしない。泳げないらしく、教えようかと一夏が思っていたが溺れるのが怖いからと断れた。

「？」

そんな時だった。

一夏の話を聞きながら遠くの海を見ていたアルの目に、あるものが移る。元々視力は良かった方だが、何があったかわからないアルはすぐさまディスプレイと一角のハイパーセンサーだけを直結し、その場所をズームした。

鈴だ。

一瞬だけしか見えなかったが、もがいているように見えた。

そしてすぐさま姿を消す。そしてアルは一瞬で理解し、思い出した。あれは溺れているのだと。自分も同じように助けを求めようと一度だけ海面に出たがすぐに海の中へ逆戻りだった。だからこそ、アルは走り出す。

「アル？」

友達が危ない。

その考えだけで頭がいっぱいだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

（やばっ、息が・・・！！）

海を泳いでいた鈴は突然脚を攣った。
準備運動を怠った罰なのか。はたまた他の何かか。
今はそんなことを考えるより、息がしたい。死にたくないと言う本能的な考えが強かった。

肺の中に溜めた空気は全てからだの外。
水の中で酸素を補給するすべはない。
鈴は必死にあがくが、それは全て無力だった。

掴む場所のない水の中。
あがけばあがくほど深みにはまり、沈んでいく。
やがては意識は薄れ、諦め、という感情が芽生え始めている。

助けて、アル・・・。

その祈りは届かない。
そう思い、静かに目を閉じようとした時だった。

ガッ
突然、手首に掴まれる感触が出てくる。
薄れゆく意識の中、鈴が見たのは少し小さな人影だった。

（アル・・・じゃないか・・・）

sideout

「――――鈴姉！」

鈴が目を覚ますと、そこには一夏と他女子生徒数人。
そしてどうしてか髪が、いや全身が濡れているアルがいた。
自分を呼ぶ声には安堵が含まれ、その顔の目尻にはたぶんだが小さな涙の粒が出てきていた。鈴は体を起こし、頭の中を整理し始める。

海を泳いでいた。
←
脚を攣って溺れる。
←
小さな人影が自分の腕を掴んだ。
←
気がつくと砂浜で倒れていた。↑今ここ

正直、どうなったかわからない。
自分が死んでないことだけはわかるのだが、誰が助けてくれたのだろうか。小さな人影しか見えなかった鈴は、アルが濡れていたことで全てを理解する。

「もしかして、アルが・・・？」

「うん。突然走り出してね。パーカー着たまま海に飛び込んだの。で、戻ってきたら背中に鈴ちゃんを抱えてて、さっきなんか必死に名前叫んでたよ」

「そ、そう・・・」

一夏の言葉に、アルを見る。
確かに着ているパーカーはぐっしょり濡れていて、しわが目立ち、今でもぽたぽたと水滴を垂らしていた。琥珀色の綺麗な髪も濡れて

おり、少し前に自慢していたアホ毛もしょんぼりとしている。本当にアルが助けたということを改めて理解した。

終いにはアルは泣き出してしまった。
まぁ、大声でという訳ではないが、ボロボロと大粒の涙を。助けることができて良かったと、生きていて良かったと。なにより、死なないでくれて良かったと、自分の手に涙を落していた。

そんなアルに、鈴はポンッと手を置く。
それに気付きアルはすぐに泣き顔のままだが顔をあげた。

「ありがとね」

「・・・うん」

sideout

その後、鈴はセシリアと女子1人に旅館へと連れて行かれた。
そのさなか悲鳴のような叫び声をあげながらアルに助けを求めていたが、本人も休んでおいたほうがいいと思っていたのであえて手を振った。

そしてアルは再び影のもとへ逆戻り。
濡れたパーカーを乾かしながら、予備のパーカーを着てまたディスプレイにかじりつく。やはり一夏の誘いは断り続けた。

本当は海になんて入りたくなかった。
本当は自分も溺れるんじゃないかと恐怖と不安でいっぱいだった。

しかし、友達を助けられないなら死んだ方がまし。
その考えの方が強かったからこそ、鈴を助けられたのだ。

今更だが、その気持ちと考えがないと泳げないと言うのも笑える。
昔は自由に泳いで回り、シャルロットにも教えていたほどなのにどうしてこうなってしまったのだろう。トラウマなんて克服すれば早いのに。
そんなことを考えていると、声をかけられた。

「アル、ここにいたんだ」

「シャル・・・とバスタオルお化け？」

「いや、これはラウラだよ」

「え、あ、ラウラ？どうしたの？」

「ほら、大丈夫だから。出てきなってば」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・」

そのラウラの声はいつもと違い自信がなく、どこか弱々しい声だった。シャルロットが振り返り、説得を試みている。そんな面倒なことをしているのを、アルは見ているのが面倒になった。

しかし、そう思ったところで止まった。
どうやってあのバスタオルを脱がせようか。無理やり？勇気がない。説得？シャルロットでも結構苦戦しているのに、自分じゃ到底無理だ。だがそんな時、シャルロットが行動に出た。

「しょうがないなぁ。なら僕はアルと遊んでるよ」

「ま、待てっ。私も行こう」

「その姿で？」

「うぅ・・・ならば脱げばいいのだろう、脱げば！」

ばばばっ

自分の身を隠していたバスタオルを脱ぎ捨て、ラウラは水着姿を見せた。黒く、レースをふんだんにあしらったそれは、一見すると大人の下着のように見え、いつもの降ろした髪は左右のアップテールに変わっており、正直アルは少し思った。

か、可愛い・・・。

もじもじとしたしぐさがそれをさらに強める。

これがあの勝気で常識が少しずれたラウラとは思うまい。

ラウラ本人は、笑いたければ笑え、と言ってくるが笑う部分なんてどこにもなかった。むしろ、そんな奴がるなら今すぐビームマグナムを撃ちこんでやりたいとアルは思ったほどだ。シャルロットも同じ意見で、おかしな部分なんてない。

「あ、そうだ。ちょうどいいからビーチバレーしようよ」

最初の方にのほほんさん達から誘われていたのを思い出す。

確かメンバーは3人だったはず。ちょうどこのメンバーで参加できそうだった。アルは2人を連れてコートへ向かった。

（あ、後で箒姉ちゃんのところに行かなきゃ）

とある事情を思い出すアルだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「箒姉ちゃんっ」

時間はあっという間に経ち、夕方。
ビーチバレーでラウラの顔面にボールが直撃したり、千冬と山田先生が乱入してきたり、海の家での大食い大会でアルが大勝利を勝ち取ったりといろいろ。そして今は切り立った崖の上に立つ箒に会いに来ていた。

「アル」

「・・・」

「どうした？」

「あ、いや。何でもないよ？」

箒の水着は一夏と同じ白。
年相応の水着であり、とてもきれいで可愛く見えた。
もっと言ってしまえば胸の辺りだろうか。当然アルも男なので、ついついそちらに目が行ってしまう。少しばかし目のやり場に困ったが、急いで目線を箒の目にあわせた。

今回、話しかけた理由はいたって簡単。
それは箒も知っているはず。むしろ箒の我儘から始まったと言ってもいい。

「束姉、明日箒姉ちゃんの専用機を持ってくるって」

箒の横にちょこんと座りながら話しだす。
沈み始めた夕陽を見ながら、ディスプレイを表示する。そこには箒の望んだ専用機『紅椿』の姿があった。

束からの情報であれば一角と同じ第4世代。
全身展開装甲で即時対応万能型。攻撃、防御、機動性、どれを取らせても一角以上のスペックを誇るそれは、一角の展開装甲の応用版が使われていた。

「姉さんは・・・何か言ってたか？」

「う～ん。『紅椿』のことを『白と並び立つ者』って言ってたよ。
たぶん、白式との2機での運用を目的にしてたんだと思う」

「そうか」

「あ、後、誕生日プレゼントだって。もうすぐなんでしょ？誕生日」

「・・・そう言えばそうだったな」

「束姉のこと、嫌いなの？」

「嫌い、と言えば嘘になるが、好きでもない。ただそれだけだ」

「そっか・・・ねぇ、箒姉ちゃん」

「なんだ？」

「僕ね・・・ううん、やっぱり何でもない」

「？　そうか。まぁ、明日は頼りにしているぞ。姉さんの助手なんだろ？」

「うん」

第２９話　海（後書き）

次回は・・・ついに大天災が来ます。
アル君と箒はどうなるのかなぁ～？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1034x/

IS　一角と少年　にっ!

2012年1月12日23時45分発行